
セコくて何が悪い！！

良いニヤニヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

セコくて何が悪い！！

【Nコード】

N3986P

【作者名】

良いニヤニヤ

【あらすじ】

金のために完璧人間を友人に持つ俺、金城求は、いつもどうり完璧人間の龍王寺刀神と一緒に帰宅していた。しかし突然、刀神の下に魔法陣が浮かびそして俺まで巻き込まれ異世界へ飛ばされてしま
う……

一（前書き）

勢いで書く

俺の名前は金城求、少し金にがめつくセコいだけの普通の高校生だ、今は学校から帰宅しようと思ってる所。

「刀神、一緒に帰ろうぜ」

こいつは、俺の友人、龍王寺刀神、頭脳明晰、容姿端麗、運動神経抜群という三拍子そろった完璧人間だ、その上こいつの家はずっと昔から続く刀剣の家柄らしく棒状の物を持ったら最強と言われるその家の中でも抜きん出た天才という。

しかし、こいつは友達がめっばう少ないというよりもこいつと友達になりたくても恐れ多くて慣れないという人が多くて、まともに話し出来るのは家族、幼なじみ、そして俺くらいらしい。

正直、俺は本来こんな奴とは友達になんかなりたくも無い。

全国模試で一位を取るくせに、俺と同じこの普通の公立高校に通ってるし、毎日告白されるくせに大抵は意味のわからん解釈をして自分がモテてないと思ってるし、全国大会で優勝したのを練習試合かと思っただなどと発言するし、嫌みかとしか捉えられない。

それでも、この完璧人間は人望があつた、そりゃそうだ性格が悪いわけじゃない、むしろ良いくらいだ少し嫌みな所があるが正義心に溢れ、困ってる人がいたらほっとけないという。俺が一番嫌いなタイプだ

では何故、俺が龍王寺刀神と友達なのかというと、こいつは運が

すこぶるいいからだ!!!

道を歩けば札を拾い、人を助けりやお礼にと株を貰うという謎の力でも働いてんじゃねえかと思うほどの金運を持っているのだ、さすが完璧人間。

つまりこいつと一緒にいれば、絶えず俺の小遣いは鰻登り、一緒に道歩いて地面に注意していれば一ヶ月は色々出来るほどの金が落ちているのだから。

そんなわけで刀神に笑顔バリバリで近づいていく、刀神はうん、と一言いうと帰路に向かいだした。

二

「なあ、求、どうしていつも地面ばかり見てるんだ？」

「金が落ちてるからに決まってるんだろ」

こいつは欲というもんが無いのか、妙にさわやかに歩きやがって。

「お金貯めてるのが、何か欲しい物でもあんの？」

「金」

「お前なあ……うわっ」

ピュンッ

そのときだった突然刀神の足下に魔法陣らしきものが突然浮かび上がる、俺は勿論ビックリ、さすがの刀神もビックリ、非現実が突如襲いかかって来たのだ。

そうだった……こいつは幸運だけど妙な事に巻き込まれる悪運もあるんだった……しかし、俺でなくて本当によかった巻き込まれるのは刀神だけみたいだし。写真でも撮れば高く売れたかもしれないと少し残念に思いながら突如出てきた魔法陣と刀神を観察する。

どうやら動けないらしくこちらに助けを求めるような目でこちらを見ている、勿論助けない。

刀神の体が段々と薄くなっていく王道展開でいくとどこかに飛ば

されるのであろう、こいつが居なくなるのは痛いしかしあの魔法陣に入ったら妙な事に巻き込まれるのは間違い無いのでそれを考える
と助けないのが得策である。

だが、俺は見つけてしまった……魔法陣の中、刀神の足下、そこに札束がある！！

どうする、どうするよ俺、今までこいつのおかげで金は多く拾って来たがあれほどの量は見たことが無い、しかも諭吉さんだよおい。

なんか魔法陣に入ってる物は全部飛ばされるのか小さな石まで薄くなっていつてる、勿論札束も……

ああダメだ考えてる時間が無い、札束を取っておそらく異世界へ飛ばされるか、札束を取らずにこの世界に居るか……答えは勿論。

「札束ああああああああ」

こうして巻き込まれた。

暗い闇の中を刀神と一緒に落ちていく、そして着地。

何故か少し遅れて落ちてきた刀神に下敷きにされてしまうが、札束を握りしめている俺に怒るという感情は無い、むしろ大金を手に入れた事で機嫌はすこぶるいい。

手の札束をあやしたい所だが、そもいかない様だ、周りは神殿の様な場所で西洋風な服を着た偉そうなおっさん連中に囲まれていた。

「痛たたた悪いな求、しかしお前が助けようとしてくれるとは……」

俺の札束宣言は聞こえていなかったようだ、それはそれでいい、悪いのはこの状況だ偉そうなおっさん連中は何故かどよめいている、そしてどこから出てきたのか俺らと同じ年くらいの少女が現れた。

「初めまして、私コロナ王国第一王女、アリシア・コロナ・ボレアリスと申します、えっと……どちらが勇者様でしょうか？」

俺は速攻で刀神を指さした、こいつに決まってる、魔法陣はこいつの下にあっただんだし、嘘を吐いても得があるとは思えない、やっかい事はごめんだ。

アリシアさんは刀神の方を向くと話だした。

「勇者様はあなたでしたか、よかった……」どういう事だよ。

「実はですね……」

まあ、簡単にまとめると魔王が出たんだと、それを倒してほしいんだと、勇者には光の力がやどってるんだと、だから召還したんだ

と。

「お願いします勇者様、我が国……いや、世界をお守りください！
！」

アリシアさんは上品に頭を下げる、たぶんねえそんな必死になら
んでもこいつやったらやってくれると思うんよー。

「僕に出来る事なら是非」

ほら、やっぱり！このバカは二つ返事で今の所何のメリットも無
い頼みを聞き入れやがったよ、まあいい困るのはこいつで俺じゃな
い俺は俺の聞きたい事があった。

「帰りたいんだけど」

「え……あの……」

アリシアさんは少し焦る。

「俺、巻き込まれただけだしどうやったら帰れるの？」

「すみません……一方通行なんです……」

………ハアアアアアア………

「ざっけんなよ！元の世界に返せよ……！」

「だっただだだって、今までで召還したのは勇者様だけで、どの勇
者様も帰る方法が無いって言っても、ちゃんと魔王倒してくれるか

ら必要無いって書いてあったんだもん……」

「だもんじゃねえんだよ！！俺は勇者でも無けりゃあ、お前らの勝手を許すお人好しでも無えんだよ！うぐう！？」

「落ち着けつて求……」

刀神に床に押さえつけられる、周りのおっさんはさすが勇者様とか言ってるし……俺が悪いのかよ……

「あ、ありがとうございます勇者様」

「いいんだ、それにこいつちょっとセコいだけで悪い奴じゃないんだよ」

納得いかない、しかし、俺は少し冷静になった、そして今一番重要な事を聞く。

「通貨は……」

「通貨……ですか？」

アリシアさんが少しビクついた様に聞き返す、それに俺は切なる願いを込めてもう一度聞く。

「この世界の通貨だ、円だよな？」

「ギルですけど……」

俺の心を支えていた手に持つてる札束が紙切れとなった今、俺は

ショックで気絶した。

三

目が覚めると見知らぬ天井だった、夢じゃなかった……最悪、最悪だ……こんな事なら札束なんて取らなきゃよかった、自分のセコさを初めて恨む。

しかし、俺のセコさはもう遺伝子レベルのようで右手には札束がしっかりと握られている。

「ははは……これいくらくらいあるのかな……」

元の世界に帰れない今、もうこの札束は紙くずでしかない、それでもいくら数える誰が落としたのかは知らんが俺がこんな事に巻き込まれた原因の一つだ、くだらない額だったら許さん。誰を許さないんだよ……

金勘定しながらノリツツコミをしてしまうほど俺は落ちてしまったらしい、思わずため息が出る。

ん？んん？五百万……五百万円ある！うおおおおお！帰れたらあ、帰れたらああああ悲しい！この大金が紙くずになったことがすごく悲しい！あのクソ女めえ！

……いや待てよ、一方通行ってだけで帰る道が他に無いとは言っていない、つまり帰れる確率はゼロじゃない、帰れる確率が1%でもあるのなら、絶対帰る方法を見つけ出してやる！後クソ女って思っただけでめんアリシアさん。

俺が決意を固めているとドアがノックされた。

「どうぞ」

メイドさんだぁ初めて見た。

「失礼します、目が覚めたようですね、直ぐにでも広間に連れてくるようにとのことですので着いてきてください」

そのままメイドさんに着いて部屋を出た。

広い、めっちゃ広いまゝ広間だからな、王様らしき人と王妃らしき人が派手な服着て並んで座っていた、その横にはアリシアさんがいて、両脇には騎士みたいな格好のひとや魔法使いみたいな格好の人、王様ほどではないが派手な服を着た人が皆こちらと先に来ていた刀神を見ていた。

王様が低くも威厳ある声を出す。

「そろったようだな、それでは始めよう」

すると一人のじいちゃんが前に出てきた、じいちゃんは王様に一礼すると次に俺達に一礼をした後、水晶玉を取り出した。

「今から魔力量をはかっています、魔力量とは人間の潜在能力、これが多ければ多いほど使える魔法が多いわけです、魔法使いになれるかどうかはここで決まるわけです、まゝ勇者様なら計るまでもなく魔力量はあると思いますが……それではこの魔導の玉に手

「はい、貴方は勇者様のご友人で勇者様と同じく魔王討伐に行くと聞いております、ちゃんと力を計らなければなりません、どうぞ」

は？魔王？討伐？

「ふざけんな！何が魔王討伐だよ、んな一文の得にもなんねえこと誰がするか！」

俺の言葉に皆ざわめき俺を見る、すると王様が低い声を出す。

「モトム……といったか？何故拒む、勇者パーティーに入るのは名誉な事だぞ？勇者と一緒に旅が出来るのだから」

「はあ？聞いてねえのか？俺は巻き込まただけだ、勇者といること何のありがたみがあるってんだよ」

「フム……しかしこれは勇者たつての希望だ、お前を連れて行きたいとな、だからお前に拒否権は無い、それにどちらにしろ魔力量はかかってもらうこの世界では言葉を話せるようになったらまず計るのが常識なのだ、それに魔力量が小さければ、行きたくても行けんぞ」

マジか！よし、頼む！頼むぞおおおお、魔力あんまりありませんように！

俺はじいちゃんの前に行き玉に手を乗せた。

『我を計りたまえええっえええ』

たしかに強そうだけど頭弱そう。ん？教える？

「教えるって何を？」

「武器や戦い方」

いらねえ……頃合いを見て逃げる予定だし……

「いや、いいよ、ケガしたら損だし」

「何を言うのですっつつつつっ！……！」うおう！ビックリしたあ！損した気分だ。

振り向くとあの時のじいちゃんがいた。

「ビックリしたじゃねえか、なんだよ玉のじいちゃん」

「玉のじいちゃんではありません、カプリコーンといいます、カプリと呼んでください」

「はあ……でどうしたんだ？カプリのじいちゃん」

「教えに来たのですよ私が魔法をタリウスが貴方にあつた戦い方を教えるのです」

「だからいらねえって強くなって何のメリットが……」

「メリット？メリットならたくさんあります魔物を倒せばお金貰えますし」

四

俺は今、猛烈にがんばっている。

『持ち上げよおおおお
リフト』

全長十五センチの明らかに子供用と思われる木で出来た杖を小石に向け叫んでいる、そう魔法です。

いやこれがまた難しい、魔力量微妙にあつたんだから魔法も微妙に使えるんじゃないの？なんて思ってたところけどっこい一度も成功しない、『リフト』という基本中の基本らしいこの魔法は杖の先にある物体を持ち上げるといいういかにも魔法って感じの魔法だ。

小石が少し動いたかと思うと動きを止める、もう何回見た事か、いやまだ二日目なんですけどね、カプリ爺の修業の前には筋肉（名前は忘れた）の修業で無駄に運動させられ疲労が溜まっていた次は体あんまり動かさないだろうと高をくくっていたら一回呪文唱える事に嫌になるほど疲れるのだ。

だが俺は耐える、三千六百万のためにも！

「貴方、才能無いですね……子供でも出来る超初級魔法なのに……」
うつせえ、けど才能無いのはわかってるけど俺にはやらなきゃいけない理由がある！

『持ち上げよおおおお
リフト』

うん、夜だよ、夜の修業は一時間位で終わったのにカプリ爺の修業は夜まで続いてしまった、疲れたよ、結局出来なかった、『リフト』^{シールド}以外にも杖の先に透明な物が出て攻撃をふさいでくれるという『盾』や杖の先から衝撃を出す『^{インパクト}衝撃』これらも初級だが全部ダメ。

最後にはやけになって上級魔法『^{ストレンジ・スクエア・ボム}奇妙で四角い爆発物』をやってみるが一時間動けなくなってしまった。カプリ爺は仕事が残ってるとか言つて自分の部屋戻っちゃうしどうすりゃいいんだ。

「金を生み出す魔法とかねえのかよ」

そう言いながらカプリ爺に貰った『ゴブリンでも分かる簡単スラスラ超基礎基礎初級魔法講座本・初級』（ちなみに文字や言葉は違うが理解出来る）という本をパラパラと開いていく、ん？これは……

「錬金術か……」

たぶん出来ない、でも出来たらうれしい、まだ挑戦してないし、もうやるっきゃない、ここでこのまま終われば疲労を溜めて終わりという俺の人生史上最強の得の無い日になってしまふそれだけは避けたい。

やりかたをしてみる、フムフム……まず……錬金術の本を用意します、それを見てやりなさい以上……

ざっけんなボケエエエエ今わかった！これ俺が悪いんじゃない、無くて本が悪いんだ、タイトル見て薄々大丈夫かと思ってたけどこれは大丈夫じゃない、大丈夫じゃないぞう、こんなアホ本のために俺の大事な人生の一部を無駄にしてたまるか。

俺は疲労の溜まった体にむち打って起こす、そして歩く、向かうべきは図書館だ、図書館がどこにあるのかはわからんが途中で人に会ったら聞けばいいだろう。

俺が一步一步怒りながら歩いていく、誰もいねえ……何だ？今日とはことん運悪いのか？いや、前向きに行こう運が悪いなんて気のせいさ！ほうら、次の角まがったらきつと親切な人が道案内してくれる！

「ん？求じゃないか、疲れてそうだけど何でそんな笑顔なんだ？」

確信した、今日は運が悪いみたいだ。

「どうだっていいだろ、お前は何してんだよこんな夜中に……」

よく見れば後ろにアリシアさんもいるし、もしこのままウフフな事をするために二人で歩いてるんなら一発殴っておこう、バチは当たらないはずだ。

「いや、実はなカクカクシカジカ……」

要約すると、今までアリシアさんと魔法の練習してたんだと、調子いいからこのまま剣道の練習もしようと思ったんだと、で、どうせなら真剣を使ってアリシアさんと模擬戦やろうって事になって刀

を探したけど無かったんだと、アリシアさんに刀を説明したらそれっぽいのが宝庫にあったような気がする、だから今から宝庫に向かうんだとって宝庫！？このストコドッコイは俺をさしおいて宝庫に向かおうとしたのか許せん、罰として俺も行くぞ！

アリシアさんに苦笑いされたり刀神に盗むなよとか言われた盗むかボケエ見るだけだ。

宝庫は地下にあつたらしくウネウネ歩いてやっと到着。

見た目は他の部屋と変わらないドア、けど他より重い作りになっているらしく、俺と刀神でがんばって開けた、これが宝庫……

中は薄暗くホコリが被っているそして武器が多い、どちらかと言うと武器庫じゃねえのかこれ？

「アリシア、刀はどこにあるんだい？」

「えっと確かこの辺に……あ、ありましたよトウシンさんそれも結構な量が」

いつの間にか名前呼び合ってるよこいつらいつから仲良く……まあ昨日か今日だろう。

刀神とアリシアさんが盛り上がってる間に俺はどんなものがある

のかなあと色々見て回る、言っておくが俺はセコいだけで盗みは大嫌いだ、小学生の頃親父に俺のみかん盗まれた事を思い出す、あの時は泣き叫んでやった。

色々見て回っていると一つの文字が目に入る『超錬金術魔導書』
まともな名前の本だ！しかも一応探していた錬金術の本、全体的に黒くて古いがその方が信用出来る、宝庫にあったんだし。

ちょっと覗いちゃおうかな、気になるし、別に嚴重に保管されてたわけでも無いし大丈夫だろう。

「あ！ちよつと、えつと……あなた！それを開けてはいけません！」

ええ……遅いよもう開けちまったよ、しかも開けた途端ブラックホールみたいな出てきてそれに飲み込まれた、そしてアリシアさんに名前覚えてもらってないよ俺。

ブラックホールに飲み込まれたらどこに行くかしってるかい？俺は知ってるよ答えは暗闇さ。

マジで暗えよここ何にもない、俺が目を閉じてるわけではない、何か無いかと手を前に出して歩くと何かあった、固い壁の様な物たたいてみる固い、指で弾いてみる固い。

「なんだこの壁、鉄か？」

ピンポン！

なんだ今のピンポン。

壁に付いていた手が急にぬれる、壁が液体に変わった、しかし目には見えないが崩れる事無くそこに壁の形のままそこにあるみたいだ。

「なんだよこれ水か？」

ピンポン！

「……」

何となくわかった、錬金術って書いてあったたぶんこの壁が何で出来ているか当てるんだろう、そして今日の運はこの時のためにおいといたんだと考えようあとは適当に言っていくだけだ。

「よっしゃああああああああ」

「求！大丈夫か！立ったまま寝るな！」

「ダメですトウシンさん、彼は今、魔導書の試練に挑戦しているのです」

「挑戦つて……」

「魔導書の試練に挑戦している者は他からの何事も受け付けません、起こしても無駄です、嘘だと思っなら刀で殴ってみてください、弾かれますから」

「わかった……起きろ求うううううう」

「やっと終わっとうううう……」

筋肉の修業は当分無しになった。

五

あれから二週間がたった。

・わかったこと

俺と刀神にはすでに身体能力がずば抜けてあるらしく、筋肉の修業なくとも大丈夫らしい、筋肉はあれでも国の騎士の中ではトップで全騎士長というのをやっているのだとか（指揮はしてなさそうだ）そして結局名前覚えられなかった、ごめんよ筋肉、反省はしてない。

あと俺には魔法の才能がずば抜けて無いらしく、カプリ爺にも見捨てられた、あれでもあの忙しらしい、そういえば魔導書の試練をクリアしたらその分野は、ほぼ完璧になるらしいが、俺は何故かその時の記憶が曖昧だ、何か強いショックを受けたらしいと聞いた。

・出来るようになったこと

なんと『持ち上げの魔法^{リフト}』を出来るようになった。それだけ。

師、二人に見放され、こうなったらもう魔物倒した方が得なんじゃないかという事に気がついた俺は城を抜け出し城下町のギルドにやってきた。

「広え」

外観は豪華で中も広いさすがは首都にある公共施設、金がかかっている。

受付にギルドカードを作りに行く、これが無ければ魔物を倒しても金は入らないらしい、これは身分証明にもなり便利なんだそうだ。

俺はギルドカードを作り受け取ると直ぐに依頼を受けた、依頼はそれに基づいてこなすと報酬が出るというナイスな制度だ。

受けた依頼は中級の魔物『レッドネイルベアー』の討伐、なんと報酬は十万ですってよ！聞きました奥さん十万ですってウフフフフフフフフフフ。

あゝ嬉しい、なんて簡単に金が入る世界なんだろうか、元の世界にいた頃は考えれば地獄だったな、少ない小遣いでチマチマチマチマしていたもんだ、しかし、もう違う！動物殺せば十万円の世界に居るのだありがとおおおお神様！

森に着いた、ここを適当に進んでいけば十万円に……間違えた『レッドネイルベアー』に会えるとのことだ、ルンルン気分が進んでいく。

途中、低級の魔物が多く出てくる、しかし弱い、杖をポケットに入れてるだけの軽装の俺に蹴り一発で死ぬほどだ、ギルドカードのポイントが溜まっていくのを見ながらニヤニヤしてしまう、ギルドカードには数字が書いてあり、低級、中級、上級と分けられていく

らしい、このポイントはギルドで金と引き替えられる、ナイス制度！

お、また俺の蹴りの犠牲になる低級魔物ちゃんが居る！小さい犬みたいな風貌の魔物（名前は知らない）を助走をつけて蹴る、はい、ポイントゲッツ。

犬っぽい魔物が結構なスピードで飛んで行く、まあ木かなんかにぶつかるだろう。

予想どおりぶつかった、だが、ぶつかったのは木では無い熊だ、熊がこちらを向いた、おお！あれか十万円魔物は！よしちゃっちゃと終わらせよかあ。

でけえ、近づいて見るとすっげえでけえ、そんなもって怖い、爪が血みたいに赤くて、なんか知らんが怒ってる、殺気を感じる。

それでも十万円は逃せねえ！俺は今日から自慢になった蹴りで攻撃した。効かなかった。

やべえよ、やべえよ超やべえよ、俺の最高の攻撃でビクともしてねえよ、逃げるか？でも十万があ……それに、攻撃したからなのか怒っててどうにも逃げられる感じじゃない。

冷静に考えれば俺は身体能力が高いだけだ、蹴りが効かない時点で逃げるべきだろう？いやいやいやいや十万逃すか普通？逃さねえよな？うん、逃さねえ！！

じゃあ、どうやって倒すか……うおっ！

ビックリした、糞熊がいきなり攻撃してきやがった、後ろの木が

えぐれとる、避けてよかった。

『どうする……せめて魔法でも使えたら……魔法？そうだよ』
リフト
持ち上げの魔法』使えるようになったじゃん俺よく思いついた、やつぱり天才だな俺。

『
リフト
持ち上げよ！』

糞熊が空中に浮いて暴れている、ナーハツハツハ、見たか俺の力！後はスキを見てどついていけば良いだけだ！後、今度からは刃物を持ってくるようにしようそっちの方が楽出来る。

十万〜十万〜楽しみだな〜、鼻歌を歌いながらスキップしている俺は森からずっとこの調子だ、十万が楽しみで仕方が無い。

この調子ならもう一匹くらいいけたのに、依頼は一つしか受けられないってのが難点だな。

ギルドに着き受付へとスキップする、受付のお姉さんの苦笑いも清々しい。

「こ、こんにちは、どのようなご用件でしょうか」

「依頼を〜達成しま〜した〜報酬ちようだい！」

「ち、貯金しますか？それとも現k」

「現金でっ！」

金は現金に限る、見ていて楽しいし、貯金は信じられん、幼稚園の時のお年玉を貯金するとか言っておきながら全部使われたのを知った時は暴れ回ってやった。

でも低級の魔物倒した分の金はそのままでもいいや、いつでも引き替えられるらしいし今回は十万だけでもう、ウハウハだからな！

「そ、それでは報酬の一万ギルになります、ありがとうございます
た」

やったあ十万ギr……………ん？いち……………え？いち？

「お、お、お、お姉さん、やだなあ、ははは……………十万ギルでしょう？何言ってるんですか」

お姉さんが、お前が何言ってるんだって顔してる、でも一万のはずがない見間違っわけない十万のはずだ絶対！

「お客様の報酬は確かに十万と書いてありましたが、そのまま十万ギル渡しては国や世界はやっていけません、税として九割は国に納められる事になってます」

……………ハアアアアアアアアアアアアアアアアア九割？九割！
？九割っていやあ九十%じゃねえか！まてまてまて、ただけだよ
おかしいだろ、マジかよ九割って！？十万円の働きをしたんだぞ？

それが一万円にザ ケンナ

「ザッケンナアアアア寝言もたいがいにしるお！九割は税だあ？何が税だよつ糞王共の派手な服やらなんやらに使われるのがオチだろうがボケエエエはよ十万、耳そろえて払わんかい！」

「く、糞王！？それは不敬罪にあたいます！だれかこの者を牢屋にぶち込みなさい」

「不敬罪？知るかああああ十万よこせええええええ」

なんかゴツイ服着た人に地下の牢屋に連れて行かれた。

何故、何故こうなつたんだ、俺は悪くない、消費税の5%を払うたびに機嫌が悪くなる俺が九割と聞いて人殺さなかったのはよくやった方だ、むしろほめて貰いたい。

褒めてくれる人は誰もいない、牢屋に連れてこられたが俺以外誰もいないようだ、ギルドは警察業務もかねてるからそんな場所の牢屋に入るような事をする奴はいないってか、ほっとけ。

「ああ、十万……」

「お困りの様だね」

……誰？いきなり現れたのは全身黒っぽい服着た仮面をつけた怪しい人、声的におっさんだろう、怪しすぎるぜおっさん、そしてどっから入って来た。

「まずは自己紹介をしよう私の名前はコルヴィス闇ギルド『暗闇鴉』のボスだ」

「えっと……金城求です……で、おっさん何か用？」

「フフ……実はねスカウトしに来たんだよ」

「スカウト？」

「そう、暗闇鴉はしってるだろう？是非ほしいと思ってね、王を糞王と言う、それもギルドであんな大きな声で！すばらしい！それを言った理由も、そして君は金が大好き金のためなら危険を顧みない違つかい？」

「いや、あってるっちゃああってるけど」

「では、是非うちに来てくれたまえ、きつと君は役に立つ、私は人を見る目はあるほうなんだぞ！」

すごい褒められてる、ちょっと嬉しい、だが一番気になる事があった。

「それ、金になんの？」

「金になるかって？あたりまえだ！闇ギルドは正式なギルドには到

六

金というのはなんて素晴らしい物なのだろうか。

これがあるだけであらゆる物との等価交換を可能とする、あればあるだけ困らない、この世で最高の物それが金だ。

ボスに本部つて所に連れて行かれた後、黒い仮面と服を貰いさっそく麻薬任務をやってみた手のひらサイズの麻薬を運んだ時間、約十分だった。

その距離で本当に五十万貰えた。

初めてこの世界で金を手に入れた、それも五十万、物価は日本とそんなに大差らしいし（これも勇者の文献とかいう物から得た情報）そう考えると裸の大金持っている事が少し怖くなってくる。

五十万を受け取った後、熊倒した事を思い出した、あれは本当に無駄な労力だった、そしてナイフが何かあったほうが便利だろうと思ひ俺は城にいた筋肉（やっぱり名前は忘れた）にねだった所、お前は素手が一番と言われ、その後、無視された。

カプリ爺にもねだろうかと思つたがポケットにある明らかに子供用のを与えられたように、また子供用を与えられるかもしれんと思つてやめといた。

知らない人に武器くださいとも言えんし、他に知り合いといえは刀神、こいつは却下、宝庫に向かつてる途中にどの位、魔法が出来るようになったか聞いたら、中級までは全部出来るなどとほざいて

から俺の中での評判はすこぶる悪い、アリシアさんは……名前覚えてもらってるかな……まだ覚えられてないとなると俺が精神的に損をするので危険な橋は避ける。

ボスにねだれば良かったんだろうが、俺が言う前に時が来たらまた迎えに来ると言つて、俺をギルド前まで『瞬間移動』テレポーテーションさせた、そういうえば糞王事件はボスの部下がギルドの中にもスパイとして居るらしく、そいつが事件をもみ消してくれたみたいだ。ありがとうボス！

というわけで俺は今、市場に居る、五十万はもったいないが気分的には今すぐナイフが欲しい、俺は欲とその場の勢いで行動する癖があるので気を付けようと思ったり思わなかったり。

コロナ王国は商業国に入るのか夕方の市場はめちやくちや賑わっていた、旅の商人なんかが露店も出している、祭りか何かかと思っただぜ！

つい何かはわからないがおいしそうな物が売ってる露店に並びそうになるが、ガマン、近くにあった武器屋に入る。

「いらっしやい！何をご希望で？」

「ナイフ、なるべく安い奴ね」

店主は、はいはいと言うとナイフが並んでる場所に案内してくれた。

「でもねえ、お客さん、ナイフって言っても安すぎるのは全く役にたたねえよ、杖で殴ったほうがまだマシだね」

そこまで酷いもん商品にすんなよ。

「ん？お客さん、腰のもん見せてくれるかい？」

「腰のもの？ああ、杖かいいよ」

店主にポケットに雑に入れていた杖を手渡すと、店主はその杖をクルクルと回した後、笑い出した。

「あつはつはつは、お客さんなんだってこんな物持ってるんだい？」

「こんなもの？」

「こりゃ、おもちゃだよ、おもちゃ、子供が持って遊ぶやつだね、一応、杖としても使える事は使えるだろうけど、『持ち上げの魔法^{リフト}』打つのが限度だね、知らないで持ってたのかい」

おもちゃ？カプリ爺……俺になんの恨みが……せめておもちゃじゃないやつくれよセコいやつめ。

「と、とりあえず、ナイフと杖、適当に選んでくれ、もうそれ買うから」

俺はなんだか恥ずかしくなって投げやりになってしまった、普段なら物選ぶ時は人一倍注意するのに。

「まいどあり、じゃあ『普通のナイフ』五万ギルと『普通の杖』十万ギル、合わせて十五万ギルね」

たけえええええええ、五十万が三十五万に……痛い出費だ……

「またきてね」すまん、もう来ないと思う。

城に帰ると真っ先にカプリ爺の所へと向かう。

「おいこら爺！お前のくれた杖、おもちゃじゃねえかどついう事だこらあ！」

カプリ爺は驚いた様な顔を浮かべた、ばれないとでも思ってたのか。

「よく気がつきましたな、しかし今はそれどころじゃありません、明日、勇者様が旅立つのです、その前夜際を広間で行うのですよ、明日にはパレードですし」

何？前夜際だと！？全然知らなかった、市場のは本当に祭りだったのかもしれない、なにわともあれ、前夜祭、しかも王宮でのとなると豪華な食事が出るはずだこれは出ておかないと。

広間に着くと刀神が色んな人と握手していた、その隣にはやっぱりアリシアさん、あいつら出来てんのか？

とにかく今は食事だ、予想通り豪華な物ばかり大量にある、それを勝手に取っていいらしい。

勿論、遠慮はしない、ただ飯は食わして貰ってるがこんな豪華なのは見たことがない、それに城を散歩していた時に聞いた話だと、刀神は王様、王妃、アリシアさんと一緒に豪華な飯を食ってたらしい、さぞかし良い物を食わせてもらったんだろう。

ちくしょう、やっぱり一緒に行動した方がいいのかなあ……その方が得あるだろうしなあ……

よし、俺はまだ刀神のおともの一人名のか確認してみよう、刀神も握手を一段落終えてアリシアさんと話してるし。

「なあ刀神」

「ん？求じゃないか久しぶりだな」

「久しぶり、所で俺の事についてだけどさ」

「ああ、お前嫌がってたからな魔王討伐は来なくても大丈夫だ無理矢理連れて行くような事して悪かったよ、ちゃんと王様にも言っておいたから安心してくれ」

マジかよ……今日厄日だろ絶対、五十万円の時以外厄日だろ絶対、アリシアさんも何ホツとした表情してんだよ、いや、分かるよ分かる、俺に苦手意識持つてるのも分かってるけどやっぱり傷つくよ、

三十五万持つてなかったら刀神を一発殴ってる所だ、殴れないだらうけど。

「じゃあな、僕はまだ挨拶回りが残ってるからな」

そう言つて去つて行きやがった。

「胸焼けかこれ、頭も痛いし……」

昨日、食べ過ぎたせいか体がだるい、どんな物でも食べ過ぎは損つて事を学んだ。

俺がまた一つ賢くなった所でドアがノックされた。

「どうぞ」

メイドさんだあ、久しぶりに見た。

「失礼します、目が覚めたようですね、直ぐにでも広間に連れてくるようにとのことですので着いてきてください」

これも久しぶりに聞いた気がする。

広間ももう見慣れたものだ、それでも広さと人の多さには少し圧倒されてしまう。

その後、全員そろったらしく、始まって、色々してた（覚えてない）で、今なんか刀神が勇者の剣とかいう物を王様から貰えるよって所だね。

「ただけません王様」

「何故かね？これは勇者が代々受け継いできた伝統ある剣だ遠慮することはない」

そうだ貰えるもんは貰っておけ、いらなら俺にくれ。

「僕、刀しか使えませんし……それに、これがありますから……」

宝庫からパクってきたの使っつもりかよ、それは返しとけよ。

「大丈夫だ持つてみなさい」

王様がわざわざ立って刀神の元へ行き、勇者の剣を渡した、刀神がそれを持った瞬間、勇者の剣が光り形が変化していく、やがて止まると純白に金色の飾りが付いた刀へと変化した。

「これは勇者の剣と呼ばれているが正式な名称は無い、代々勇者に

よって形を変え名前も代々違う、名前を付けなさいそして、その剣の新しい主となりなさい」

刀神は刀を握り目を瞑ると一言つぶやいた。

『龍白刀』

次は一瞬、光ったかと思うとすぐにおさまった。すると拍手が巻き起こった、皆喜んでいるようだ。

次にカプリ爺が出てきた、なんか袋を持っている。

「これは、魔法の袋といしまして、見た目よりもずっとたくさん入るですよ、中身は銭別です、どうかお使いください」

刀神は断っていたが、カプリ爺が皆の気持ちだと言うとしぶしぶ受け取った。いらねえならくれ。

「フム……それでは今からパレードだ、皆楽しむとよい、以上」

王様の一声で皆騒ぎ出す、皆が一斉に刀神とアリシアさんの方へと向かっていく。

なんでアリシアさんも？ いや、それよりも刀神は何時の間にみんなとあんなに仲良くなったんだろっ、そして俺は必要だったのか？ 出来れば部屋で寝ていたかった。

パレードの主役、刀神が遠くに見える、城は高いからよく見える
だろうと城の俺が行ける一番高い所から、何となく見ていたが、も
う結構遠くに行ってるらしい、あ、見えなくなった。

「貴方はこれからどうするつもりですか？」

何時の間に後ろにいたのかカプリ爺がいた。

「勇者様とアリシアさまが旅立った今、貴方を住まわせる義理が無
いと王様が申しております」

そうか……追い出されるのか……しかし、そこまで困る事では無
い、三十五万あったらしばらくは暮らせる。

「じゃあ、荷物まとめてくる」

「ここにありますが」もう用意してあんのかよ。

俺、嫌われてるのかもしれないな。

「杖とナイフと……あれ、三十五万なかったか？」

嫌な予感がする……

「三十五万？ああ、確かにお金はありましたな、私が見てない間、
勇者のために餞別を作っておくだなんて、その辺りだけは関心しま
した、ちゃんと渡しておきましたよ、貴方もその場にいたでしょう」

俺はボーゼンとカプリ爺を見た後、ダッシュで城出る、そしてダッシュで刀神を追いかける、怒鳴る気力も無かった、あれが無ければ何時迎えに来てくれるのか分からないボスを待つだけになってしまっ、必死で追いかけた。

結局、追いつかなかった、目から何かが出てきた。

七

金を稼ぐという事は大変である。

ましてや、社会など知らない高校生で、常識も無い異世界人なら、なおさらだ。

あのクソボケ（カプリ爺）のせいであのクソボケ（刀神）に全財産を取られ、無一文になった俺は、路頭に迷っていた、とにかく金が無ければ何も出来ないというのは十分知っているので、金を稼ぐために働く必要がある。

ギルドは何をするにしても、やはり九割とられるというので、気に入らないから却下、バイトなどの貼り紙を出している所があったが、一度まとまった金をもった俺は時給六百ギルじゃあ納得はいかない。

結果、暗闇鴉を探す事にした、本部があるということは、支部もどこかにあるという事、ましてやコロナ王国のこの城下町は路地裏を通れば廃れている所はたくさんあった、必ずどこかにあるはず。

夜という事もあって薄暗い店が建ち並ぶ狭い道を暗闇鴉を探しながら黙々と進んでいく。

勿論、見つかるはずもない、夜までずうずうつと探して、見つからないんだから、至極に腹が減り、喉が渴き、眠気も襲って来ている、食い逃げでも……いや、それは最終手段にしよう、金がかからないで出来る事と言ったら寝る事くらいだ。

ダナゼダナゼダナゼダ、サンジユウゴマントラレ、ゴマンノ
ナイフモトラレ、ジユウマンノツエマデトラレ、アゲクノハテ二ハ
ドレイニナル？イヤダイヤダイヤダイヤダイヤダイヤダイヤ
ダイヤダ。

「イヤダアアアアアアアアアアアア！！！！！！！」

俺の中で何かがはじけた、たぶんストレスだろう、よく考えれば
杖とナイフがあるうちはまだ無一文とは言えなかった、売れば金に
なるしな、それが無くなった、しかも奴隷、限界だった。

後ろでガチャリと音がする手錠外れた！？何で！？でもいいか、
はずれたことは悪い事ではない、何かさっき叫んだ事が恥ずかしく
なってきたし直ぐにでも脱出したい。

ガシャンッ

「ふいふやっとなつたぜえ」

目的地に着いたように揺れが止まる、気がつくともうほとんどの
者があきらめたのか叫んでなかった、扉が開かれると大きな袋を担
いだ背の低い男が一人いた。

「ようっし静かにしてるみたいだな」

そう言つと男はお前達はこれから奴隷になるための教育を受けて
貰うぜ！とか言ってるが、どうでもよかった、それよりも、この男
が持つてる袋、俺は確信した、絶対あの中に絶対俺の私物が入つて
る勘だけだ。

でっかい火の玉がこっちに飛んでくる、終わった……終わったよ俺の人生、手に入れた一番高い金額は五百万円、それは紙くずになり使えないし、自分の力で手に入れた最高金額は五十万ギル、杖とナイフを買ったが使ってない上に取られる、残りの三十五万ギルも取られる、一番うれしかった事は五十万ギルを手に入れた事、一番悲しかった事は今日の出来事全部、一番傷ついた事は高校生になり何故かデートをすることになって、のど渴いたからカフェに入ろうって言われたから、もったいないから水道水ですまそうと言って公園連れて行こうとしたらキモすぎって言われた事。

大富豪になりたかったなあ……ああ、この世の皆様、先立つ不幸があなたたちに降りかかりますようにお願いいたします。

目をつぶるが待てども待てども死なない、薄めを開けて見る、誰かが守ってくれているようだ。

「ボ、ボス！？どうしてここに……いや、それよりもどうして邪魔するのです！？」

守ってくれた人をよく見てみるボスだ、たしかにボスだよ！右手に持っている杖から『盾』^{シールド}が出ている、それで守ってくれたのだらう。

「こいつは仲間だ、許してやってくれ」

ボスと黒フードが色々話を進めてるみたいだ、ボスがこちらに向き直った。

「どうしたんだお前、家無いのか？」

無いっていうか無くなったって感じた。

「まあ、色々ありまして」

「一応、組織員専用の寮がある、狭いがそこをあてがってやろう」

さすがボス、もうあんたは救世主にしか見えん、怪しいおっさん
だけ。

『テレポーション
瞬間移動』

今日は色々あって疲れた、まだ夜で、ほとんど寝てなかったみたいだ、明日はいいことがありますように、せめて金をかせぎたい！！
！

ボス達が偽札、いや偽硬貨を作っている間は任務に出ていたりしていた、暗殺任務なんかは簡単に大量に稼げた、目標を殺すだけでいいのだから。

だが、目標の人間もバカじゃない、自分の命が狙われているのいう自覚があるのか用心棒を雇っていたりする、それでも簡単、細いひもをナイフにくくりつけ、ナイフを目標に向かって投げるだけ、後はひもを腕をクルクル回しながらナイフを引っ張り戻して、後はダッシュ、これが一番体力を使わないで、なおかつ経済的な殺し方、魔法なんかも試してみたがやっぱり『持ち上げの魔法^{リフト}』しか使えなかった。

任務を一通り終わると自分の自宅へと足を向ける、魔法陣のお礼にと、本部からほどよく近い場所に家を建てて貰った、大きい買い物に苦手な俺にはこのプレゼントは嬉しかった。

最近知ったのだが、ここはコロナ王国では無いらしい、コロナ王国の東に位置するここは、カネス王国といい、魔法と武の国なんだとか、それで強い人が多く、この国には魔物はほとんど居ないんだそう、勇者なんか召還している暇あったらみならえコロナ王国。

自宅に帰って来た、ポストを見ると、新聞が一枚、何故一枚だけ？普通それなりに厚さがあるもんじゃないか？それよりも新聞とつてないし、金からないだろうな。

不審に思いながらもそれを手に取り家に入る、リビングに行き、テーブルにそれを投げると、ソファに横になり伸びをした、手を伸ばしそれを見る。

「何々……」

□

号外

勇者様バンザイ！！

最近、偽硬貨が出回っているのはご存じだろうか、それも十万ギル硬貨である、十万ギル硬貨を作れるのは世界鍊金物質委員会という世界の鍊金術師のトップが集うその人たちだけだ。

それがどうにも高度な偽物を作れるほどの鍊金術師が居るらしい、この偽硬貨に初めて気がついたのは世界鍊金物質委員会の一人であるビクターさんだ、彼は本物の十万ギル硬貨を作っている一人で、彼によると、自分の魔力が全く感じられない、むしろ邪悪な魔力を感じるとしている、今、世界中のギルドが犯人を捜しているが、わかった事は裏の者だという事だけ、見つけるのは相当時間がかかるという。

ここまで来ると、もう、新しい十万ギル硬貨を作った方がいいというのが世界の国々の王の考え、そこにアイデアを加えたのが、勇者様その人である、彼は紙を使う事を審議にだした、紙に絵柄を描くことで今までよりも偽物に気がつきやすくなり、コードと呼ばれる数字や文字を並べる事で、それが何時作られた物なのか、本当に正式に作られた物なのかを作った本人でなくとも調べる事が出来るとしている。

国々の王達はこれに関心をしめし、早ければ一週間後にでも、すべての硬貨はすべての紙、紙幣になるとのことだ、なお、これにより勇者様に感謝として宝を授けようとした所、そういうつもりで言っただんじやないと申し、宝を受け取らなかったそうだ、さすが勇者様バンザイ！！」

なんじゃこりゃあああああああああああああ。

俺はソファから飛び起きた、そりゃそうだ、家の地下に閉まっている全財産がすべてパアになるかもしれない、またあのポケナス（刀神）せいで俺の金がなくなる、そんな事は絶対にさせん！とにかく情報収集だ！こういう事はボスが詳しいだろう、というか他に頼れる奴がいらない、俺は新聞を持って、本部へと全力疾走した。

ボスの部屋にノックもせず入る、ボスは一瞬驚いたが、やっぱり来たかという顔をした。

「ボス！やべえよ俺の金があああああつあああコツコツ貯めてきた俺の金がああああつああ」

「落ち着け、モトム、事情は分かっている」

なんでボスはこんなに落ち着いていられるんだ！？金だぞ？パアになるんだぞ！？

「だが、今回の件に関してはあきらめろ、暗闇鴉はお前が来てからずいぶんと楽が出来た、それだけで十分だ」

「十分じゃないでしょうがっ！俺の金はどうなるんです！！」

「……いいか、モトム、我々のように現金をそのまま大量に持っている人などいない、大抵の人はバンクに金を預けている、そこから

使う分だけ引き出すというやりかただ、だが、我々はそういう公共施設を使う事は出来ない、犯罪組織だからな、硬貨と紙幣を引き替えてくれるかもしれんが、我々が持つてるのはほとんど十万ギル、それが現金で大量にあつたら怪しまれるに決まっている」

「じゃあ……」

「今から使うのもダメだ、お前も十万ギルばかりだろう、今、十万ギルを怪しまれずに使えるなど、武器屋によつた旅の者だけだ、今回はあきらめる」

「そんな……」

絶望だった、がんばって溜めてきた金が鉄くずになる、それに、紙幣ともなり、番号まで付くと錬金も出来ないだろう、俺は握り拳を作る、手から血が出てきた。

ギルが紙幣に換えられてから一週間が過ぎた、俺は死にものぐるいで働いた、紙幣に換えた事で裏の組織など全体は大打撃に見舞われたらしいが、それでも暗殺の仕事は絶えなかった、それが一番金になる仕事だしよかったのだが、報酬の量は落ちていた……仕方のない事かもしれんが……

くそおおおおおお、鉄くずになった金の事を思うと涙が出てくる、紙幣を錬金してみようと思ったけど出来なかったし、裏家

業は大不況だつて言うし……もおおおおおおお、俺はこれだけがんばってるんだ！何かうまい話でも無いのか！！！！ボケエエエエエエエエエ。

「報酬、一億ギルの任務！！！！？」

「ああ、そつだ」

うまい話が舞い込んで来たああああ、あの鉄くずを上回る任務があるとは！

「内容はカネス魔法学院、学院長オルクスの暗殺」

暗殺だけで一億……又フフフフフフ久しぶりにテンション上がってきたああああああ。

「これは安易ではない、オルクスというと雷撃のオルクスと恐れられ、魔法でも武術でも最強クラスといわれる者だ、暗殺など出来る相手では無いが……やるか？」

「もちのろん！一億逃がすバカはいねえ！！」

「まあ気を付けておけ、後、お前は教師としてカネス魔法学院に忍び込む事になる」

……………は？

「教師？何で、暗殺任務なのに？」

「これは依頼主の配慮だ、オルクスを殺すとなるとスキについて、

いやスキすら見せないかもしれないん相手のスキについて殺さなければならぬ、そのタメには教師として潜って近づいた方がいい」

「教師の仕事もしろと……しかも俺、どちらかという生徒側なんじゃ？」

「その事については仕方がない、生徒だとそこまで近づけないだろうし」

たしかに校長先生ってあんまり見ない。

「それにこの任務が出来るのはお前しかない、何しろカネス学院は世界中から集まった秀才達が集う場所だ、そこで教師が出来る者などお前くらいだ、錬金術を教えてこい」

うーん、生徒の年齢と俺の年齢がどの位違うのか、など疑問は尽きないが、一億ギルのためならなんだってしてやる！！よしやるぞう！

「それとだな」

まだ何かあるのか。

「そこに息子がかよっているという貴族からの依頼だ」

貴族！？金の臭いがプンプンするぜウヒョヒョヒョヒョヒョ。

「息子の待遇が悪いらしいから学院をぶっ壊してくれということだ、まあそんな事したら学院の関係者を一気に敵にまわす事になるからな……断ろうと思っていたが、オルクスの任務と合わせると都合

だ、裏工作でもして待遇を良くしてこい、それで納得してくれるよ
う依頼主に言っておく、成功すれば貴族から評価が得られるしな」

「報酬は？」

「二千万ギル」

一億二千万んんんんんんんんんん。

「やります！！俺にやらしてください！」

「ウム、明日カネス魔法学院は、長期休暇が終わる、明日の朝早く
からカネス魔法学院に出向くように」

「アイアイサーー！！」

よっしゃああああああ一億二千万……絶対取ってやるぞお
おおおおおおおおおおお。

九

自宅から出ると、遠くの方に塔のような物が見える、相当高いのだろっカネス中どこでも見れるらしいそれは、カネス学院の一部である、雲突き抜けてんじゃねえか、なんだあれ？と前々から思っていたがまさか魔法学院だったとは予想つかなかった、カ○ン塔だとはかり。

塔との距離感が分からず、見える位置にあるんだしそこまで遠く無いだろう、と思っていたら結構遠かったらしく迷いはしないが一向に着かない、ボスが朝早くに行けって言ってたのはこのためか……

町の端っこの方まで来てようやく到着する、周りはこの生徒であるう、制服を着た人でいっぱいだ、そんな中で私服だと勿論目立つ、皆チラチラ見てくる。その中でも、俺以外にもう一人、妙に目立ってる人がいた。バーコードその人である。

俺が近づくとバーコードは一礼する、俺も一礼、この人がたぶん今回の依頼人であるレーゲンさんだろう、頭や風貌、雰囲気などですわらず課長と言いつうになるが堪える。

「いやはや、お待ちしておりました、モトム先生ですね？ささ、こちらへ……」

レーゲンさんに背中を押され学院の門を入っていく、そこからすでに広く遠くの方に大きな校舎などが並び、自宅から見えていた塔はより一層、大きさを増しているようであった。すると、一人の青年が俺達の前に立ちはだかった。

「ここからはカネス魔法学院の敷地内です、関係者以外立ち入り禁止となっております、まさかここで良からぬ事を企んでいるとは思えませんが……何かをするならそれ相当の態度を取らなければいけませんのでね」

制服の胸にバッチの様な物をつけた青年はこの生徒だろう、青年は俺達に杖を向け明らかに怪しい物に向ける視線を放っている、その隣でプルプルとレーゲンさんは震えていた、しかし怯えているわけではなく、むしろ怒っているようだ。

「杖を下ろしなさい……」

「それならば、早くここから立ち去りなさい……」

「私はこの副学院長だっ！杖を下ろしなさい！」

青年はそれを聞いたとたん意味が分からないといった表情をする、しかし、レーゲンさんの気迫に押されたのか道を開けた、やるじゃん、レーゲンさん。

レーゲンさんは、まったく、と一息吐き、歩き出した、俺はそれについて行く。

左の建物、教員棟と書かれた場所に入る、どうやらさっきの事を怒っているらしく、急ぎ足だ、そして、副学院長室と書かれた部屋に入った、質素な机と椅子が並べられ、棚が一つあり、そこに本が埋まっている、地味な部屋だ、その椅子に座る。

「さっきはどうもすいませんでした……」

レーゲンさんは、最初とは違い、深いため息を吐いた、なんか可哀相、ガンバレ課長！

「いえ、いいんですよ、それよりも任務の詳細を」

「はい……さっきを見てわかったと思いますが私は皆から忘れられた存在なのです」

うん、それはよく分かる、少なくとも目立つ人じゃない。

「仕方のない事です、この学院は世界中から生徒が集められ、それに見合った数の教師もいます、私なんて地味ですし覚えられる様努力したわけでもありませんね……ハハ……それでも、それでもアイツが来るまでは私は幸せでした……！」

突如、レーゲンさんの顔が般若の様になる。

「アイツ？」

「あのにつくきオルクスの奴です！教師歴二十八年！幼き頃から教師を目指し、教師になってからも毎日毎日、真面目に働いてきたし！副学院長も五年やっております！去年、学院長であつたピスケス老師がお亡くなりになり、私は次の学院長確実と言われていました……！……そりやそうですよ……副学院長が自動的に学院長になる決まりです……それなのに！アイツはなんですか！俺は……未来を守る必要がある……なんて言つて！私を差し置いて学園長の座につきやがったんですよ！教師歴もない若造が！勿論、王様に抗議しに行きました、でも却下されましたよ……雷撃のオルクスがやりたいと言つてるんだからやらせるべきだ、生徒のためにもなるであろう、ですって……教師つてのはねえ、強いだけじゃダメなんです、名声

だけじゃダメなんです、これでは私を副学院長に指名してくれたビスケス老師に申し訳がたたない……それにアイツは書類整理一つできやしない、その手の仕事は全部私に回ってくるんですよ……それですます生徒との接点が消え、しまいにはさっきのような事になるわけです……」

なんかすごい転落人生を聞いた気がする、可哀相な人だ、一気の喋って疲れたのか肩で息してるし、しかし、オルクスってのはそこまで強いのか、まあ死なない程度にがんばって殺そう。

「それで俺の事なんですが……」

「貴方には錬金術の教師としてやってもらいます、どういう風にすれば良いのかは後で教えます、それと話は聞いてますリッチ・サンジタリアス君の事ですが貴方を彼の担任にしておきました、これで裏工作もしやすくなるでしょう」

「あれ？長期休暇明けって事で学年が変わったわけじゃないんですよ？元々担任だった人は？」

「消しておきました」

結構黒いなこの人。

「甘い事は言ってもらえません、もう、どんな手でも使うつもりです、私が死ぬまでには必ずやアイツを殺してください！出来る限り協力はさせて貰います！！」

物凄い勢いで頭を下げられる、とまどったが俺も頭を下げた、成功すれば一億くれる人だ、俺の評価は最初から敬意を表しても良い

ほど高い。

リンゴーンガーンゴーン

チャイムっぽい鐘の音が鳴るとレーゲンさんは広場に行きますと言いい部屋を出て行く。

広場は広く、たくさんの人が並んで立っていた、最後尾あたりはほとんど見えない、前の方には朝礼台のような物があり、その横に教師であろう人達がズラッと並んでいる、そして黄色の髪に黄色い目をした男が最後に来るとレーゲンさんは朝礼台に立ち、杖を前に掲げる。

『リザウンド・ボイス
響く声』

そうすると、杖の先を中心に波紋が広がり消えた。

「えゝ皆様、長期休暇はいかがお過ごしでしたか？私は皆の健康な姿を見れられて嬉しく思い――」

杖がマイクになっているのか、レーゲンさんの声がよく耳に届くが、悪いが誰も聞いてないと思う、ほら、アクビしてる人だって居るし、他は上向いてるか下向いてるかだ。

「では今回は紹介する方がいます、失踪したリンクス先生の替わりに高等部二年A組の担任を務める事になりますモトム先生です」

俺はお呼びだと理解し朝礼台が上がっていく、皆おどろいているようだ、いやゝどうもどうも。

「彼は優秀な錬金術師でたくさんの知識を持っておられます、ゆえに錬金術の教師もされるので教室で会う事になったら、見た目に気を取られず先生としてちゃんと挨拶しなさい」

こんどは杖を渡されあいさつするように言われる、適当にあいさつをし朝礼台を降りた、その後も色々喋ってる。

「では最後に……学院長からの……あいさつです……」テンション下がりすぎ。

朝礼台に一番最後にやって来た黄色の髪に黄色い目をした男が立った、こいつがオルクスか、確かに若い、二十代に見える。

「長い話も終わったし、特に話すことも無いし、解散っ！」

生徒達から歓喜の声が上がると皆ちりぢりに散って行った。レーゲンさんはため息を吐いていた。

緊張する、緊張なんて精神の損だと分かっているがそれでも緊張してしまう。

二年A組の教室前までやってきた俺は今更ながら緊張してしまう、ああ……なんで俺こんな所いるんだっけ？そうだ！一億！落ち着けえゝ一億のためだがんばれ俺、俺は一息吐くと扉を思い切って開ける。

視線が痛い、教室の外からは聞こえてきた話し声なんかが消え、あるのは俺への視線だけだ、立ち止まってても仕方がない、教壇まで歩き、教室を一度見回すと自己紹介をする。

「き、今日から皆さんの担任になりましたモトムです、よ、よろしく」

どうやらあまり歓迎されて無いみたいだ、前の担任が人気だったのか、俺が不人気なのかどっちか知らないが、歓迎されてない事はよく分かる、だって嫌そうにしている人や睨んでる人までいる。

そんな中でただ一人、歓迎ムードの奴が出てきた。

「おお！初めましてモトム先生！僕はリッチ・サンジタリアス、リッチ・サンジタリアスです、以後お見知りおきを！！」

金髪をオールバックにした奴が妙なテンションで自己紹介してきた、皆そいつの方をみて驚いている、あいつがリッチ・サンジタリアスか……まあ、シーンとなっていた教室に少しでも音が加わったのはありがたかった。

「よろしく、じゃあもうすぐ一時限目が始まるからがんばってね、バイバイ」

逃げるように教室を出ると逃げるように副学院長の元へと向かう、しかし、後ろからモトム先生と言われ、立ち止まってしまふ。後ろを振り返るとリッチが満面の笑みでこちらを見ていた。

「父上から話は聞いております、さっそくお願いしたい事があるのです」

早いな、待遇悪いとか言ってるらしいけど絶対こいつの我が儘だと思う。

「どうしたんだい？」

「明日、席替えがあるのはご存じですか？席替えはクジで決められ、一度決められると中々、次の席替えまで時間があります、そこで相談なのです、僕には好いている女性が居るのです、その名もカリーナ・デルフィヌス、貴族デルフィヌス家の長女です、僕とお似合いだと思いますか？フフフフ、しかしどうも席替えというのは、運命を無視するもののようで僕と離れるどころかルフトという僕の氣にくわない奴ナンバーワンがその隣を支配してるのです！！お願いします、彼女をルフトから離し僕に近づけてください、あ、勿論、僕と彼女の近くにはルフトを置かないでくださいよ」

まあ、要約するとカリーナって子と席、隣同士になりたいとルフトって奴は嫌いだから離してくれと、中学生、いや小学生かと言いたい、そういえば歳いくつなんだろ？

「わかったやってみるよ、ところで君、歳はいくつ？」

「ありがとうございます！歳は十七です、大丈夫、僕に協力してくれる限り、先生の歳なんて気にしませんよ」

俺が十六だから……年上じゃねえか！そういえば高等部って言うてたしその二年だから一つ上なのか……リッチはアハハと笑うと、そのままスキップでどこかへ行ってしまった。

疲れた……一億は遠いなあ………

十

二年A組の教室に入る、やはり歓迎された視線は感じられず、それでもなんとか教壇にのぼった。

ここ、二年A組には四つの勢力の分かれているらしい、これはレィゲンさん情報、百以上あるクラスの内の一つの情報を結構把握していた、学院長にもなれるレベルになると生徒一人一人の名前を覚えるくらいは当然で、各クラスがどういう風に成ってるのかくらいは朝飯前だという、普通にすごいと思った。

四つの勢力とは。

貴族であるリッチに媚びを売る、リッチの仲間達（リッチは下僕とと思っているらしい）、リッチ派。

ルフトのかっこよさ、美貌、実力などに引かれた、ルフトの仲間達、ルフト派。

カリーナのかわいさ、美貌、実力に引かれた人、プラス貴族に媚びを売っておこうという、カリーナの仲間達（カリーナは仲間だと思っただけらしい）、カリーナ派。

媚び売るかアイドルに群がるファンにしかねんのかと思ってる、お前らの喧嘩には巻き込まないでくれよ派。

俺は正直、お前らの喧嘩には巻き込まないでくれよ派に入りたい、でもその人からも歓迎されていないのが現状、そしてリッチ派でなければいけないのが現実、でも、二千万を考えると不思議と嫌じゃな

い。

黒板に背を向け、用意していた上に丸い穴の開いた箱を取り出す、教卓は無い。

「じゃあ、席替えをする、この箱からクジを引いて、その番号にあった場所がお前らの席だ、席はその席から一、二、三、とした順番、引く順番は名前順でいいよな？、じゃあ最初は――」

一人一人、前に出てきて俺の持っている箱からクジを引いていく、そして、カリーナが引く順番になった、実はこの箱、俺の錬金術で作った（魔法陣書いただけで、他はレーゲンさんにやってもらった）超高性能な魔導具などだ！なんと、少しの魔力を込めるだけで『押しつけの魔法』という物を押しつける魔法が箱の中で発動する仕組みになっている、魔力を流すまで指定したクジは箱の内側にくっついて取れないようにしてある、これを使ってあらかじめ指定もしておいた紙をカリーナに掴ませる、ただばれる可能性は否めない、手を突っ込んだら、無理矢理、手の中にその紙が入ってくるのだ、ばれない事を祈る、これが俺の限界だ。

カリーナが箱の中に手を入れた、それと同時に魔力を流し込む、すると、カリーナは何かに気づいてしまった様子だ、ダメだったか…… ああ二千万…… しかし、カリーナはこちらを向き、クスッと笑うと、クジを取り出しピラピラと俺に見せながら自分の席へと戻って行った。

どういう事？取ってくれたのかな？取ってくれた事を祈ろう。

その後も次々とクジは引かれていく、最後らへんになるとようやくリッチの番になった、リッチがニコニコ顔で近づき、箱に手を入

れる、魔力を流すとリッチは気づいたようで、何故かうんうんと嬉しそくにうなずいた、やめる怪しまれたらどうするんだ。

リッチがクジを持って、席の戻ると、最後にルフトの番になる、名前順で行くとこいつは損してるな……悪いとは微塵にも思ってた、いけど、最後の一枚になったらはがれるようにしてあった、それでルフトには絶対ばれてないはずだ。

全員のクジが引き終わり、皆が皆、移動していく、リッチとカリナは窓側、ルフトは廊下側というリッチの理想どろりになった、リッチは嬉しそくにカリナに話しかけている、ホームルーム中だし俺一応教師だし、注意したほうがいいんだろうか。

「こら、今ホー——」

「納得いかないっつ……!」

俺の言葉がルフトによって遮られる、皆ルフトの方を見て驚いている、普段はクールなルフト（レーゲンさん情報）が声を荒げているのが珍しいのだろう。

「フー……フー……落ち着け……落ち着け……」

ルフトは一つ咳払いすると、席を立ちこちらに向く。

「モトムとかいったな……この席替え……どういふ事だ……?」

どういふ事だっでどういふ事だよ。

「何か問題があるのか?」

「大ありだ……俺は気づいているぞ……リッチとカーリーナが引くとき……その箱からわずかだが魔力が出ていた……不正行為だ……大方、リッチに金で買われたのだろっ……」

全部ばれとる、この状況に気づいたリッチはドヤ顔でルフトの方を向く。

「カーリーナの隣になれなかったからと言って、根も葉もない事を言うのはよさないかい？これだから平民は嫌いなんだ、新任の、それも僕達とたいして歳が違わないモトム先生にそういう事を言うなんて、程度が知れるね、大体この席になる前は君はずっと連続で彼女の隣だったじゃないか……君が今まで不正行為をしていたって考えるほうがよっぽど自然だね」

「俺は不正行為などしていない……していたとしても今回で止める意味は無いはずだし……そもそも、お前が引くときうなずいていたのが怪しい……」ほらやつぱ怪しまれた。

「言うことはそれだけかい？とにかく、何の証拠も無いんだ、先生も僕もとやかく言われる筋合いは無いよ」

「その箱を調べればわかる事……」

そう言って、俺の方に近づいて来る、やばい……と見せかけてやばくなあっあぁあぁい！さっきも言った通りこの箱めちゃくちゃ高性能、使い終わったらただの箱になるようにしてある、さすが俺が作った魔導具！（魔法陣書いただけで、他はレーゲンさんにやっってもらった）

ルフトは箱を調べるが、もちろんただの箱を調べた所で何か出てくるはずもなく渋々戻って行く。

「俺は錬金術師だけど、そんな高性能な箱は作れない、そもそも錬金術の理論や魔法陣がわかるだけで、実際は作ることすら出来ない魔法も『持ち上げの魔法』しか出来ないしな」

そこに追い打ちをかけるようにリッチはニヤニヤと笑う。

「どうやら、証拠も無かったみたいだね」

「だが彼女は嫌がっている……クジで決めないほうがいい……」

「クジがダメ？それは最初に席替えをした時に言うべきじゃないのかい？クジで席替えをして、君は満足なら良し、満足じゃなかったらダメ、そんなのおかしいじゃないか！」

よし、いいぞ正論だ、がんばれリッチ！

「それに彼女が嫌がってるだって？それこそんでもない、僕と彼女は貴族同士だぞ？彼女が君のような小汚い平民にもちゃんと話を聞いてやるくらい、やさしいだけだ、本来なら君のような平民には話す事もままならない………なんだい？」

ルフトが杖を持ちリッチに向けている、そしてリッチとルフトの間にいた他の生徒に目を配らせると、他の生徒は隅に避ける。まさか打たないだろうな………打ったら学院の規則に違反するはずだよな？（レーゲンさん情報）ルフトは基本マジメなんだよな？（レーゲンさん情報）

「彼女は君のような成り上がり貴族が大嫌いなんだ……俺も同じだ……彼女から離れる……」

「本気で打つ、つもりじゃないだろうね？大体、君に彼女のなにが分かるんだい？君のような失礼な平民は指でもくわえて——」

『ピアス・デストロイ・ビーム
貫く破壊光線』

打ったよ、打ちやがったよ！しかも上級魔法！ちなみに初級は『リフト』や『ファイア』など中級が『ファイアリフト』と二つ魔法を組み合わせた物、つまり上級は三つを組み合わせた物だ、今回の『ピアスデストロイビーム』は、『ピアス』対象を貫くという魔法、『デストロイ』対象を破壊という魔法、『ビーム』対象に光線を出す魔法、なので合わせると貫く破壊光線となる、これは完全に殺す勢い、笑えない。

リッチはルフトの魔法を目で追えていない、つまり俺が助けにいかねばならない、命に代えても守るぞおおおお！二千万を逃してたまるかあああああ！

リッチの手を引き、なんとか避けさせる事に成功、身体能力上がってなかったら危なかった……

クラス中がこっち見て驚いている、リッチも驚いている、ルフトが一番驚いている、あれを避けられるとは思わなかったのだろう。俺はルフトを指さし言ってやった。

「減点！！」

今は五時限目の時間帯だ、一、二、三、四と錬金術担当の教師として別の教室に行き、なんとか錬金術を教えてきた、レーゲンさんの教育のおかげだ、教師の教師になれるんじゃないかといいたい。

職員室で自分の机に座ってボーっとしている、やることが無い、それで何となく教科書なんかを読んでいると、たまに、どうして私服で職員室に居るんだと怒られる、お前ら朝礼聞いてなかったのかよ、まあ何しろ教師も数が多い、聞いてない人がいても不思議じゃないのか……

肩をたたかれる、また注意されるのかと後ろを振り返ると黄色の髪に黄色の目をした人、この人ってたしか……

「学院長？」

「ああ、ちよつと話があんだ、一緒に学院長室に来てくれねえか？」

そう言って手招きをされる、断る理由は無、ターゲットに近づけるなら好都合だと、俺はオルクスについて行った。

学院長室は教員棟の最上階にあった、ここの最上階全域が学院長の物らしく、廊下には赤い絨毯が引かれ、王宮を思い出させた。

学院長室と書かれた部屋に入ると、より一層、豪華さが増す、フカフカの絨毯にフカフカそうなソファ、新品かと思うほどピカピカ

の机、こりやレーゲンさんが学院長になりたいわけだ、副学院長室とはえらい違いだ。

「適当にかけてくれ」

俺はソファに腰掛ける、すると、オルクスは机にチェス盤を置くと、机を挟んで俺と向き合うように、もう一つのソファに座った。

「さあて、やるか！」

そういうと、オルクスは駒を並べていく、俺も並べていく、何だ何だ？普通にチェスするだけか？

「あの……何故チェスを？」

オルクスが駒を動かす。

「ああ、学院長つてのは基本、暇なんだよ、修業するか、実践訓練なんかしてる所あつたら行くか、どっちも気が進まなかつたらこつやって手が空いてる先生とチェスを打つかだ、まあお前、えつと……」

「モトムです」

「そうそう、十六で錬金魔法陣、書ける天才なんだって？すごいな、ところでちよつとモトム先生に頼みがあんだよ」

頼み事……なんだろ、得になる話ならいいけど。

「レーゲンって先生知ってるか？まあ知らねえよな、朝礼の時いつ

も長つたらしい話をする人だ、朝礼でお前も紹介されてただろ？あのおっさんだよ、実はあいつな……お前が穴埋めする事になった先生……リンクスを殺したらしい……」

うわぁ……めんどくさい展開だぁ……

「確かな情報筋から聞いたから本当だろうよ……リンクスとは古い仲でな……共に魔物の大群とも戦った事がある……あいつがあんなおっさんに殺られるなんて信じらねえ、信じたくねえしな、しかも今度は俺の命まで狙ってるって噂だ、何のうらみがあるのか全くわからねえ、命を狙われる理由なんてねえ、それに死ぬつもりは勿論ねえが俺が死ねばあいつが学院長になっちまう、生徒守るためにもそれだけはダメだ、あいつが学院長になったら何をするか見当がつかねえ、そこで頼みだ、あいつを事故として殺してくれ」

何言ってるんのこの人。

「めっちゃくちや優秀な錬金術師だって聞いてる、という事は頭もいいんだろ？錬金した道具が何かで事故に見せかけて殺す事できねえか？頼む、俺は学院長として長くここの生徒達を守っていかなくちゃならねえ、俺が殺したとしてもバレたらダメなんだ……勿論、協力はする！錬金に必要な道具があったらなんでも言ってくれ、そんなに早くても明後日までには頼みてえ！」

明後日までって……急すぎだろ、まあそれはそうと、すごい話になってきた……別に寝返ってもいいが、それは一億を上回る場合の話だ、それ以外は却下。

「それって俺にメリット無いですよね？」

「大丈夫だ、成功したら副学院長の地位を与えてやるよ！」

いらねえ……

「お断りします、チエスも終わりましたし、失礼させてもらいます、勿論、他言するつもりは無いので、それでは」

学院長室を出て行く、後ろでちよつ、とか聞こえるが無視する、書類整理させられる地位なんていらねえよ！！ポケツ、え？チエスはどつだつたかって？なんとか勝てたよ、負けてたら、そんな高度な暗殺任務と書類整理の地位じゃ釣りあわねえだろうがあ！って怒る所だった。

もちろんすぐに、レーゲンさんに告げ口した。

十一

「そんなことがあったんですか……」

学院長室を見た後だと、余計にしょぼく見える副学院長室、もと
いレーゲンさんの部屋、レーゲンさんにさっきのオルクスとの会話
をすべて話すと、レーゲンさんは俯き拳を机にたたきつけた。

「副学院長の私がこんなに忙しくて！学院長が基本、暇なわけない
でしょうがっ！何を考えてるんだアイツはっ！私が大量の書類整理
している間チェスをやっていたとはっ！許せん！」

レーゲンさんの怒りも、所々くすんだ仕事用机に置いてある、書
類であるう大量の紙を見れば、うなずける程である、本当に仕事ら
しい事してなかったんだなオルクスは。

怒りが収まらないのか、レーゲンさんはさつきよりも強く机をダ
ンダンとたたき、落ち着け課長、机に罪は無い、そんな事しても
机を損するだけだ。

「落ち着いてください、オルクスも何か考えがあつてここに来たん
じゃ……」

「考えがあつて来たとしても私から学院長の地位を奪う理由にはな
りません！そもそも、あいつが学院長でいる意味がありません！精
々生徒達の話題になるくらいですっ！それなら副学院長でも、普通
の教師でも、清掃員でもいいはずだ！何故、私が仕打ちをうけなけ
れば……しかし、あなたがお金を第一に考える人でよかった、
雷撃のオルクスは任務で稼いだお金はすべてどこかに寄付していた

と聞きます、一億以上持つてるとは思えませんからね……」

寄付……なんでそんな金をドブに捨てるような事を、だがこれで確定した、寄付なんてして金を持って無く、その上あんな依頼をあんな報酬で頼む奴だ、何考えてるのやら、信用できません！

「ただ、警戒されてるとなると目立った事はしないようお願いします、引き続き様子見をしておいてください」

そう言つと、レーゲンさんは、また一つため息を吐き、仕事用の机に戻って行った。

あれから一ヶ月が経つ、オルクスはあの時の事を無かった事にしたのか、もう誘われないうちだろうと思つていたチェスに度々さそわれた、すべて拒否してやった。

この一ヶ月で一番、嬉しかった事はなんと言つても道で百ギルを拾った事だ、思わず小躍りをしてしまった、二番目に嬉しかった事は生徒達から歓迎された事、席替えをした日の翌日、教室に行くとき普通に歓迎されているムードだった、あいさつもされた、一体何が起きたんだと思つたが損したわけでも無いので良しとしておこう。

教室に入り、いつもどおり教壇の上に立つ、先生おはようの声におはようと返す、清々しい朝だ、得したわけでも無いのに得した気分、だが俺は朝聞いた行事の事でテンションが低い。

「えゝ今日何の日か知ってるか？」

「「魔物狩り！！」」

声をそろえて言われた、そう、ここの生徒達には人気の学院行事、通称魔物狩り、低級、中級の魔物がうようよ居るという暗見森と呼ばれる場所で一泊二日のサバイバル、そこで四人一組の班で魔物を狩り、狩った魔物が多い班が勝ちという、危険な行事なのだ！

それをやるのは生徒であって教師では無いのだから、俺は出なくとも良いはずなのだがこのクラスの人数は奇数で今までは五人一組の班を作ってたらしいが俺が加わればちょうど四人一組だけになる、って事で参加させられる事になった、本来なら意地でもそんな危険な事はしたくないが、なんと！一番になった班は賞金が出るという！意地でも勝ちに行くつもりだ。

魔物狩りという行事は皆、慣れるほどやっているらしく、班も、もう勝手に作っている、しかし、角の方で三人、いや二人が争っていた。

「カリーナさんを先にさそつたのは僕だぞ！」

「お前じゃ守りきれない……」

そう、この二人である、当のカリーナはニコニコとそれを見てるし、他の皆は前みたいに魔法を打たないだろうなと警戒心丸出しで三人から離れて行く。

そんなこんなで三人以外は班が出来た様だ、俺は自動的に三人の

中に入る事になった。

暗見森にやって来た、ここはコロナ王国とカネス王国の境にある結構でかい森で名の通り暗かった、木々が生い茂り、その木々一つ一つが高く、葉で空を覆い隠しているから不気味な程薄暗い、怖い、逃げたい、だが逃げない、付き添いで来ていたオルクスに賞金は幾ら貰えるんだと聞いた所、なんと四十万ギル！

ルフト、カリーナ、リッチは学年トップスリーの強さで、今回は優勝間違いないしというし、リッチは賞金いらないから俺にくれるって言うてくれた！

「やるぞおおおおおおおお」

俺が一人で盛り上がっている間、オルクスが杖をマイクにし、その辺にあつたちよつと小高い丘みたいな場所へと移動する。全員が注目した。

「ようっし！二年生、全員そろつたな！今から魔物狩りを開始する、明日のこの時間に、ここにテレポーションで帰って来い、じゃあ『瞬間移動』！」

四人一組にまとまつた班が一気に森へバラバラに移動させられる、森もいい迷惑だろう。

一瞬にして景色が変わる、やっぱり薄暗い森の中、右手には小川が流れ、光が差し込んでいけばまあ風流な場所だと思う。

「では……早速、魔物を見つけに行くか……行こう、カリーナ……」

「待て！カリーナの手を握ってどこへ行く！そもそも君に常識は無いのか！？作戦も集合場所も決めず勝手な行動を取るな！自分勝手な奴めっ！」

「お前らを守って戦うほど……俺は暇じゃない、それと……自分勝手はお前だ……」

どっちも自分勝手だと思う、カリーナはニコニコと笑ってるし、止めるよ！

しかし、三人の表情が急に真剣になる、ピンツと空気が張り詰めたかと思うと、少し姿勢を低くし、周りを警戒するように見る、何なんだいきなり、意味がわからん。

俺もなんとか置いてかれないように同じように姿勢を低くし、周囲を見渡す、何かあるのか？

なんかあった、厳密には一万ギル札がヒラヒラと舞っていた、どうしてあんな所に一万ギル札がっ！？一万ギル札はヒラヒラと舞いながら下へと落ちていく、どこから振ってきたのかは知らんが取ったら俺の物になんのかな？いやなるだろう取るう！何だか三人が真剣な雰囲気醸し出しているが、関係無い！俺は取る取るぞおおおおおお。

俺は全力で走り出す、一万ギル札が落ちるであろう推測される場所、小川！ぬれても使えるが破れると使えない！ぬれないに越したことは無い！だが、無情にもヒラヒラと小川まで十センチ、俺はすでに小川に足を突っ込んでおり非常に冷たい、俺は飛んだ、そしてキャッチ！小川を体で滑りながら横切り、勢い余って、向こう岸にあった木に激突した、俺が走り出してから一秒も立ってないと思う、それくらいなんか早かった、周りがスローで見えたもん。

まあ、何にせよ……一万ギルげっとおおおおおおおおおお
おおお！

俺が一万ギル取った事に喜びの声を上げようとした途端、ドスンッ！という軽く地響きが出来るほどの衝撃が後ろから伝わってくる、なんじゃらほいと振り返って見ると。

悪魔っぽい奴がいた。

十二

学院長の『瞬間移動』テレポーションにより暗見森のどこかへと飛ばされる。

周りを見回すと俺、カリーナ、リッチ、錬金術師だった、後者の二人ははつきり言って足手まといだ、一人は特に力も無いくせに貴族を鼻に掛け、威張る事しか出来ない成金に、もう一人はそいつに金でやとわれたと思われる俺よりも年下の錬金術師の教師、錬金術は実践的では無い、しかもこいつは魔法を『持ち上げリフトの魔法』しか使えないという妙な奴だった、足手まといは足手まとい同士なかよくすればいい。

「では……早速、魔物を見つけに行くか……行こう、カリーナ……」

俺はカリーナの手を取り、その場を離れようとするが成金に止められる。

「待て！カリーナの手を握ってどこへ行く！そもそも君に常識は無いのか！？作戦も集合場所も決めず勝手な行動を取るな！自分勝手な奴めっ！」

自分勝手はお前だと言いたい、カリーナの気持ちも知らず、やたらと近づき、さらには金でその錬金術師まで雇って、席替えを裏工作する始末、証拠は無いと言われたが、こいつがクジを引くときやたらと機嫌が良いこと、教師が平民の場合、自分の方が偉いという態度を取っていたくせにこの錬金術師には妙に態度が良いこと、以上をふまえると、どっちにせよこいつ、いや、こいつらからカリーナを守らなくてはいけないし、魔物が出たらこいつらが役に立つのかすら分らない、こいつらを守りながら戦う程、俺はそんなお人

好しじゃない。

「お前らを守って戦うほど……俺は暇じゃない、それと……自分勝手はお前だ……」

成金が言い返そうとしてくる、しかし、突如、大きな殺気によって場は固まった、杖を取り出す事も出来ない、下手な事をすれば一瞬で殺される、何とか直ぐにでも動ける姿勢を取り、辺りをゆっくりと見渡す、三人も同じく固まってると思いきや一人ちよっと違う、錬金術師の奴だ、実戦経験があまり無いのか、この殺気にすら気づかないバカなのか、どちらにせよポカンと口を開けて、妙な構えを取っていた、やっぱり足手まといだ、成り行きにせよこいつと組んでしまった事を後悔する。

錬金術師が何かに気づいた様に小さく、あ……と声を上げ、少し体を動かした、こいつ終わったな、この中で一番最初に動いた奴が死ぬとこの殺気が伝えているのをやはり読み取れないらしい、殺気が錬金術師に迫って来ているのが分かる、まあ成金に雇われたのが運の尽きだろう。さようなら。

しかし、俺の予想とは裏腹に錬金術師が一瞬で目の前から消える、血が飛び散る光景を見ることになるだろうと思ってたが大幅に外れた、錬金術師が消えると同時にドスンと地響きする程に強く降ってきたのは、全身が黒色、悪魔の様な翼に、悪魔の様な尾、悪魔の様な爪に、赤い目をきらりと光らせ笑っている様な表情のこいつ、魔族だ。

「何故、魔族が！」

つい声を荒げてしまう、魔族とは、魔物の上位種で、魔物とは違

闇の力を使う、知能も高く、並の戦士では子供の魔族だろうと相手にならない、こいつを相手に出来るのはギルドの二つ名持ちくらい、つまり俺とカリーナ、あとは教師陣には数人居たと記憶している、その中でもトップの実力を持つ雷撃のオルクス、つまり学院長が気づく事を祈る、正直、俺とカリーナだけで何とかなる相手とは思えない、相手は魔族の中でも上の存在なのだろう。

「キシキシキシ、まさか避けられるとはねえ、最初の一発目だったし、気持ちよく殺したかったんだけどねえ、まあいいや、生徒狩り開始！」

突如、その魔族を中心に黒い物、つまりは闇が広がる、それは一瞬で森全体を丸く囲んだようで、視界は真っ暗になった、こういう時は……

『ナイトビジョン
暗視』

暗い所でも見えるようになる『ナイトビジョンの魔法』を発動し、周りを見る、小川の向こう岸に居た錬金術師は『暗視』が使えず、近くにあった木にペタペタと手を付いている、それにカリーナが近寄って行った。

「キシキシシ、誰から殺そうかな……そうだ、お前からしよう」

そう言っ成金の方を向きゆっくりと近づいていく、成金は杖を構える。

『ファイアデストロイ
火の破壊』

成金は中級魔法を魔族に向けて放つ、炎が魔族に近づくと魔族は

避けようとしてもしない、それを体で受け止めると埃でも払うような仕草をし、また成金に近づいていく、成金は魔法を連発するが魔物はまたそれを体で受ける、また無傷だった。

見捨ててもいいが、この状況では少しでも戦力は必要だ、錬金術師と違って少しなら使えるだろう。

『ヒアス・デストロイ・アイス・ビーム
貫く氷の破壊光線』

俺の放った最上級魔法が魔族の背中に当たり魔族を凍らせていく、普通は凍る前に体がちぎれるなりするものだが、どこまで固い体なのか大したダメージは与えられなかった。

「キシシ……最上級魔法が使えるなんてねえ、一応名前を聞いておこうか」

俺は杖を構え直し言った。

「光線の……ルフト……」

いやあ、えらいこつちや、えらいこつちや、突然悪魔が現れたかと思うと黒い物を出し、森を包んでしまった、視界は真つ暗闇、仕方ないので木を支えにしてとりあえず立ち上がった。

「先生、大丈夫ですか、あ、ナイトビジョン『暗視』これで見えます?」

視界が段々と明るくなる、少し違和感があったがちゃんと見える、状況を確認する、悪魔っぽい奴にリッチが魔法を放つが全く効いてない、悪魔はゆっくりとリッチに向かっていく、二千万!

俺が二千万、じゃなくてリッチに駆け寄ろうとするが、カリーナに腕を捕まれる。

「ダメです、今、先生が行っても足手まといになるだけです、魔法も上手く出せないようになってますし、テレポーテーション『瞬間移動』も出来ません、この場合、隠れて助けを待つか、大人数で仕掛けるかです、ルフトの様に二つ名持ちならまだ戦えるかもしれませんが、貴方は『持ち上げの魔法』リフトしか使えない、さっさと隠れてください」

そう言っただけでカリーナは杖を取り出すと、悪魔の方へと目を向ける、ルフトが青白い光線を悪魔の背中に向けていた、そこにカリーナは駆け出す。

「キシシ……最上級魔法が使えるなんてねえ、一応名前を聞いておこうか」

「光線の……ルフト……」

「そして、爆撃のカリーナよ、トリプル・ストレンジ・スクエア・ボム『三つの奇妙で四角い爆発物』」

杖の先から四角い箱みたいなのが三つ出てくる、それは悪魔に当たると爆発した。

「カリーナ……こいつは強い……逃げる方が得策だろう……」

十三

前回までのあらすじ・木に激突した、痛い。

「キシシシ、さすがは雷撃のオルクス、早いねえ、その木に激突した奴と、どちらが早いんだい？」

「さあな、とにかくモトム先生、早く動けるならそのガキ連れて遠くへ逃げてくれ、こいつは俺とルフトとカーリーナで片づけておく」

「片づける？キシシ、無理だね」

悪魔が両手を地面に付く、土下座かと思ったが勿論違った、真つ黒な地面から黒いあの悪魔の分身の様なものがいくつも現れ俺達を囲む。

一匹の分身が攻撃してくる、それを避けると、一発ケリをくらわした、少しは効いた様で分身は後ずさる、見たか！俺の自慢のケリ！

その後も同じように戦っていく、何匹かは倒したが、いかんせん次から次へと地面から出てくる、きりがないとはこの事だろう、しかし、黒い奴数人に囲まれ、それを一人で倒していく、ヒーローになった気分だ。

「ぐばえっ」

俺の背中に何かが激突した、悪魔の分身の様に冷たく固いという

わけでは無いので分身では無いようだ、せつかくヒーロー気分だったのに邪魔虫めっ、激突された衝撃で前に居た分身を殴り飛ばし、そして前のめりに倒れてしまう、衝突してきたものが背中に体重を掛けてくる、何だよこいつっ！何の得にもならない様な事しやがって！

俺はふりほどく様に衝突してきたものどける、一体なんなんだよ！と、一目見た瞬間固まってしまう。

遺体になつたりツチだった。

所々から血を流し、特に腹の傷が酷い、内臓が飛び出て骨も見えていた、赤黒い血が黒い地面を染めていく、死んでいるのは確かだろう、ああ……二千万……二千万……膝を付き呆然とリツチの遺体を眺める、そんな事をしても戻ってこないし、分身達の的にしかないのは分かってる、しかし、胸の奥にポツカリと空いた穴はあまりにも大きすぎた、二千万の任務という穴を埋めるにはどうすればいいのか、あまりにも突然の残酷な運命に俺は考える事も出来なかった。

分身達はこれをチャンスと見なしたのか一斉に襲いかかって来る、ああ、そもそも逃げろって言われた時点で逃げるべきだったんだ……ヒーローみたゝいなんて思ってた自分が恥ずかしい、逃げていれば……

ピンポイント・サンダー・ショック
『正確な雷撃』

雷が俺とリツチの遺体だけを避けるように流れていく、雷は分身達にぶつかり、分身達は麻痺したのかその場に固まってしまった。そこにオルクスが出てきて、俺をひっぱりたい、痛いなチクショウ！

「ここはもうすでに戦場だっ！仲間の一人が死んだからといってグズグズしてたらお前が殺されるぞ！死んださっきのガキの分にもお前は生きなきゃいけないんだ！」

いや、無理っすよもう……二千万はでかいっすよ……だって二千万すよ……二千万……二千……体育座りをし、顔を伏せてしまっただって二千……

「クソッ！仕方ない、カリーナ、モトム先生を連れて逃げる！」

「はい！ほら、先生、行きますよ」

カリーナは俺の手を取ると半分引きずるようにし走る、俺は何もやる気が起きなく、ボーっと、事なかれ主義というか何と言うか、なるようになっちまえと、引かれる方へと走って行った。

モトム先生は戦場慣れしていないのか、貴族のガキ、名前は何と言ったか忘れたが、モトム先生には大切な人みたいで、遺体を見ながら呆然と膝をついていた。

仕方のない事と言えば仕方のない事だ十六で戦場に出てくる方がおかしい事、普通は低級、中級の魔物を殺すのが限度だろう、それが分身とはいえ魔族を相手に戦わなくてはならない、本体はルフトが何とか足止めをしてくれていたので、敵の的にしかなってないモ

トム先生を何とか助ける事が出来た。

モトム先生には辛い事を頼んでしまった、今思い出しても自分が嫌になってくる、教師とはいえ、生徒と歳なんて変わらない子供に暗殺を依頼してしまったのだ、それも副学院長の椅子を渡すと言つて。

一時期は多数ある闇ギルドのほとんどを潰し、正義を語ってた俺はいつの間にか闇ギルドに依頼するようなクズと同じレベルの事をしていたのだ、そんな自分が許せなかった、だからこそせめてもの恩返しとしてモトム先生は何としても救いたいと思った、だからとっさにひっぱたき怒鳴ってしまった。

「ここはもうすでに戦場だっ！ 仲間の一人が死んだからといってグズグズしてたらお前が殺されるぞ！ 死んださっきのガキの分にもお前は生きなきゃいけないんだ！」

生きて欲しいのは俺の勝手な願いなのに死んだガキを理由に説得してしまう、何時の間にかここまで落ちたのか、だが、考えるのは後だ、勿論、俺の言葉なんかが届くはずも無く、モトム先生は体躯座りをし顔を伏せてしまう、こうなったら足手まといにしかない、相手は魔族だ、こうなったら逃げてもらうしかない。

「クソッ！ 仕方ない、カリーナ、モトム先生を連れて逃げろ！」

「はい！ ほら、先生、行きますよ」

カリーナはモトム先生の手を取ると、そのまま走り去って行った。

反対方向に居る魔族の本体の方に目を向けると、ルフトはもう限

界な様でゼエゼエと息切れしていた、所々に傷がある。

魔族はキシシと笑い声を上げながら闇を出し、ルフトに向かって投げつけた、ルフトはそれをにらみつける、避ける体力も無いようだ。

『スーパー・サンダー・ウェア
帯びる超雷よ』

俺は雷を纏うと、ルフトの前まで走る、『スーパー・サンダー・ウェア
帯びる超雷』の効果で
身体能力が上昇した俺は一瞬でルフトの前に行き、迫る闇を払う。

「キシシシ、面白くなって来たねえ」

そう言つて闇を作り出し、剣の形にするとそのまま斬りつけて来た、それを交わし手で衝き攻撃していく、早い、雷を纏っていても目で中々追いつけない、こいつは魔族の中でも上位なのだろうか。

「キシシ、ちょっと本気、ダシテミヨウカナ」

とたん、魔族を中心に強い殺気が発せられる、前を見る事も出来ない、後ろに引きずられるように、後ずさりしてしまう、何とかそれが落ち着き、前を見ると魔族がいない。

「オルクスさん！左！」

後ろで木に寄り添うように座っていたルフトの声が耳へと届く、左を直ぐに見る、と同時に俺の体が右へと吹っ飛ぶ、なんとか受け身を取るが左腕が折れ、今の衝撃で雷も消えてしまった。

「キシシシシ、やっぱり人間なんてこんな物か、ちょっと君には期

待してみたんだけどね」

『スーパー・サンダー・ウェア
帯びる超雷よ』

直ぐに雷を纏う、これが無ければ一瞬で殺されてしまっだろう、
ルフトが生きていたのが奇跡、いや、すべてこの魔族の気ままの行
動が生んだ結果だろう、その位こいつは強い。

俺はルフトの前に出て、右手の杖を魔族に向けた。

「どうして、こんな事をする？目的は何だ！？」

「目的？そういえば何だったっけ？あ、そうだそうだ！思い出した
！キシシキシシ、ここの森の長、まあ魔物だね種族名は忘れたけど、
その魔物がわざわざ魔界まで来てねえ、一週間単位で人間が来て、
魔物を殺していくから、脅しもかねて人間を殺してくれてさ、魔
物殺されると魔族も困るからねえ、まあ最近俺忙しかったし、息抜
きもかねて来たってわけさ、キシシキシシ」

後ろに居るルフトが投げたのか、後ろから魔族に向かって石が飛
ぶ、しかし、魔族は避ける事も無く石を体で受け止めルフトを見る
と、ルフトは悔しそうに呟く。

「クソウ……人を何だと思ってるんだ……」

「キシシ……人？人は魔族の敵だ、だから殺す、だから魔物を作っ
た、何かおかしい事言ってるかい？」

「おかしいに——」

「さて」

ルフトが何か言う前に止める、このまま続けても何の意味も無いと思ったからだ、このまま時間が経てばルフトのケガも俺の左腕も酷くなるだけだ、早くにでも治療をしなければならぬ。

「もう、この森には来ない、それでいいだろう？見逃してくれ」

「キシキシシ、嫌に決まってるだろう」

「そうか、なら仕方ない『引き寄せよ』！！！！」

魔族は油断してたのか、『引き寄せの魔法』、対象を引き寄せる魔法にかかった。

「俺に右手を残した事を後悔するんだな！『雷の強い衝撃の拳』！！！！」

『引き寄せの魔法』で引き寄せた魔族に雷を纏ったまま、最上級魔法の『雷の強い衝撃の拳』で一気にダメージを与える、この技こそ、俺が雷撃のオルクスと呼ばれるようになった由縁だ、『ドロウ』で引き寄せる力に、俺の鍛え上げた肉体の『雷の強い衝撃の拳』を合わせ、それが『帯びる超雷』ですべて強化されている。

魔族は俺の右手が当たる寸前とつさに闇を作りガードしていたが、俺の右手は闇を突き抜け魔族に当たり、どこかへ吹っ飛んで行ってしまった、魔族といえどさすがに死んだと願いたい。

「あの魔族……死にましたかね？」

「たぶんな……」

だがまだ闇は晴れない、あの魔族が出した闇ならもう森を覆っている闇は消えるはずだ。まさかまだ生きてるのか？

うおええええええっつっ！

遠くの方、俺が魔族を飛ばした方から声がする、しかも、これはモトム先生の声だ。

「ルフト、ここで休んでおけ」

「俺も行きます……」

「お前は動くこともままならないだろう？ 足手まといだ、そこにいろ」

そう言つて、声のした方へと駆け出した、魔力はまだ残ってる、あちらに行けばカーリーナも居るし、魔族が生きていてもあれをくらつて無事とは思えない、なんとかなるっ！

直ぐに魔族を見つける事が出来た、湖の近くに魔族、モトム先生、カーリーナが居て、対峙しているようだ、俺はその間に入り、魔族の方を向く。

魔族はやはり無事とはいかなかった様で黒い体から紫色の血を流し、湖に落ちたのだろうか、ぬれていて、全身ビチャビチャだった、これは好都合だ、相手が水にぬれているなら、俺の得意とする雷の効果が上がる、しかし、そんな余裕も無くなる程、魔族は殺気を放

ちながらこつちを睨んでいた。

「キシシ……俺をここまで怒らせるとはな……来い、一瞬で殺してやろう……」

それでも有利なのはこちらだ、俺は右手に杖を構え、叫んだ。

「死ぬのはお前だ！行くぞ！」

まずは一発、魔法を打とうとする、だが、頭に衝撃が走ったかと思つと。

俺の視界は暗闇に包まれた。

十四

カリーナに手を取られ、走って行く、それだけなら恋愛小説の一片で至極に平和なものだっただろうが実際は黒いのに覆われた真つ暗な森なわけで、悪魔っぽい生物から命からがら逃げ出してるわけで、その上、その悪魔っぽい奴のせいで二千万のチャンスも失った後なので、いくらカリーナが美人だとしても全然笑えないのである。

右の小川伝いに悪魔から離れて行く、地面はさつきよりもゴツゴツとし、非常に走りにくい、偶に魔物が出てきては、カリーナが魔法でぶっ飛ばし、またまた魔物が出てきては、俺がケリで吹っ飛ばす、これを走りながらやっているのだ。

魔物もたまつたもんじゃないだろう、人間が居たから襲おうと思いい、出て行ったら、一目見られて即死亡、可哀相を通り越して逆に面白いくらいである、ナンマイダ。

しばらくそうして走っていると湖に出た、広さがそれなりにあり、周りの草と合わさると良い景色であると言える、カリーナは立ち止まると息を切らし座り込む。

「ハアハア、ここまで来れば大丈夫でしょ、少し休みましょ」

俺も座る、地面にはさっきの様にゴツゴツとはしていなく、平らで柔らかな砂があり、そこは意外にも暖かった。

暖かさでリッチの事を思い出す、良い奴だった、うん、良い奴だったと思う、主に二千万という意味合いで、リッチのお父さんに何言われるのんだろう、賠償金払えなんて言われないだろうな、思わ

ずため息が出てしまった。

「ねえ、先生、ステキじゃない？」

何を言ってるんだ。

「この湖の上には空を覆い隠すような木が無いのよ、きっと闇が晴れたら、このステキな光景はもっとステキな光景になるわ、それを先生と二人きりで見るのよ」

新手の告白か。それとも励ましてくれてるのか。

「学院長とルフトがすつごく苦労して魔族を倒すの、そして闇が晴れるわ、学院長とルフトはまず私達を探すはずよ、そして見つける、光の射す湖で先生と私がキスしてるのをね、学院長は空気を読んで立ち去って行くでしょうね、じゃあルフトはどうすると思う？」

まったく意図がつかめん、半場告白してる様な台詞吐きながら、質問の主人公はルフト。一応答えたほうがいいのか、ええっと、この湖で俺とカーリーナがキスしてたら？

「怒るんじゃないか？」

「半分正解ね、正解は怒って光線をぶっ飛ばすのよ」

そういえば教室でそんな事もあった、いやあ、惜しい。

「あの人、昔からそうだったのよ、何でもかんでも力で解決……知ってる？先生？ルフトってカネスギルドのギルドマスターに育てられたのよ」

知らなかったし、知りたくもないし、教えてどうするんだ。

「小さい頃、それも生まれたての赤ん坊の時、魔の森の奥深くに捨てられてたんですって、偶々その辺に討伐に来ていたギルド員に拾われて、ギルドマスターの所へ行ったの、才能の固まりだったらしいわ、五歳で上級魔法を打てるようになったって、それであの性格なのよ、お人好しで、押しつけがましくて、自分の嫌いなものはすべて悪だっと思ってるわ絶対、そして自分の好きなものはとことんスキになる、嫌な奴よ」

えええええ！すっげえ意外、ルフト可哀相なくらい意外。いやあ女って怖いね、しかし何故このタイミングでそんなカミングアウトをした。

「あの人、本当の親が誰なのか調べた事があるのよ、それで見つけたのが、町の評判最悪の貴族だった、自分を捨てた理由を聞いたならサルみたいな顔だったから捨てたそうよ、酷い話もあるものね、ルフトは一気に貴族嫌いになっちゃって、私の家も貴族なんだけど、私自身が貴族、というより自分の親を良く思っていないのよ、それをルフトに話したら勝手に仲間にされちゃって、魔法を教えてやるですって、バツカみたい、魔法が使えるからなんだってのよ、私が親を良く思っていない理由はね、書類整理を執事に押しつけたりするって事よ、勿論ちゃんと話したし、断ったわよ、でも力が無ければ何も解決出来ないって……」

「は、はあ」

「それって裏を返せば、力さえあれば何でも出来るって言ってる様なものよ、だから席替えの時リツチ君にいきなり攻撃なんかして、

でも席替えは変わらなかった、私思ったのよ、これで力があれば何でも出来る世の中じゃないって事があの人に伝わるって、でも伝わらなかったわ、先生が出て行った後、またリッチ君に魔法打ったのよ、その時はリッチ君、偶々避けられたんだけど、でもその後もちよくちよく攻撃してたわ」

「えっと……結局何が言いたいんだ？」

「あの人の、困ったら何でも魔法打って解決って性格が気に入らないって話よ、私に一方的に好意押しつけるし、勝手に私がリッチ君の事嫌いだって解釈するし、本当の所はね最後の最後にはリッチ君とくつついちゃおうと思ってたの、リッチ君中々かつこいいし、ちゃんと私を口説いてきたわ、家も貴族同士だから結婚とかもいざこざ無いと思ってる、そうすればあの人に思い知らしめてやれるでしょ、力で解決出来ない事もあるんだって、でもリッチ君死んじゃうんだもの、だから先生、私と結婚して」

告白どころかプロポーズだった、まてまて冷静に考える、カリナは魅力的だと思うし申し分無い相手なんだろうが、しかし、俺は結婚というものが嫌いだ、だって資産はぶんこになるなんて地獄以外の何者でもない、貴族になれるのかもしれないが、そんな地位欲しくもない欲しいものは金で、金は自分で大量に稼げるしな。

「ごめんなさいっ！」

「あら、どうして？貴族になれるわよ」

「いらん、俺が欲しいのは金だけだ」

「不思議な人、そういえば、この前、道で百ギル持ちながら小躍り

してる先生を見たわね、そんなにお金が好きならなおさら貴族はいいわよ、お金なんてたんまりあるから」

「いって金は自分で稼ぐし、今も一おく……一億っ!!」

そうだった、一億の任務があるんだった、リッチが死んだせいですっかり忘れてた、一億に比べたら二千万なんて……いや、やつぱりでかいな二千万は……でも一億をあきらめる理由にはならない、そしてなんだっけ？魔族って名前だったか、そいつと戦っているオルクスには隙を突いて殺せる可能性が高い！うおおおおおやるぞう！

「よっしやああああ!!」

「何か知らないけど急に元気になったわね、私と結婚する気になった？」

違う！けど、カリーナは無視する、結構時間が経ってしまった、オルクスが魔族とまだ戦ってますように！

俺は立った、地面に足を付け、一億のために！行くぞう！

ボチャンツ

突然、空から何かが降って湖に落ちる、こっちはやる気を出していい感じでテンション上がったのに、ちんけな音出してんじゃねえ！なんだよいたい。

それは湖から這い上がって来る、たぶん血であろう紫色の汁を全身から出し、ずぶ濡れになり、目が血走っていた。

「うおええええええっつ!!」

何でこいつが降ってくるんだ!しかもめちゃくちや怒ってるし!魔族はこちらを向く、殺されるんじゃないやねえコレ。

俺達と魔族が対峙する、魔族はゆっくりとこちらを睨む、俺達と魔物の間に一つの影、現れたのは何と!

雷を纏ったオルクス!さすつがオルクス!かつちよええ!だがオルクスの方もダメージを受けてるのか左腕が変な方向に曲がりグロイ、どうすりゃあんな風に曲がるんだろ、俺の疑問を余所に二人はにらみ合っている。

「キシシ……俺をここまで怒らせるとはな……来い、一瞬で殺してやろう……」

オルクスが右手に持つ杖を構える。

「死ぬのはお前だ!行くぞ!」

しかし、ここで一つの結論を思いつく、ここで殺せば良いんじゃないかと、懐にはナイフが一本あり、後ろを見せている今なら簡単に殺せるだろう、でもどうする、あの魔族が殺してくれるんじゃないや無いのか?でも魔族が勝った場合、次は俺が殺される可能性がある、オルクスが勝った場合、どの位動けるのかは知らないが俺のナイフは避けられるだろうか、いやダメだ、殺せなかったらそれで終わだし、殺そうとしても、たぶん、そわそわしてカーリーナにでも気づかれたら、止められるだろう、それでオルクスに俺が命を狙ってる事がばれたら、それも一億がパアだ、という事はどうすればいい?

ここで殺すか？でも俺が魔族に殺されるのは嫌だ、でもこんなチャンスも無いかもしれん、ドウスルドウスルドウスルドウスル。うおおおおおおおおおおお！！！！

シュツ

俺が投げたナイフが綺麗に飛びオルクスの後頭部に刺さる、そこから血が噴き出し、オルクスは前に倒れる、ヤッタアアアア！でも、次に見えたのは魔族の目を見開く表情だ、やばい、やっちゃった……勝てるかな、こいつに、カリーナもいるけど……不安だ。

「キシシシシ！面白い！面白いお前！何故殺したのかは知らんが面白い！気に入った、そうだ、お前にしよう」

何が面白いのかも、何に選ばれたのかもワカランが一億を貰うまでは、死ぬわけにはいかん！

「キシシ、そう身構えないでいいよ、さあ、行くよお、魔界へ！」

魔族が急に俺の左腕を掴んだかと思うと、右にでかく黒い固まりが出来る、それに魔族が入る、腕を捕まれてる俺も入ってしまう、何故か右腕を掴んだカリーナも一緒に入る、そこは黒い空間で下へ下へと落ちていく、何かこっちの世界に来たときを思い出すなあ、つてのんびりしてる場合じゃない！魔界って何んだよ！帰ってこれるんだろうな！俺まだ一億貰って無いんだぞおおおおおおおおお！！！！

十五

黒い空間を抜けると、そこは魔王城でした、笑えない。

何の前触れもなくいきなり魔界の魔王城という所に連れてこられた俺とカリーナは応接室へと案内されそこで、今さっき俺達をここに連れてきた魔族を待っているわけである。

黒い床に、黒い壁、黒のソファに座り、黒のテーブルに置かれたブラックコーヒーを見ながらため息をつく、ちゃんと帰らせて貰えるものか心配になってきたのだ。

だって一億まだ貰って無いんだもの、帰ったらボスの所行って一億貰って……そういえばリッチの件で何か言われたらどうしよう……

「ねえ、先生」

同じくソファに座っていたカリーナがコーヒーを啜り声をかけてきた、ブラックコーヒーなんてよく飲めるな。

「どうして学院長を殺したの？」

……そうだったあああつああ！こいつに見られてたんだつた！でも、見られてそんな困る様な事でも無いようない……どうなんだろう、もうワカラン！

「先生？」

「大人には色々あるんだ、別にいいだろ」

「良くは無いと思うけど、まあいつか、ここまで来たら小さい事に聞こえるわ」

おお、意外と納得してくれた、納得の理由が良くワカランが別に困る事でも無いのでほっておこう、しかし、ブラックコーヒー飲めないんだよなあ俺、でも飲まないと損な気がするしなあ、ガマンしてでも飲むか……

コーヒーを飲んでいると、扉の開く音がする、右にある扉がギギギと開いていき、タマゴ？を持ったあの魔族が現れた、何故にタマゴを持っているのかは不明だが、こいつが産んだわけではなさそうだ。

魔族は俺達と向かいのソファに座り、その間に置いてあるテーブルにタマゴを乗せた、よく見ると結構でかいタマゴだ三十センチはあるだろう、そしてタマゴまで黒いじゃねえか！黒色、好きだな、おい。

「キシシシ、ようこそ魔界へ、まずは自己紹介をしよう、俺は一応魔王様の側近をやっている悪魔長というんだ、よろしく」なんだその役職みたいな名前。

「カリーナ・デルフィヌスよ」

「金城求です……」

「キシシシ、予定より一人多いけど、まあいいかな、君達を呼んだのは他でも無い、勇者を倒してほしいんだ」

え？勇者って刀神の事か？懐かしいなあ、元気にしてるかなアイツ、紙幣の時の借りがあるから、今すぐにでもぶん殴ってやりたいなあ、無理だろうけど。

「はあ？何言ってるのよ、勇者を倒せるわけ無いじゃない」

「まあ、まずは昔話でも読んでくれ、キシシ！」今さらだけどキシシってどんな笑い方だよ。

悪魔長は薄い一冊の本を取り出すと、テーブルの上に置いた、何々『魔族と人間』か、どんな話だろ。

昔むかしのお話です、魔族は闇を使って動物を狩り、それらを食料とし、魔王様がいるので大した争い事も無く、平和に暮らしていました、しかし、長く続いた平和は突如やぶられてしまいます。

そう、人間です、食料でしかなかった人間共は神の力によって魔法というものが使えるようになりました、人間は魔族を攻撃してきます、しかし、それでも人間は弱く脆いものでした、魔法の攻撃も闇と比べれば使い勝手も強さありませんでした。

弱くも攻撃してくる人間共を魔王様は鬱陶しく思い、動物の中では最高に美味であった人間共を惜しくも全滅させよ、との決断を下し、魔族による多大な人間狩りが始まりました。

人間狩りは順調でした、人気であつた人間の肉をどれだけでも取つていいという事で、魔族が一気に人間を狩つたのですから、当然といえば当然です。

しかし、そこに一人の人間が現れます、それこそが憎つき勇者です、どこからともなく現れた勇者は光の力を使い魔族を殺していきます、そしてついには魔王様までやられてしまいました。

魔王様は最後の手段として、人間共に復讐をするため闇を地上に浸透せました、全てを闇に包もうとしますが、人間と一部の動物は勇者の加護、地上は神の加護によって塞がれてしまいました。

最後の手段を塞がれた魔王様は残つた魔族を守るため、魔界を作り、そこに魔族を移しました、それから、魔族が地上に出ても十分の力の力しか出なくなつてしまい、さらには地上に居れる時間も限りがあります、並の魔族では行くだけで死んでしまう事もあります、これでは人間共に復讐すら出来ません。

しかし、地上には魔物がいます、勇者の加護にも神の加護にも塞がれなかった動物に魔王様の闇が浸透し出来たのが魔物です、魔物は繁殖率も高く、魔物同士は争わず、知能や力が上がり、凶暴性を人間だけにぶつけるという素晴らしい生き物です。

魔族でも上位になると多少は操れるようになり、人間を殺すためいつでもがんばっている魔物は魔族の最終兵器であると同時に私たち魔族の忠実なる部下であり、友であるという事です。

皆さん、昔の魔族から受け継ぐ人間への復讐心を忘れないようにしましょう。

いや、こいつが書いたのかよ！ていうかこんな話みせてどうしろってんだ。

「読んだわよ、子供の頃、絵本で読んだ事ある『初代勇者伝』の魔族側から見たバージョンって感じがしら、それで？これと私達が勇者を倒すの何が関係あるのかしら？」

「キシキシ、俺達魔族はね、勇者の光の力に弱い、天敵とも言えるね、地上には俺でも中々出られないし、勇者は旅をしながら強くなるから、魔界に来る頃には俺でも敵わないくらい強いんだ、だから勇者がまだ半人前のうちに君達に倒してもらいたいわけだ」

地上で倒せつて事か！俺達に！よっし、とりあえずは帰れるっばいぞ！帰った後はトンスラしてやれば、魔族は中々こっちにこれないらしいしカネス王国に居れば余計に安全だ！俺、ナイスアイディア！

「やります！やらせてください！」

「ちょっと、先生……」

「キシキシキシ！！そうか、やってくれるかい！じゃあ魔王様！」

タマゴから黒い液体みたいのが出てくる、タマゴの存在、完全

に忘れてたわあ、黒い液体なんだから闇って奴かな、この魔族……じやなくて悪魔長か、が使ってたやつと同じ感じだし、フーン……って魔王！

タマゴから出てきた闇は俺の口に押し入って来た、さっき飲んだコーヒー吐き出しそうだ、それを何とか押さえ、闇は俺の胃の中に入ってしまった、俺の胃の中は今、さぞかし黒い事だろう。

「キシシシ、魔王様の闇を君達の中へ入れた、これで裏切ったり、サボったりしたら、魔王様の判断で君達を殺す事が出来るからね、後、多少はその闇を操れる様にしたってさ魔王様に感謝するんだね、じゃあ頑張ってね、こっちもなるべく協力するよ」

そう言っただけ俺達をここに連れてきた黒い固まりを作り、そこに俺達を押し込んだ。

三回目の黒い空間で下へ下へと落ちる感覚、チクシヨやっちゃまった！勇者を倒さなければいけない事になるとは……刀神を倒すなんて出来るんだろうか……闇を少し操れるようになったらしいけどなあ。

まあ、とにかく、一応でも地上に帰られる事を喜ぼう、何たって……一億ギルが待っているんだからな……！！

十六

はてさて、これを良い状況と云えばいいのか、悪い状況と云えばいいのか。

魔界から地上に戻された俺とカリーナは、暗見森の湖の脇に着地し、闇が晴れたこの暗い森の湖だけが光を多く浴びる風景を満喫したり、その後、何であんな怪しい交渉に乗ったんだ、いやむしろ交渉ですらなかったような気もするわよ！という俺に対して相当、頭にきていたカリーナの説教を小一時間、聞かされた。

説教にほとほと嫌になってきた俺は、こんな事してても何にもならないとにかく森を出ようというナイスな提案をし、なんとかカリーナを黙らせ、歩き出した。

森を歩きながらカリーナと話をしたり、闇を使ってみたりと色々な事をしていると、遠くの方でわいわいと賑やかに横切つて行く五名程の団体さんを見つける、これを見つけたのは本当に偶然と願いたい、俺の身体能力が上がっており、視力がマサイ族並に良い事で、木々の隙間からチラッと見えてしまった、その五人の団体の内、俺は二人を知っていた、刀神とアリシアさん、要するにあれば勇者様ご一行という奴じゃありませんかーというのが今の状況。

さて、ここで二つ選択肢がある、一つ、無視する事、これはまあ俺が一番したい事でもあるワケだが、しかし、この選択が俺の胃の中に入った魔王の闇のせいで出来ない、サボったと魔王が捉えればそれだけで死ぬ事になるのだ、もう一つは不意打ち、不幸中の幸いで勇者一行は俺達が居る事を知らない、うまくいけば殺せるかもしれない！言っておくが正々堂々戦うという選択肢は俺の中には無い。

「カーリーナ……静かにしろよ……」

「何にも言っていないわよ、どうしたのいきなり？」

俺は姿勢を低くし木の浮き出た根っこに手を付け、勇者一行が居る方向を見つめると、それに乗じてカーリーナも同じように姿勢を低くした。

「静かに話させて！……三十メートル位にな……勇者が居る……」

「え……どうしてそんな事わかるのよ……」

「見えた……」

「見えたって……何にも見えないわよ、それに見えたとして、どうして勇者って事が分かるのよ……」

「俺は勇者と知り合いだ、アイツも俺の顔を知ってる、あの嫌みな程良い容姿はアイツしかおらん！」

カーリーナは少し関心したように俺の顔を見ると立ち上がった。

「あの勇者と知り合いなんてね、先生って結構すごい人？」

「いや、別に……それよりも、アイツをどうやって殺すかだ、勇者含めて全員で五人、はあ……刀神を倒すだけでも無理があるっていうのに、四人も仲間つれてんじゃないやねえよ！」

「そんなの簡単よ、こうすればいいの」

そう言ってカリーナは人差し指を木の根っこからわずかに見える地面に置く、すると、その部分が段々と黒に染っていった。

闇だ、さっきまで歩きながら色々試していて分かった事だが、ずいぶんと使い勝手が良い。

形状なんかは自由自在に針や剣、液体なんかも出来るし、堅さは硬くしたりゴムみたいなのも出来る、また温度も変えられるし、操作する事も出来、意思を込めれば自分の目や口や鼻などと共通する事が出来るのだ、人間が魔族に敵わないのも深くうなずける。

液体の闇が地面に染みこみ、少し揺れたかと思うと移動していく、それは次第に早くなって行き、小動物のような早さで刀神の居る方向へと向かって行く。

カリーナは地面に手を付いたまま、目を瞑り固まっていた、意思を集中させているのだろう。

俺は勇者一行の方見るが、木ばかりのこの森（森なんだから当たり前）でどうなってるのかは非常に見えにくい、チラチラとは見えるが大した変化は見られない……………かな？

すると、横で目を閉じていたカリーナが目を開け一つため息をこぼし、首を横に振った。

「ダメね、勇者の力かしら、闇で地面からいきなり串刺しにしようと思ったんだけど、近づいたら闇が消えちゃったわ、でも、まあ、そりゃそうよね、これで殺せたら魔族がとくに殺してるわよ」

「えっと……つまり？」

「魔法か武器で殺るしか無いわ、武器は無いし……魔法だけか……キツイかもね」

「武器……ナイフならあるぞ」

懐に仕舞ってあった愛用の紐付きナイフを紐の部分を持ちながらブランブランとカーリーナに見せるとカーリーナは驚いたように言った。

「それ、学院長を殺したナイフよね、何時取ったのよ」

「紐が付いてるだろ、それでくるくるって……もったいないし」

「セコいわね」

別にセコくは無いと思う、五万したんだぞ！五万！今思えば良くそんな物買えたよ俺！

「まあいいわ、作戦は……そうね……私の爆撃魔法が当たる距離までばれずに近づいて、勇者達の真ん中を爆発させるでしょ、そうすれば一応はバラバラになると思うし、爆発した方向に意識が向いてると思うから、先生は勇者の顔知ってるんでしょ？その隙に殺してくれる？」

そんな簡単に上手くいくとは思えないが、俺の頭では大した作戦も作れない事は俺が一番良く分かっているので、黙って従う、肯定の合図として首を縦に振ると、カーリーナはそういえばと言葉を続けた。

「もし失敗した時、私たちの顔が知られたら後々やっかいになるわね、先生、その辺の土でも使って仮面が何か作ってくれない」

こんな平らな所が無い場所は魔法陣を書くのに適さないって習わなかったのかこいつは、どう断ろうかと頭をフル回転させているとある事を思い出した、俺はもう仮面を持っている、暗闇鴉に入った時、ボスから貰った黒い仮面を出した、俺の周りは黒ばかりだ、後、他にも飲料水や保存食、鍊金の道具なんかを体中に付けているので、俺は遭難した時には便利だと思う。

仮面は使ってるようと予備でちょうど二個だったのでちょうどよかった、カリーナに予備を渡すと、カリーナは納得したように息を吐いた。

「これ、暗闇鴉の仮面ね、先生が暗闇鴉の一員だとしたら、学院長を殺したのも妙に納得出来るわ、依頼されたか、闇ギルド討伐部隊にも入っていた学院長だから闇ギルドから直属の命令かね」

「と、とりあえず、早く殺らないか？アイツらどんどん遠ざかって行くぞ」

「んゝそれもそうね、行きましょ」

そう言うとかリーナと俺は仮面を付け勇者一行に近づいていく、近づくとも地面に足を着けてはいない、闇を出し、それをゴムの様にしてから宙に浮かせそれに乗って移動しているのだ、正直乗り心地は大変よろしくないがガマンだ。

宙に浮いているので音も無く近づける、勇者一行が良く見えるようになった頃、スッと闇が消えて行くのを見て、慌てて闇を降りた、

カリーナも同じく闇を降りると、こちらに視線を向け、人差し指を立てると勇者一行を指さした、何の合図かは分からないが合図である事は分かったので、そちらを見てみる。

見えるのは勇者一行、刀神、アリシアさんに知らない女の子二人と男一人だったが、突如カリーナの声で聞こえた『ストレンジ・スクエア奇妙で四角い爆発物』のせいで奇妙な箱が勇者一行の中心に出てきたかと思うと景色は爆発の一文字になってしまった。

のんきに歩いてた勇者一行はカリーナの思惑どうり五人全員がバラバラの方向へと吹っ飛んで行く、それを見計らい俺は刀神を探し出す、砂煙などが舞ってどうも見えにくいが何とか見つける事が出来た、俺は木に手をつき、何が起こったのかを何とか理解しようとしている刀神に向かってナイフをブン投げると物凄い早さで刀神に向かうナイフ、これで何人も殺して来たんだ！いけるはずだ！つかいけええええ！

結果！避けられました、そりやもうすんなりと、作戦としては大失敗だろ、作戦じゃなくても大失敗だろ、どうするよこれ、バラバラになっていた勇者一行は一力所に集まりこちらを見ている。

「おい！そこに居るのは誰だ！出てこい！分かってるんだぞ！」

勇者一行の一人の男が声を上げた、やっぱりバレてた！カリーナの方を見ると目で睨んでいる、行けと言ってるのか、この俺に、絶対嫌だ！

俺が嫌だと首を振ると、またカリーナが行けと目で訴えるの繰り返しだ。

「出てきて事情を説明してくれ、そうすれば命は取らない」

この声は刀神の声だ！アイツは基本嘘を吐かないと俺は知っている、ここは素直に出る、木の陰に隠れていた俺は勇者一行の前に姿を現した、すると全員またか……といった顔をした。

「どこの闇ギルドか知らないけど、僕達を倒そうとするのは諦めろって君のボスに言っておいてくれ、そして出来ればちゃんとしたギルドがあるんだから闇ギルドは要らないともね」

ストレンジ・スクエア・ボム
『奇妙で四角い爆発物』

奇妙な箱、さつきもカリーナの魔法で出した爆発物である、それが勇者一行の中心へと現れると爆発——しなかった、刀神がそれを切ったのである、あの時に王様から貰った勇者の剣、名前はなんちゃら剣か何か忘れたけど、とにかくそれで切った、魔法って切れるのか初めて聞いたっていうか見たぞ。

「この魔法も君がやったものだと思ってたけど違うようだね、もう一人いたのか、声の方向からすると……そこに居るよね？出てきてくれ」

カリーナが木の陰から出てくる、まだカリーナには気づいて無かったからカリーナは俺に出るって目で合図したのか、それで不意打ちしたと、納得、これも失敗したけど。

「何度も言っ、闇ギルドは人々を苦しめるだけだ、そう君達のボスに伝えておいてくれ……」

ファイア・ボール
『火球』

カリーナが刀神に向かって火の玉を飛ばす、だが直ぐに切られ意味をなさない、何やってんだこいつは逃がしてくれる感じだったじゃん！

「せめて……一人くらいは殺すわよ……貴女、私と一対一で勝負しなさい」

何を言い出すんだお前は……

「わ、私いゝ！んゝまあいいけど、たぶん私が勝っちゃうよゝ？」

カリーナが指名したのはまだ幼い感じを残す、女の子だった。

「いいから早く、それとも怖いのか？」

「ムツカゝ！いいよ！受けて立つ！」

「まてまてまて」

そこに割り込んで来たのは名前も知らない、最初に俺に出てこいつて言った男だ、彼は怪しむようにカリーナを見る。

「何を企んでるんだ？俺達が勇者パーティーって知ってるんだろ？なら一対一でも敵わないってのは分かるはずだ、闇ギルドの鉄砲玉が敵うと本気で思ってるわけじゃないだろ？」

「鉄砲玉だからこそよ、ここで帰ってもボスに殺されちゃうわ、どうせ死ぬなら正々堂々と戦って死にたいのよ、お願い」

「殺されるって……それなら逃げれば……なんなら俺達の仲間になるか？な、刀神いいだろ？」

「うん、闇ギルドがそんなに酷いなんて……知ってると思うけど僕は闇ギルド討伐部隊の一員でもあるんだ、闇ギルドに詳しいだろうし大歓迎だよ、それに困ってる人は、ほっておけない」

それに対してカーリーナは俯き、首を横に振った、演技だよなこれ、本当に何企んでるんだろう。

「私たち姉弟は仕方なくとはいえ、たくさん人を殺して来たわ、それは許される事じゃないし、勇者様の仲間になんかとてもなれない……闇ギルドも幼少の頃から居た、だから少なくとも仲間はあるの……だから仲間は売れない……でも、この子だけは！弟だけは仲間にしてあげてください！私は罪を償うために死にます、どうかお願いします、弟の友達になってやってください！そして死に際くらいは正々堂々としていんです！私と戦ってくださいお願いします！」

カーリーナはそう言っただけで俺の手を引くと勇者一行の前まで行き、俺の頭を掴むと無理矢理下ろし、お願いしますと叫んだ。

えっと……なんだっけ……カーリーナが姉で……死にたがって……俺が刀神の仲間？無理無理無理、仲間なったら仮面外せって言われるだろ！顔が知られたらやっかいだって言っただけにどうなるのこれ！

「意思是……硬いみたいだね……レダ、戦ってあげてくれ……」

「ん……わかったよ」

「ありがとうございます……よろしくね、レダさん」

そう言って握手を求めるカリーナ、それにレダとかいう女の子も悲しげだけにこやかに答える。

「よろしくね」

いやあ、ほのぼのとしてるんじゃない、平和なんじゃない、カリーナの考える事がわからないじゃない、本当に死ぬ気じゃないと思うけど……

突然、カリーナが俺の腕を掴んだ、杖を持ってた方の腕だったの
でカリーナの杖がちよっと刺さって痛い、いや、そんな事どうでもいい、カリーナは右手で握手、左手で俺の腕をひっつかんでいる、
掴む手に一瞬力を入れると、こう唱えた。

『テレポーテーション
瞬間移動』

十七

俺の視界、暗見森の薄暗い景色が一瞬で白く落ち着いた部屋へと変わる、ここはどこだろうかと思渡す前に俺の視界に真っ先に入ってきたのはレダという女の子と奮闘するカリーナの姿だった。

カリーナは女の子が出した杖に飛びつき、なんとかそれをもぎ取るうとする、女の子は何とか取られまいと杖を強く握りながら、杖先をカリーナの方へと向けようとした。

「ちょっと！先生も見えてないで手伝ってよ！一発でも魔法使われたら死ぬわよ！」

「先生！？弟じゃないんですかー！！」

年頃の娘が二人も集まって何をしとるんだと言いたい、死ぬのは困るがコイツと一緒にどこの誰かの部屋かも分からない所に連れてこられ、未だに良く状況が分かって無い！

「そもそも、どうしてこいつを……」

「どうしてって……そうだったわ！すっかり忘れてた」

女の子の杖から手を離すと平手で女の子を突き飛ばすカリーナ、これをチャンスと見たのか女の子はこちらに杖を向けようとする。

が、しかし、カリーナの闇が女の子の手足を縛り、闇で杖を無理矢理奪った、仰向けの状態で手足を縛られた女の子はこちらを睨む。

「何をするです！私をどうするきです！」

それに対しカーリーナは楽しげに笑った。

「フッフ、何だ勇者が居なければこの程度なのね、闇はやっぱ便利ねえ、かわいい女の子とはいえ、勇者パーティーの一人をこんな簡単に、殺せるんだもの」

カーリーナが人差し指の先から闇を少量出すと、それはヘビの様にニョロニョロと女の子に近づいて行き首もとにまとわりつき、絞めた。

「ばいばい、レダちゃん」

もがき苦しむ女の子の視界に入る様にし、ニコニコ笑顔で手を振るカーリーナを尻目に俺はボーっと部屋を見る、別に普通の部屋だ、シンプルで、八畳くらいの。

「私の部屋よ、良い部屋でしょ」

「殺し終わったのか？」

「うん、良い方法だったでしょ、勇者と離す事で闇が使えるようになるから、簡単に殺せたわ、まあ、次からは警戒されるだろうし、使えるのはこれっきりでしょうけどね」

そう言っただけで部屋にあったクローゼットを開け、そこをガサゴソとあさるカーリーナ。

「何してるんだ？」

「それをそのまま背負って町に出ろって言うの？死体を入れる袋を探してるのよ……あつたあつた」

取り出したのはお世辞にも綺麗とは言えない茶色い皮の袋で、何のためにそんな物置いてあつたんだと問いたい。

それをガバツと広げると雑に女の子を入れ、紐で結ぶと俺に渡してきた。

「お、俺が持つのかよ！」

「当たり前よ、先生の方が力持ちでしょ、じゃあ、さっさと逃げるわよ、行方不明になつてるでしょう私達はここに居ない方がいいわ」

「はいはい……」

茶色い袋を持ち上げるが、予想外の重さで一瞬フラついてしまう、生きてる時と死んでる時の人間の違いだな、うん、どうでもいい。

カリーナは部屋のドアを開けずに窓を開け身を乗り出すと闇を浮かせそこに飛び乗った、俺も同じ様に闇で飛びカリーナの後を追う、後ろを見るとさっきまで居た部屋の窓が見えもつと視野を広くすると大きな屋敷が見えた、カリーナの実家なのだろう、さすがは貴族。

「なあ、この辺ってどの辺なんだ？」

「カネス国のずっと南の方ね、でもどうして？」

「いや、ちょっと城下町行きたくてな」

そう、正確には城下町じゃなくて暗闇鴉の本部に行きたい、オルクスを殺したって事は任務達成って事、任務達成って事は一億ギルが手に入るって事、一億ギルが手に入るって事はそれってすごく良いことだ！

顎に手を当てると考えるように首を傾げるカリーナ

「カネスの城下町に行くよりコロナに行く方が近いのよね、それに知り合いに見つかったら困るし」

「瞬間移動で行けばいいんじゃないか？」
テレポーション

「バカ言わないでよ先生、私は爆撃を主流としてるのよ、あんな慣れないし調整も難しいし魔力もガバガバ使う魔法なんて使ったおかげで、もう魔力なんか空になってるわよ、そんな私にまたそれを使えって言うの？」

「と、とにかく、カネスの城下町には絶対行くからな！絶対だからな！」頑にこれは譲れん。

「はあ……わかったわよ、もう暗くなつて来てるし、たぶん着く頃には真夜中でしょうね、その代わり、私の用事を先に済ませてもらうわよ」

やったああああああ、やっと一億が近づいて来たな、コロナに行こうなんてとんでもないな！

「行くぞおおおおおおお！！！！」

上から見下ろすと木だらけの景色もなんだかとってもステキに見えるから不思議だ、思いっきり手を広げ、城下町に向かって闇を進めた、ヤホオオオオオオオオ。

「逆方向よ先生」

眠い、ひたすらに眠い、よくよく考えれば朝からたくさん動いてほとんど休んで無い、疲れもたまりしんどいはずだ。

それはカーリーナも同じの様でまぶたを何とか持ち上げながら夜の城下町を歩いている。

町だとさすがに怪しまれると言って闇を降りた事で体への負担が大きく、よけいな体のダルさに耐えながら向かっているのは教会である、というより城下町と言っても真夜中なのでほとんど人は居ない、空も星々が輝き明かりもほとんど無いんだから闇を使いたい

……

「なあ……闇使って移動しよう、疲れた……」

「もうすぐ着くからガマンしてよ……」

しばらく歩くと教会に着いた、そこそこ大きな教会で建物のてっぺんには十字架が立っておりここが教会だと一目で分かる、闇を出すところカーリーナはその十字架の部分まで上り始める、俺もそれに続く。

十字架の場所まで行くと、重たい茶色の皮袋から死体を取り出し、十字架に押さえつける、白をベースにした服を着た女の子の死体は服の様に青白く染まり、硬い、それを無理矢理、手を広げさせる形にするとカーリーナがどこから取り出したのか二十センチ程の杭を女の子の左手に突き刺し闇で十字架に押し込めていく。

「どっから出したんだよそんなの」

「その袋の中からよ、元々武器を入れてあった袋だもの、ちようちよこの杭があるし死体と一緒に入れておいたの、気づかなかった？」

「それでそんな重かったのか……」

その間にもカーリーナは左手の次は右手、右手の次は左足と杭を差し込んでいき、最後に首にグサリと指すと、白かった服が右手右足、左手左足そして首の部分だけ赤に染まっていく。

「これでいいわね……」

一息つくカーリーナを見ながら俺は疑問に思ってた事を言った。

「何でこんな事するんだ、疲れるだけだろ、損にしかならん」

「勇者に会った時——」

カーリーナは語る。

「引け目を感じたのよ……たいして戦っても無いのに圧倒的な差を見せつけられたというか……それで絶対殺してやるうって思ったら、魔法切られちゃうし……何なのよあれ、あり得ないわよ！」

やっぱりあり得ない事だったらしい、俺がおかしいわけじゃなくて安心した。

「それで、勇者が一番嫌がることって何かしら？って思って、思いついたのが勇者の仲間を殺す事だったのよ、勇者パーティーの一人が力ネスの教会の十字架に磔にされてたら、きっと話題になるわ！コロナは信仰心が他の国に比べてうんと高いし、うまくいけば力ネス対コロナの戦争になるかもしれないわよ」

じゃあこれって結構やばい事なんじゃないか……まあいつか。

「それ考えると、私の判断はよかったわね、それにあの時逃げてたら、私達ただの小悪党よ、これで謎の敵くらいにはなったんじゃないかしら」

「そうだな……じゃあ帰るか……」

「あら、先生、用事があつたんじゃないの？」

さすがに眠いし、一億の大金は普通とは違ってボスから直接渡されるって聞いているので、早くにも一億ギルちゃんに会いたい所だが、さすがにこの時間は闇ギルドでも寝ている、夜だと暗殺任務がやりやすいのもあり、ボスは夜は忙しく無く、むしろ朝が一番忙しいらしい、今はグッスリ眠りこけているだろう、それに、この早く一億ギルちゃんに会いたい気持ち泳がせるのも悪くない。

「うん、明日にする……」

「でも、帰るってどこに？」

「家だ、お前も泊めてやるから、闇使って帰ろう、ダメならお前は泊めんぞ」

「セコいわね、それじゃあ帰りましょうか」

俺は闇を進めると自宅の方へ向かいだした、それにカーリーナは後から着いてくる、明日の新聞に載るかしらなどと言っているカーリーナの独り言を聞き流し、一億を思いをはせながら、自宅に着くまで眠気を押さえていた。

十八（前書き）

今までを読み返して見た所、魔法名が作者でも混乱する始末だったので、今までは『ファイアボール』という感じで英単語を並べただけでしたが、これからは、『ファイア・ボール火球』と、いった具合になります。

今までの話の魔法名も、徐々に変えていこうと思っております。

十八

やわらかで暖かい日差しが俺のまぶたの上に乗っかっている、気持ちよく、暖かい布団の中から出たくないの、もう少し寝ていようと思うが。

「先生、朝よ！起きなくていいの！？」

遠くの方から聞こえるカーリーナの声で完全に目が覚めてしまった。

昨日、寝てからまだ少ししか経ってないだろうに、何故こんなに早く起きれるんだろうかと思いつながら寝室を出て、カーリーナがいるであろうリビングへと向かった。

「おはよう先生、朝食もう出来てるわよ」

「おはよう……」

リビングテーブルにはフカフカのパンや良い香りのシチュー、色とりどりのサラダなど健康に良い食事が並べられていた、いやあ、あれだけの食材でこんな豪華な朝飯を食わせてもらえるとは、泊めたかいがあつたなあ……ん？

「おい、食材はどこから取ってきたんだ、パンと水くらいしか無かったはずだぞ！」

「パンと水だけじゃ、体に悪すぎるわよ、だから近くの市場に行つて、色々買ってきたの」

「……………誰の金で？」

「先生のポケットに入ってた一万ギル札で」

ハアアアアアッアアッアア！！！！

「アホかあ！あれ取るのにどれだけ頑張ったと思ってるんだよ！冷たい水を腹で滑ってやっと取ったんだぞう！ひどい、こんな事ってあるか、せつかく濡らさず取れた綺麗な一万ギル札だったのに、食材なんかに使われるなんて……………ああ、可哀相な俺……………」

「ケチ臭い事、言ってる暇があるなら、冷めないうちに食べてよ」

クソウ……………仕方ない、いただく他ない、しかし、他人の金をポケットから取ったあげく、それを何の悪気も無しに使うとは何という女だ。

恨みを持ちながらも黙々と食っていく俺に対して、カリーナは黙々と新聞を取っていた、その新聞も俺の金で買ったんじゃないだろうな……………

「その新聞はどうしたんだ……………」

カリーナは顔を上げると新聞を手渡して来た、俺はそれを受け取り、バシッと張らせる、一回やってみたかったんだよなバシッとやるの、そして一面記事を見やると、こう書かれていた。

『号外』

よかった、号外は無料だという事は硬貨が紙幣に変わるよ！とい

う悪魔のささやきにも似た前の号外が来た時、わかっている。

勝手に食材を買われ、その上、新聞までどこから買って来ていたのなら、いかにこの食事の後、暗闇鴉で一億ギルが手に入るといっても怒ってたからな、まったく……それで、この号外にはどんな内容の記事が載っているのかな？

『勇者様の復讐・裏三大勢力の内の一つ暗闇鴉つぶれる』

エエエエエツエエツエエツエエツエエエ！！？

「え？ええええ？ええ？ええええええええええ！！？」

「フッフ、無職ね先生、まあ私もだけど」

いやいや、そんなのどうでもいい、それより暗闇鴉が！？俺の一億はどうなるんだ、続きは！？

『昨日の昼頃、暗見森を歩きカネス王国を目指していた勇者一行の前に暗闇鴉の鉄砲玉と思われる二人組が現れ、コロナ王国の神子であり、回復のレダとしても知られる、レダ様を誘拐し殺害した。』

勇者様は大変お怒りになられ、テレポーテーションコロナ王国に瞬間移動で戻ると、コロナ王にこの事を伝える、するとコロナ王からカネス王へと通達が出され、カネスとコロナ総出で、どこを探しても見つからなかった暗闇鴉の本部を見つける事が出来た。

勇者一行とカネス騎士、コロナ騎士で暗闇鴉を攻めるがレダ様は見つける事が出来ず、暗闇鴉の首領であるコルヴィスや幹部らも捕まえ尋問したが何も分からず、部屋にあった資料などを一通り調べ

るもレダ様の事は出てこなかった。

勇者一行は居ても立ってもいられずとカネス城下町を走り周り、そしてレダ様の遺体を見つけたという、この事についてカネス王は回復のレダが亡くなったのは残念だが、暗闇鴉から他の闇ギルドの情報などを入手出来た事に関しては素直に感謝しようとし、それに対してコロナ王はもつと早くに暗闇鴉を潰せたはずだ、そうすればレダも死ぬ事は無かっただろう、とカネスの闇ギルド対策に不満をもらしている。

さらに、レダ様の遺体が見つかった場所も問題で、コロナ王はコロナ王国に対する間接的なテロ行為で、暗闇鴉に早めに処置しなかったカネス王国は責任を取るべきだと主張し、一方カネス王はこれは暗闇鴉が独断でやった予期せぬ自体であり、闇ギルド討伐にも力を入れていたが、それでも見つからない本部を見つけたのは奇跡のようなもので、カネス王国には一切の責任は無いとしている。

国同士のにらみ合いが思わぬ所で始まってしまったが、喧嘩にならない事を祈るばかりである』

肝心の一億の事が書かれてねえ！？こうなったら……

「出かけてくる！」

「暗闇鴉の本部に行くなら、やめといた方がいいわよ、場所書かれてたから買い物ついで行ってみたけど、騎士が見張ってたし、私と同じで見物人が多かったわ」

「じゃあ俺の報酬はどうなる！？」

「知らないわよ、税金にでもなるんじゃない？カネスかコロナか知らないけど」

最悪だ、最悪すぎる、号外なんて大嫌いだ！ああ……一億の神、一億神よ……何故、俺を見放したのだ……こうなったら一か八かだ……薄い望みにかけるしかない。

「出かけてくる！」

「どこによ、暗闇鴉はダメって言ったでしょ、人の話を聞いてないの？仕方のない人ね」

何故か勝手に仕方のない人にされた。

「暗闇鴉には行かないって、勝手に仕方のない人にするな、こうなったらレーゲンさんの所行って、報酬支払ってくださいって言うしかない！」

「出来るの、そんな事？」

「わからん、だが、ここに居るより動いた方がマシだ、万に一つの可能性があるなら俺はそれにかける！留守番しといてくれ、もう金は使っなよ！」

そうして、俺は急いで玄関を飛び出した。

「って、ここカネス学院じゃない、ここにその依頼主がいるの？」

「というより、何故ついてきている」

俺と勝手についてきたカーリーナはレーゲンさんに、会うために、カネス学院にやって来たが、人の気配というものを感ぜられない、この時間だと、もう生徒達も登校しているはずだから、ガヤガヤとうるさい声が聞こえてきてもおかしくないはずなのだが、シーンと辺りは静まっている、日曜日では無かったはずだ。

いぶかしく思いながら、いつもより広々と感じるカネス学院の門を抜け、教員棟へと入って行く、この学院の防犯設備はどうなってるんだ。

副学院長室と書かれた部屋に入るが、肝心のレーゲンさんが居ない、あるのはやけにこざっぱりした机と椅子だけだ。

「教員棟は職員室しか行ったこと無かったけど、こんな汚い部屋もあるのね」

言ってやるな、可哀相だろ、だがしかし、前見た時とは違いがある、レーゲンさんの仕事机やテーブル、ソファなど物は変わらないし、小汚さも前のまんまだが、どこか違う……あ。

「そっか、学院長室か」

「何言ってるのよ、学院長は先生が殺したんでしょ、忘れるなんてどういう頭の構造してるのよ」

「違う違う、言っただろ、レーゲンさんって、副学院長だった人だ」

「副学院長……」

カリーナは本当に分かって無いようだ、頭を傾げて上方向を見ながら、眉毛が近づいていく。

「朝礼なんかで喋ってる人かしら……」

正解っ！

「何となくは分かるんだけど、大分おぼろげね」

そこまで影薄かったのかレーゲンさん……可哀相に……今から一億を取り立てに行く俺が言えた事じゃないけど。

副学院長室を後にして教員棟の最上階に着いた、相変わらずの豪華さを振る舞いながら、赤々とした絨毯はゴミ一つ落ちてない、それがズラーと続き、一つ目立つドアがある、学院長室である、今更ながらどうして学院長と副学院長とでこんなに違いが大きいのが不思議で仕方がない。

学院長室の前まで来ると、妙な歌が聞こえて来た、鼻歌まじりのごきげんな声で歌う、浮かれたおっさん声、レーゲンさんに違い無い！

コンコンとノックを二回、ちなみに二回ノックはトイレの時に使うらしい、でも二回。

中から陽気な、はいという声が聞こえたので、良しの合図とし

遠慮無くドアを開け入ると、これまた相変わらずの豪華な部屋だった、しかし、両脇の棚にはチェス盤では無く、本がギッシリ、仕事机には副学院長室の時には見た大量の書類がのつてあり、それに隠れるようにレーゲンさんがニコニコとこちらを向いていた。

「いやあよかった、モトム先生、生きてたんですね、おっと、そこらはカリナ・デルフィヌスさんですね、貴女もよくご無事で、まあまあ二人ともおかけになって」

やけに機嫌の良いレーゲンさんを見ながら、ああ、この人かといった顔をするカリナ。

俺とカリナがソファに座るとレーゲンさんは小さな袋を取り出した。

「話は分かってます、報酬の事でしょう、この魔法の袋に一億はいつてます」

EEEEEEEEEEEEEEEEEEEE!!!!マジデ!?

「報酬はギルドに先払いのはずじゃ……」

「いえいえ、コルヴィスさんに、成功する確率が少ないから後払いでいいと言われましてね」ありがとうボス、あんた良い仕事してたよ。

「じゃあ遠慮なく!!」

そう言って、魔法の袋をもらい中身を確認する、見えたのは札束の山、山、山、すばらしい!

「一億なんて、すごい大金ね、これで無職でもしばらくは暮らしていけるわね」

「無職？モトム先生には教師を続けて……というか副学院長になってもらいたいのですが……」

え？副学院長？オルクスと同じ事言ってる！

「書類整理をしるということですか！？」

「違いますよ、単なる礼として副学院長のポストをあげようと思ってるだけです、書類整理なんかは私がやりますしね」

マジでか、良いなそれ、次の学院長決定だし、給料も入るし、何より貯金を切り崩して生活したくないからな。

「よし！やりま——」

「ダメよ」

俺の元気な返事もカーリーナの冷やかかな声にかき消えた、何だよ

……

「私達の目的を考えたら、そんな一定の場所に根付くような仕事はダメよ、出来れば裏の仕事がいいわ」

そうだった、おいしい話の連続にすっかり忘れていた。

「私達という事はカーリーナさん、貴女も学校をやめるつもりじゃな

いでしょっね」

「勿論、そのつもりよ、私が生きてた事、誰にも言わないでくださいね」

レーゲンさんは、バーコードのその頭を掻きながら、考える素振りをする。

「都合があるみたいですね……いいでしょう、魔族に殺された生徒リストに載せておきましょう、今日は昨日あんな事があったものですから特別休暇なんです、だから荷物整理のために来ていた私とお二人しか学院にはいません、大丈夫、誰にも言いませんよ」

さすがレーゲンさん！でも戸締まりはしっかりね！

「あと、裏での収入を望んでるようですね、なら闇ギルドの夜桜兎（やなざくらう）の本部を知ってますので、その地図を書いてあげます」

「おお！ありがとうございます学院長先生！！」

「学っ！？、ハハハ……照れますなあ」

最後の最後に、ちょっと気持ち悪いもんを見た。

十九

「いやあゝしかし、金になる仕事が見つかってよかったなあゝ」

先生は意気揚々と機嫌良く青い空を眺めながら歩いて行く、こんな事を言ってるが実際の所は先生の腰にぶら下げてある魔法の袋、もとい一億ギルが嬉しくて仕方がないのだ、カネス学院を出てからというもの、やれ今日は天気が良くてよかったのだ、やれ今日はレーゲンさんにあえてよかったのだ、やれ今日は町の雰囲気も明るいのだ、ずっとこの調子なのだ。

夜桜兎の本部がわかって良かったのも、空が青いのも、レーゲンさんに会えたのも、否定はしない、だが周りを見て言っている訳では無さそうで、町の雰囲気は雲でも降りてきたかの様に暗かった。

それというのも、昨日の私達がやった事のせいで、コロナ王国とカネス王国の仲が悪くなった、新聞では軽い目に喧嘩という表現を使っていたが、他国の神子、それもコロナ王国の神子が自国で殺されて、コロナ王は怒っている、それにコロナ王の発言にも少々問題があった、カネスの闇ギルド対策への不満を述べた事でカネス国民の怒りを買ったのだ。

カネス国民は武闘派が多く、闇ギルド対策にも力を入れていた事は本当なので、それを一概に否定されたと受け、コロナに宣戦布告せよというビラが配られるほどである、危なくいけば戦争の第一歩だというのは誰もが分かる事、分らないのは子供かボケた老人か、目の前で浮かれてる先生くらいだろう。

昨日今日でここまで効果が出るとは思わなかったし、半場思いつ

きでやったこの事が本当に正しかったのかは、まだ分からない、勇者を混乱させるくらいは出来た事を祈ろう……

私が考えていかなければ勇者は殺せないだろう、勇者の強さに関する記述は幾つかある、『初代勇者伝』など子供向けの本から始まり、『歴代勇者の身体能力・魔法・光の力に関する魔法構築からの観点』なんて難しい本もあったりする、魔族の悪魔長から勇者を倒してほしいと言われ、魔王からは闇を与えられた、タマゴの様な形だったけど意思のようなものもあるのかしら……

勇者の光の力は魔族には天敵だという事は分かるが、悪魔長は勇者が魔界に来る頃には自分でも倒せないと言っていた、そうすると魔界に来る前ならば倒せる可能性もあるって事だ、わざわざ私達……というより先生をさらおうとする意味は無かったはずだ、人間に頼むより、強い魔族を二、三人勇者に送り込む方がよっぽど可能性がある。

色々と情報が足りないが予想では他に何か別に目的があると思っている、とここまで考えてるのはたぶん私一人だけ、先生が何かお金以外の事を考えているのはあまり考えられない。

夜桜兔に向かつてる最中で、段々と治安は悪くなっていくのに、相変わらず周りへの警戒心無しで空を見ながら微笑んで歩いてるんだから危ない。

本当にお金の事しか考えてないんじゃないかしらと思う、錬金術は難しい分野だからその専門ともなれば頭はいいんでしょうけど……そういえば。

「ねえ、先生」

「ん？何だ？空の青さが気持ちいい事ならもう知ってるぞ、ハッハッハッハッハ！」

暗い町の雰囲気の中で先生の上機嫌な笑い声はよく響いた。

「そうね、上ばかり見てたらそりゃ、そういう気分にもなるわね……ってそうじゃなくて、さっき子供がぶつかって行ったの覚えてる？」

そう、少し前に子供が走って来て、先生にぶつかって行った、上なんか見て歩いてるから……とも思ったが実は違っていたのだ。

「あゝあの子供、普段なら親でも呼ばせる所だが、今の俺は機嫌が良いからな、何たって一億……」

先生は気づく、自分の腰に魔法の袋、もとい一億ギルが無い事に、段々と真っ青になって行く先生の顔が何だか面白くて少し笑ってしまふ。

「フッフ、さっきの子が取って行ったわよ、あれは慣れてる感じね」

「気づいてたのかああああああ、何故教えなかったあああああああつああああ！？」

「これで分かったでしょう、いつ何時も注意しなさい、ましてやこんな治安が良くない所で浮かれちゃダメよ」

「そんなもん、口で言えよおおおおお！どうすんだよ一億！」

先生は頭をグルングルン回しながら、もがく、どこぞの大道芸人のようだ。ここは人通りが全く無いので良かったが、もうちょっと開けた所でやっていたらかなり目立っていただろう。

「一億うつつうつつうつつうつつ……… コロス、イチオクトツ
タヤツコロス、ゼツタイニコロス、ソウダ、コノマチゴトケセバ、
トリアエズソイツハ、シヌ………」

「や、闇を使えば大丈夫でしょ、まだそんなに離れてないだろうし
………」

「ソレダアアアアアアアアア」

ドスンッ

先生が血走る目を地面に向けると、すごい勢いで地面に手をついた、煉瓦を並べて出来た地面は先生の手形にくぼむ、そこから闇が少し漏れ出していて多くの闇を地面に流してる事が分かる、視覚を闇に移動させれば、ここら一帯は先生の目になる。

「ミツケダ………」

そう言つと、先生は目にもとまらぬ早さで来た道に戻って行った、何であんなに早く走れるのかしら、それと私、置いてけぼりね………
早く帰ってくればいいけど………

物陰に隠れる、ここら一帯は色々な物が転がり、曲がり角も多いので、逃げるには最適だ。

「どこ行っただ！クソッ！」

男は私とは反対方向に走って行った、それにしても走り疲れた……四十を超えたオッサンの私にはかなりキツイ、どうしてこんな事になったのか……

偶然……本当に偶然だった、その日は息子の五歳の誕生日前日だった、三十の後半で結婚し、子宝にも中々恵まれ無かった私にやっとな出来た息子、だがその時に妻を亡くしてしまった、その事が原因かどうかは分からないが、仕事仲間に親バカと呼ばれる程かわいかった、明日の事を思いながら愛する息子へのプレゼントを買い、幼稚園に迎えに行き、帰ると息子と夕食を食べ、話をし、そして寝かしつけた、だが明日の事が楽しみで、興奮冷めやらぬ私は横でグツスリと寝る息子とは違い、全く眠れなかった。

その時、よせばいいのに、少しくらい良いだろうと思い、バーに行ってしまった。そこには、偶然にも仕事仲間が一人で飲んでいたので、明日も仕事があるにもかかわらず仕事のグチを肴にしながら、たらふく飲んだ、そこまではよかった……

酔った私はいらぬ事まで語った、国の政治の事、王の悪口、息子こそ王にふさわしいと、どれだけ話していたのか分からない、隣で一緒に飲んでいた仕事仲間は酔いづれ転がっているし、相当な時間、話していたのだろう。

それでも構わんと、話していると急に肩をたたかれた、後ろを振り向くと騎士、酔いが一気に冷めた。騎士がどうして居るのかは分かる、私を不敬罪で、捕まえに来たのだ……

コロナ王国で生きて行くには気を付けなければならない事の一つを酔いの勢いで潰していたのだ。

私は逃げ出した、騎士が相手だろうと必死で逃げ出した、向かう先は勿論、家で土地代も家代も、まだ地主にも大工にも返してない真新しい家は、私の心を落ち着かせた、家に入ると直ぐに息子をたたき起こした、そして聞いた、平和だけとお父さんはいない生活と、危ないけどお父さんがいる生活、どちらがいいと。

息子は私と居る事を選んでくれた、そして、私は国から逃げるため、息子と私の生活費を稼ぐため力ネスへとやって来た。

しかし、ここからが苦難の始まりだった、裏の仕事が多いと聞く力ネスへと出向けば何かあるだろうと思ったが、そういうのは闇ギルドが全て管理しているらしい、闇ギルドに入るためには、その本部を見つけないといけない、だが国でも見つけられないものは勿論、全然見つからない。

情報屋に通い、何とか情報を聞き出そうとするが、勿論、金が無ければ教えてくれない、だが金を稼ぐのは無理、チョットだけ溜めてた金も、この間の硬貨紙幣両替で、両替をしようとも私は指名手配されていて、調べられたら掴まってしまふ、だから替えられなかったので無くなった、だから今もこうして盗みやひったくりで毎日をチマチマと暮らしている、正直、ここまで苦しいものだとは思わなかった、もうすぐ一年になる、今年もプレゼントはあげられそうに無い。

「お父さん！取って来たよ！」

息子が帰って来た、子供の成長や適応力には目を見張るものがある、上手く隠れてたつもりでも、息子にはバレてしまうし、盗みを私をマネてやり、それが私より上手く、逃げ方も私より上手い、これなら大丈夫だろうと思い、心配しながらも、それからは度々やらせていた。

「おかえり……じゃあ見てみよう」

そう言っただけはさっきの男から盗んだカバンを開けた、結果は布ばかり、その中に二千ほど入っていて他には何も無かった。

「生地屋だったのか……」

「すごい！お父さん見てよ！」

そう言う息子が盗って来た物を見る、ん？それは魔法の袋じゃないか！そんな高価な物を……

「よくやった！それで中身は何だったんだ？」

「お金だよ、ほら！」

息子から受け取り、それを中身を見る、私はアゴでも外れたように口が開き、これでもかという程、目が見開いていたろう、袋の中には金、金、金、金、札束の嵐である、私は袋を急いで閉じると辺りを見渡す、誰もいないな……これで情報屋に聞き出せる……いや、これはそんな額では無い。

「どうしたの？お父さん、泣いてるの？」

「愛しの息子よ……でかしたぞ！これでこの生活から抜け出せる！」

「そんなにすごいのか？」

「ああ、ああ、そうだな……まずはおいしいものを食べよう、次に家を買おうか、そこで数年平和に暮らすんだ、そして無くなったら情報屋で闇ギルドの本部を教えてもらう」

「すごい！すごい！」

息子は興奮し、立ち上がった、私も立ち上がる。

「さあ、まずはおいしいものを食べに行くぞ！」

「行くぞー！」

私は息子と手をつないだ、まだ背の低い息子と手をつなぐのはいささか疲れるが、何のそのである、嫌な事ばかりじゃない、ちゃんと幸は巡ってくると、この子が教えてくれた。

「贅沢三昧生活の始まりだ！」

その時、私の肩にグツと重みがかかる、感覚で腕を右肩から左肩へとかけて置いてあるのが分かり、息子の手を握る左手にあせがにじんだ、恐る恐る右を向いて見ると、恐ろしい程、無表情な男がこちらに顔を近づけながら、こう言った。

「ゼイタクザンマイ？イイドキョウジヤナイカ……コロシテヤロウ
……」

十九（後書き）

今更ですが誤字脱字があれば、ご指摘お願いします。

「あ……ああ……あああああああ！！！！！」

お父さんが死んだ、袋を頼ずりをしている、この目の前の男に殺された、一瞬だった、一瞬でお父さんの首から大量の血が出た、男がお父さんの手からひったくる様に袋を奪うと、ケラケラと笑いながら去ろうとする。

「ま、まま、ま、待て！」

許さない、この男を許さない、袋を奪ったのは僕だ、僕が殺されるべきなんだ、よくもお父さんを殺したな、許さない、許さない、許さない！

「殺してやる！」

「ほお、力も無いくせに威勢だけはいいな」

男は袋を大事そうに懷へ仕舞うと、こちらを見て笑った。

「お前は俺から一億を奪った、これは十分と言っていいほど、死に値する、では何故殺さないのか、簡単な話だ、ただ単に機嫌が良いからだ、殺しをするほど機嫌も悪く無く、殺しても何のメリットも生み出さないお前を殺さないってのは、正しい判断だろう？」

「ならお父さんも同じだ！袋なら奪えば良かったんだ！」

「言っただろう、機嫌の問題もあるんだ、その時の機嫌は最悪だっ

たよ、人から奪った金で贅沢三昧なんて、俺に喧嘩を売ってるようなものだ、だが今は機嫌がいいんだ、精々命を大切にしろ、俺を殺すなんて考えない方がいい」

そう言つて、男は振り向き歩き出した、逃がさない！！

「逃げるのかっ！」

男はピタリと止まると、振り返らず、背中だけを向ける。

「逃げると思っているなら、追いかけて来い、まあ、その震える足で出来たらの話だな」

「っ！？」

「せめて、メリットでも持つて挑んで来い、お前を殺したら百万ギル……とかなら、何時でも殺してやるよ、楽な仕事だ、しかし……それを考えるとお前の親父は本当に意味の無い存在だったな、もう少し使い道があったかも……」

僕はガマンならなかった、足の震えも何時しか止まっていた、何の武器も無い、何の装備もしていない、腕力も無ければ知恵も無い、金も無ければ勇気も無い、そんな僕にも怒りはあった、お父さんを、殺された父さんを、殺した張本人にバカにされるのは、どうしてもガマンならなかった。

「アアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！」

僕にとっては、一番の攻撃だった、ただの殴打だけど、すべての怒りをぶつける、段々と男に近づいて行く、強く拳を握り、大きく

振りかぶり、油断している男の背中に、思いつきり殴りつけた、勝ったつもりだった、しかし甘くない、男の手によって僕の腕は止められていた。

「メリットを持ってから来いと、言わなかったか？」

男の手が目の前まで来る、それは中指を折り曲げた状態で、昔、お父さんと一緒に手でキツネなんかを作った事を思い出した、しかし、それとは違い、大きな圧迫感が頭を襲った。

薄れゆく意識の中で見た、男の顔はまだケラケラと笑っていた。

「本当に行くのか、ルフト？」

「ああ……」

俺はギルドマスターの部屋に居る、これから長く旅に出ようというのに、育ての親に何の挨拶も無しに出て行くのはどうかと思ったからだ。

「しかし、お前を学院に入れたのは失敗だったねえ、学院を監視する任務があったから、わざわざ働き者のお前にちよつとした休息としてあてたのに、友達は相変わらずカリリーナちゃんだけだし、学

院サボって他の任務に出かける事もあるし、挙げ句の果てには学院の任務までほっぽり出して旅に出るなんてね……とんだ親不孝者だよ」

「すまない……」

マスターには悪いと思っている、いつも我が儘ばかりで、俺に出来る事といったら任務をこなす事だけだし、今回の任務も、重要だが、別に俺で無くとも良かった、昔から修業や任務ばかりで中々人に馴れない俺に気を遣ってくれたのに、それまで捨ててしまった、それでも今回の我が儘だけはゆるしてほしい。

「本当にすまない……」

「はあ……別にいいんだよ、魔物狩りの最中に魔族に襲われて生徒が大量死亡、そしてカーリーナちゃんは行方不明って聞いた時からアంతが何かするって事は分かってたさ」

「じゃあ……」

「行っておいで、偶には顔見せるんだよ」

マスターはシッシツと手を振り、もう片方の手でペンを書類に走らせた、俺は無言で部屋を出た。

旅の準備はもう出来てある、杖、着替え、刃物、金、これだけで十分だった、というよりこれ以外に何を持っていけばいいのかが分からなかった。足りない物があれば途中で買おう……

カネスギルドは城下町のほぼ真ん中に位置していて、なおかつ丈

夫に作られ大きいので、観光客やギルド員、風しのぎのホームレスなんかでいっぱいだ。

それも、もう慣れた事で、人の波をかき分け進んで行く、ギルドを出ても、人混みは続き、普段使っている瞬間移動テレポーションが便利なものだとよく分かる。

人混みが嫌いで、なるだけ人が居ない方を進む、すると必然的に治安は悪くなって行くのが目に見えて分かる、先日的事件で戦争一步手前と来ていて、暗い顔をしている者が目立つ、こいつらは必ずどこかで裏と繋がっていると見ていい、戦争なんて事になったら、無理矢理、戦場に出される、そのついでに住所や所属なんかも洗いざらい調べられるので、裏だとバレる事を恐れているのだらう、戦争真つ最中に裏だとバレたら、敵のと真ん中に投げ捨てられるのだらうし……まあ、自業自得だ。

まだまだ歩く、旅は始まったばかりで、少し腹も減ってきたなどと思いながら、旅の準備に食料を忘れた事に気がつく、金を持っていて良かったと心底思った。

アアアアアアアアアアアアアアアアアアアア……………

なんだ……叫び声……それも声質からするに子供だらう、何かのいざこざにでも巻き込まれたのかと思うながら、声が聞こえて来た方へと急ぐ、レンガで出来た地面は長年使い古されたもので、くすみのせいで滑り、上手く走れない、それでも何とか声がした方向に走った、この辺だと思っただが……

角の死角になっている所でそれを見つけた、首から血を出して倒れている男と、仰向けになっている子供、男の方へと駆け寄り脈を

みてるが、死んでいる……窒息死か出血大量か分からないが、とにかく死んでいた。

次に子供の方を見るが……よかった、こいつは生きていた、どうやら気絶しているだけの様で、命に別状は無さそうだった、さて……どういう状況だったのか……見当が付かない、この男が襲ったというのは無理がある、この子供ではコイツに勝てないだろう、誰かに襲われた？では何故、子供だけ気絶ですんだのか……とにかくにも、この子供は生きている、どうにかしなければならぬ。

「おい……起きろ……おい……」

少しゆすると、薄く目を覚ました、まだ覚醒しないのか、うつろな目でこちらを見ている、やがてハッと気がつくと、男の元へと駆け寄った。

「夢じゃなかったのか……お父さん……」

「これから……どうするんだ？」

子供がこちらに振り返る、その目には涙が溢れていた。

「施設にでも……連れて行ってやろうか……？」

子供は首を振った。

「いい、僕は価値のある人間にならなくちゃいけない……そんな所でグズグズしてられない……」

「価値？子供が使つ……言葉じゃ無いな……価値とは何をさしてい

る、富か、名声か、力が……」

「分からない……ただ、僕が殺される事で、殺した方が得をする人間になるんだ……」

意味が……分からない……

「そんな者になって……どうする、命を狙われるだけだぞ……」

「その命を狙うやつを殺すんだっつー!!」

確かな意思がそこにあった、何が起こったのか知らない、何を考えているのかも分からない、こいつは自分の考えが善になるか悪になるかも考えず言っている、何度か見た事がある、この目は……復讐の目。

「復讐を……するのか……?」

その問いに子供は深く頷いた。

「なら力が必要だな……ついて来るか……」

「アンタ、強いのか?僕が殺したいやつより強いのか?」

「俺が……お前の言う殺したいやつより強いかどうかは分からない……だが、それは問題じゃない……復讐するのは俺では無く、お前だ……強ければ……超える……それに、俺はそこそこの名を知れた二つ名持ちだ……俺に気が変わらないうちに早く決めろ」

子供は俯くと、手に力を込め、次に真っ直ぐに俺の目を見た。

「分かった……アンタについて行くよ、僕はリブラ……アンタは？」

「ルフトだ……旅の仲間が増えたな……リブラ……お前の物を色々と買わなくちゃいけない……」

「旅人なのか、何の旅なんだ？」

「愛する人を……探す旅だ……」

俺は歩き始めた。

俺は今、『勇者の全て』という特に興味も引かないような本を読んでいる、ハッキリ言うと時間の無駄にしかないような気がするが、勇者についてはとりあえず強いという事と魔王を倒す人という事、あとは刀神がそうだったように、お人好しなんだろうなという事だけしか知らない。

それでも、まあ大丈夫だろう何とかなるだろうと思ってた矢先にカーリーナが勇者を倒す算段を立てるわよなんて言い出すもんで、もう大変、それで無理矢理こんなくだらな本を自宅のリビングでほぼんと読んでいるわけだ。

斜め向かいに座るカーリーナは、早くも三冊目に入ろうとしていて、まだ一冊目の半分位の俺と比べるとすごいペースだ、俺いらねえんじゃないかね？こんな事するよりも夜桜兎で任務でもしといった方が絶対にマシだ、夜桜兎は月に一回は無理矢理に危険な任務やらされるせいで、暗闇鴉よりも人員も設備も大きく無いが、一応に暗闇鴉と並ぶ裏三大勢力の一つだと任務の多さで良く分かった。

これが終われば任務に出かけようかな……報酬が大きい任務、入っているといいな、入って二ヶ月位経ったけど、一億ほどの任務はやっぱり全然無い、はあ……

「ちょっと先生、何ボーっとしてるの、ちゃんと読んでるの？」

「あーはいはい」

クソウ、闇で脅されなければ普通に逃げるのになあ……カーリーナ

って最初見た時より怖くなってる様な気がする。

いや、今はそれよりも勇者の方が、えっと……

今まで読んで分かった事は、勇者というのは魔王を倒すために旅をしてるんだけど、実はちよつと違って、魔界に行くために旅をしているらしい、西の国コロナ王国から北の国ウルサ王国へ、次に東の国デネブ王国、南の国トリアングルムアウストラレ連合国という長つたらしい名前前の国に行き、最後に中央の国カネス王国にたどり着くのである。

何でこんな面倒くさい旅を勇者はするハメになるのかというと、ドラゴンを探すためなんだって、うん、ドラゴン居るらしいよドラゴン、久しぶりに異世界って感じがしたね。

ドラゴンは東西南北のそれぞれの国のどこかに一匹生息していて、勇者はすべてのドラゴンを見つけ出し、カネスの龍塔という場所に行けば魔界へ行けるんだとさ、カネス学院のあのバカでつかい塔がその龍塔らしい、迫力がハンパ無いでかさなだけあって、観光客には大人気スポットなんだとか、あれを見て何になるんだろっ、疑問だ。

まあ、そんなこんなで四つ共々日本とは比べものにならない程に広い領土を持つてるのに、そのどこに居るかも知れないドラゴンを四匹も探してる勇者こと刀神の奴は、今いったい何をしてるんだろっ……

二ヶ月前の暗見森で見た時はおそらくコロナからカネスへと向かう所だったと思う、北に行けよっと思っただけど、順番とかそこまで関係ないのかもしれないな。

しかし、あいつについて行かなくて正解だったな、ついて行ったら今頃は今より持ち金も少なかっただろう。

「先生、読み終わったの？」

「え？ああ、うん」思わず嘘。

「じゃあ、もういいわ、どれもコレも同じような事しか書いて無かったわ」

おお！やっぱり、そんなもんだよな実際。

「じゃあ任務へ行こう！お前が食事代を大幅に増やしたせいで金欠だ！」

「あれだけ貯めておいてよく言うわね……それに、食事代を払ってるのは私よ……まあいいわ、じゃあ顔が見えない様に仮面はめて……」

暗闇鴉でも貰ったような黒い仮面を被る、ちよつとデザインが違
うらしい、うん、まったくもって分からない。

「行きましょうか……」
『テレポーション瞬間移動』

自宅リビングから夜桜兎の受付まで一瞬で移動した、目の前のおねえさんは慣れた様にこちらを一目見やると木で出来た机から分厚い本を取り出す。

「こちらが本日受け付けている任務の一覧です」

「いや〜どうもどうも、ご苦労さん」

任務選びは楽しみの一つなんだよなあ〜さて、報酬で選んでいくぞ。

「これは三百万か……中々……」

「先生、もしかしてまた報酬で選ぶの？ 偶には内容で選びましょう」

内容で選ぶ事は無いよう、……なんてくだらない事を考えてる暇があったら、早く選べ俺、本当にくだらない。

くだらない事を考えていて手が止まるのは、それこそくだらないと思い直し、また任務が載ってる分厚い本をめくろうとすると、受付のおねえさんに話かけられた。

「もしかして、先生と生徒でいらっしゃいますか？」……なんじゃそりゃ。

「そうよ、どうかしたの？」

「まてまてまて、どうして普通に返答出来るんだ、何だよ先生と生徒ってグリとグラみたいなノリで言ってるじゃねえよ！」

「ボスが地下五階でお待ちです、任務は後にしてください」

「ボスが？ 私たちに用事なんて想像つかないけど……行かないわけにはいかないわね、行くわよ先生」

「おいおい、ちょっと待てよ。」

「……………任務は？」

「ボスが先よ」

「いやだああああああああああああ！！うぐえっ!？」

「カリーナに襟の部分を無理矢理引っ張られ、喉が詰まった、だがそんな事はお構いなしと俺を引きずるように引っ張り、ボスの部屋へ移動していく、ああ……………任務よ……………」

「任務う……………」

「ガマンしなさい、」

「チクシヨウもう！ 大体なんだよ先生と生徒って!」

「も、もしかして俺の名前じゃないだろうな……………」

「名前よ、先生と私の」

やっぱりかボケEEEEEEEEEE。

「偽名にした方が良くも思っ
て偽名で登録してあるのよ、先生
が先生で私が生徒よ、先生が先生
なのは先生って呼んでるのに、生
徒って言ったらかおかしいと思っ
て先生にしたのそれとも生徒って名
前が良かった？」

「生……いや、偽名使うにしてもセ
ンスがだなあ！」

「何よ」

何でも無いっす。

「はあ……任務は行けないし、名
前は先生だし、襟は伸びるし……
あとそろそろ離してくれ、階段を
この状態で降りたのは人生で初め
てだぞ」

「私も初めて見たわよ」

そんなこんなで、木で出来た階段
を下り、木で出来た廊下を渡り、
木で出来たボスの部屋のドアの前
までやって来たわけだ、木で出来
すぎだろ、茶色だらけじゃねえか
とのツコミを口に出す訳でも無
く俺は淡々とドアをノックする、
すると、ドアの奥から声が聞こえ
た。

「ん？誰じゃ？」

「えっと……先生と生徒です……」

あらためて思う、この名前おかしい。

「入ってよいぞ」

「失礼します……」

部屋に入ると、まず目に飛び込んで来るのはやっぱり茶色だ、クソでも塗ってあるのかと思うほどの濃い茶色の部屋に、これまた茶色めな人物、この爺こそ夜桜兎のボス、ホロ口爺だ。

茶色の目に、昔は茶髪だったんだろうと思わせないほどの白髪、そして意外にも黒い服装を着て、二十センチ程の杖をペン代わりにして書類に目を通している、どこの世界でも書類整理は大変だなと思いつながら、とりあえず机を挟んでの初対面となる。

「先生と生徒、お前達にはやってもらいたい任務があるんじゃない……」

「報酬はちゃんとあるんだろうな、無かった場合……ぐおう!？」

痛つてええええええええええ殴りよつた!カリーナにグーで殴られた!なんだよ!

「痛いだろうがああああああああああ」

「どんな任務なんでしょうか？」

無視かい!

「フム、先生だったか生徒だったか忘れてもうたが、片方が錬金術

を使え、片方が最上級魔法を使えるんじゃないかな？」

「はい、それが、どうかしたのでしょうか？」

どうかしたじゃねえよ、絶対面倒事だ……

「実はの……裏全体で『勇者対策同盟』というものが結ばれての、その委員会に行って、勇者について色々話して、それで何故か、龍塔に爆弾を仕掛けるという案が出てのう……夜桜兔がやる事になつてもうたのじゃ」

ほら、やっぱり面倒事だ、そもそもあれは、崩せるものなのか？

「それは興味深いですね、でも、どうして龍塔を？」

「もし、勇者が魔界に行くまでに、どうにか出来なかった場合にの、勇者が魔界に行った後、龍塔を崩そうという話になったのじゃ、したら勇者を魔界に閉じこめておけるじゃろう、魔界に行くにも帰るにも龍塔は要るらしいからの、じゃが、調べるとこの事はとつくに色んな者に予想されてたらしくての、カネス学院に教師として数名、それぞれ所属なんかは違ったが、どれも名のある者じゃった、生徒にも一人おったみたいじゃしのう」

ホロ口爺は肘をついた。

「最初は『生命の魔法』を奴隷か何かにやらせて、あの辺一帯ごとぶつ飛ばせばいいと思つたのじゃが、さすがに雷撃のオルクスなんかも出てくる程、警戒されてるとなると、勇者が魔界に行く時なんかはカネス学院に人ばかり集まるじゃろうし、余計に警戒されかねんからな」

「なるほど……でも、こんな時期にそんなに警戒されてるって事は、その爆弾を仕掛ける任務なんかを警戒してるんじゃないですか？」

「そんな事わかっておる、じゃから頼むのじゃ、高度な錬金術が使える上に最上級魔法が使える、暗殺任務を一日に十回連続で達成するという、夜桜兔の自慢のお前達にじゃ」

まあ、要するに、最上級魔法を込めた魔導具を作って、それを龍塔にしかけてこいという話、あれ？結構簡単？

「爆弾は仕掛けても見えないようにするのじゃ、絶対にバレても解除されるような事になってはいかん、後あの周辺は広場になってる上に人も集まりやすい、見つかったら戦闘になるじゃろう、じゃから力ネス学院内で他の部下に暴れてもらう、そのスキに仕掛けるのじゃ」

全然、簡単じゃなかったみたい、無理だろ、バレたら普通に盗られるだろ。

「必要なら殺しても？」

「構わない」

殺す殺さないの問題じゃねえ！無理無理！そんな爆弾作れない！

「世界の最重要建築物を崩す事と、魔導具を作る事、後は暗殺任務なんかの報酬としてこれだけ出そう」

指を三本立ててこちらに見せるホ口口爺、そんなもんでやるか！

任務の本に三百万の任務は一個あったし、そっちをやった方が得だろうがっ！まったく、これだから最近のポケ老人共は……

「三千万出そう」

「了解しました」

よっし！三千万よっし！ナイス三千万よっし！ヘイヘイヘイヘイヘーイ！イエーイ！

「なんじゃ、急に笑顔になったのお、ま、とにかく魔導具が出来たら連絡してくれ」

「イエッサー！！！」

やったあゝ三千万やったゝ！！やっぱいいなあ報酬の桁って大事だなあ！

家に帰ると直ぐに二階にある自分の部屋へと駆けた、三千万と聞いてジツとしていられない、で、俺が今から何をするかという当然、錬金術である。

部屋に入るとベッドに腰掛け一息つくと、次に壁に丸めて立て掛けてあつた大きめの紙を、それなりに広さのあるこの部屋にバサツと広げた。

作る物は見つかることの無い最上級魔法を込めた魔導具、三千万という言葉につられ勢いだけで承知してしまつたが、正直な話これは無理だ！最上級魔法を込めた魔導具ならなんとか出来る、しかし、見つかるよ普通は。

そもそも、魔導具というのは魔法を込めた道具という意味だ、つまり上級魔法だと初級魔法を三つ、最上級魔法だと初級魔法を四つ、しかもそれらをバランス良く込めなければ発動すらない、これだけでも難しいのに……でも、そんなに急ぎの用事でも無さそうだし、何とかがんばってみよう！

とりあえず広げた紙に魔法陣を書き込んでいく作業に入る、魔法が上手い人だと杖をペン代わりにして書いていく事が出来るが……いかにせん俺は『持ち上げの魔法』しか使えないという史上最も魔法が使えないやつといつても過言では無いのだ、というわけで普通の羽ペンで書く！インクもつたないけど……

色々考えながら魔法陣を書いていく、形状はどうしようとか硬く作つたほうが良いかとか、色々とちゃんと考えてやっていく、気が

つけば魔法陣が完成！部屋に広げた紙は円や線で埋まって、インクをどれだけ無駄にしたのかが良く分かった、これからは気を付けよう……

後は材料と魔法である、魔法を道具に込める場合、やり方は二つある、一つはこの魔法陣にさらに魔法構築の魔法陣を書く方法、しかしこれは俺が魔法構築学を一ミリも理解してないので却下、二つめに魔法をそのまま魔法陣にぶっ放す方法、上手くいけば魔法陣に魔法を込められるが、ヘタすればせっかく書いた魔法陣をダメにしてしまう、安全とは言えないがこれしか方法は無い、とりあえずカリナを呼ぼう。

「うおーい！カリナ！何か適当に材料を持ってきてくれ！後、魔法込めるから杖も忘れんなー！」

大分、大きな声で叫んだのか、そんなに大きな声出さなくても聞こえるわよ！とカリナに階ごしに一括されると、トントンと階段を上がる音が聞こえてきた、そして扉が開かれると両手いっぱい何かを持ったカリナが表れる。

「おう、何だそれ？」

「材料もってこいって言ったの先生でしょ、地下にあった十万ギル硬貨、持ってきたわよ」

ああ、そういえば地下に放置したままだったっけ、完全に忘れてた、勿体なっ！

「それで、何を作るの？」

そう言いながら、十万ギル硬貨を魔法陣の上にバラバラと置く、
というより投げるカリーナ、紙やぶれたらどうするんだ！

「もう少し丁寧に置けんのか」

「はいはい……それで、何を作るの？」

まったく……というか何を作るのだと？

「龍塔の話、聞いてなかったのか？」

「そんなわけ無いでしょ」

「じゃあ……」

「あのねえ、先生」

カリーナはやれやれといった感じで首を振るとベッドに腰掛けた、
何だろうバカにされてる気がする。

「たとえば、その魔導具を作るわよね」

「うん」

「そして仕掛けるわよね」

「うん」

「夜桜兎はどうやって、私達が仕掛けた事が分かるのよ」

え？そんなもん普通に言えば……

「学院側には優秀な魔法使いがたくさん居るのよ、その人達が分からないなら、夜桜兎も同じように分からないはず、つまりこの任務は見せかけだと思うの、本当の目的は分からないけど、重要な任務なら幹部に頼むに決まってるわ」

「ええええええええええ！じゃあ、三千万はっ！？」

「払ってくれるとは思えないわね……たぶん、カネス学院を攻める事で勇者に対する敵意を表すんじゃないかしら、勇者というば龍塔、龍塔といえカネス学院って感じだし、それで何人も暴れるなんて言っただのが説明つくわ」

「じゃあ、俺達に頼む必要ねえじゃん！」

カリーナは考える素振りをする。

「うーん……私達が相当嫌われてるのかしら……それとも勇者対策同盟とやらが本気でそんな事が出来ると思ってるのかしら……ま、とにかく、がんばりましょう」

いったい何をがんばるといふのだ……

「あー！もういい、もういい、俺は寝る！三千万もらえないのにこんな事やってられっか！」

まったく……無駄に体力を使ってしまった……

「でも先生」

「なんだよ」

「とりあえずボスには魔導具が出来たって報告しとくわよ」

「ふえ？」

何言ってるんだこいつは。

カリーナは立ち上がると部屋を出て行ってしまった。

「はぁ……あいつは何を考えてるのかさっぱりだ……」

「先生！起きて！」

「眠い……」

昨日、飯を食い忘れ、そのまま寝たので、非常に腹が鳴る、空腹と眠気、二つに襲われながら何とか薄く目を開け、横を見ると、横向きにカリーナが腕で組んで立っていた。

「おう……すごいな……何で横向きに立てるんだ……」

「先生が寝ころんで見てるからでしょ、寝ぼけてないで準備して」
襲ってくる眠気に何とか耐えながら起き上がった。

「準備って何の……」

「カネス学院を攻めるのよ」

……………エエエエエエエ！？

「何で!？」

「だってボスに話したら、明日の十時くらいにやるよって……」

「今は何時だ!」

急いで壁に立て掛けてある時計を見やると、針は八時三十分を指していた。

「何だ、まだ時間あるんじゃないか……寝る」

「これから何するのか本当に分かってるのかしら……」

カリーナを無視して目を閉じると意識がフワフワと浮き、そして沈んでいく、それがずっと続き、やがては、ああ、これは夢かと理解していく、ああ気持ちいい……極楽だあ……

しかし、そんな極楽も長くは続かない、そう、カリーナが居るか

らだ、夢の中でも分かる、その内にカリーナが起こしに来るのだろうと十分に推測できる、ああ、嫌だなあもう少し寝ていたいなあ……寝ていたいけど、どうせその内起こされるんだ、先に起きるか！

「んっ！ぐああああ！」

何とか重い体を起こす、眠気はまだ抜けない、もう少し寝ても良いかかと体を倒すのをガマンしながら何かとてつもない違和感がある事に気がつく、何だと思い横を見てみると、何とカリーナが寝ていた。

こいつは何をしてるんだ……自分のベッドで寝ればいいのと思うがさすがにたたき起こすのは、ちょっと可哀相だと思ったので、うん、止めておこうと思う。

それよりも大事なものは時間だ、八時半くらいに起こされた時にカリーナは十時に任務を開始すると言っていた、つまり十時までに着替えて杖を持ち、仮面を被ればいいだけだ、簡単簡単、何も焦る必要も無い、しかしあんな時間に起こしに来るなんてカリーナってせっかちなものかもしれない。

そんなこんなで時間を確認するために壁に立て掛けてある時計を見る、長い針は三、短い針は十をちよつと回ったくらい、つまりは十時十五分だな！ハッハッハ………え？

寝過ごした、完全に寝過ごした！クソウ、カリーナがスヤスヤ寝るからだ！起きとけよもう！しかし、早めに起きようとして良かった、あのまま夢の中で遊んでたら今頃どうなっていたか………ってそうじゃなくて！

「カーリーナ！起きろい！」

起きない、布団にくるまっていて聞こえないのか知らないがとにかく起きない、仕方ないので布団にくるまるカーリーナをバシバシ叩きながら起きろを連呼していると、やっとこさ起きた。

「うるさいわね……はあ、眠い……」

カーリーナは体を起こし、眠そうな目をゴシゴシと搔いている。

「って先生、何で人のベッドに入ってきてるのよ、夜這い？」

「お前が入って来たんだろうが！」

ああそうだったわねと言いながら時計の方向を見るカーリーナ、すると眠そうだった目は急にいつもの目になり、こちらを向いた。

「先生！大変、もう十時を回ってるわ！」

うん、知ってる。

「早く準備して、ほら、早く」

俺の方が先に起きたのに、何で俺が怒られてんだとか、この時間なら朝食の余り物を頑張って食ってる時間なのに、腹が空きまくりだとか、何でこんなに体力を使いそうな任務を昨日の今日でやらなきゃいかんだとか、色々と文句を言いたい事があるが、何故か髪が乱れてるとか言って、真っ先に水の方へ行ったカーリーナを見てたら怒る気力も無くなって来た、乱れてるのは髪じゃなくてお前が踏んで行った紙だと言いたい。

今日は疲れる一日になりそうだ……

今日のカネスの天気は晴れである、青空が清々しく輝き太陽はカネスの国民を暖めていた、ある場所を覗いて……

「どうなってんのこれ？」

俺の当然の疑問は、カリーナが魔法の一種ね、と一言放ち無視された。

カネス学院の真上だけに厚い厚い雨雲が黒く佇んでおり、雨雲なだけにどしゃ降りだ、カネス学院だけが他の晴れ晴れとした景色と対する様に灰色がかっていた。

カネス学院の圧倒させる程の大きな門を闇を傘代わりにして入って行く、バラバラという雨特有の音が耳に木霊し妙に不気味に思えそれと同時に寒気を感じた。

「ああ、寒い、音はうるさいし、地面は濡れてるし、誰だよこんな事したの」

「さあね、でも相当な手練れよ、味方だといいいんだけど……とにかく、どこか校舎に入りましょ、あまり闇を出しっぱなしにするのもどうかと思うし、龍塔までは遠回りしてでも行けるわ」

「ちょい待ち」

右手を前に突き出してカリーナを止める、カリーナは何よと仮面の奥からこちらを見据えていた。

「龍塔まで行って何になる、報酬が貰える可能性も少ないのに、体力の無駄だ」

「龍塔は勇者を代表する塔よ壊しておいて損は無いはずだわ」

「損ならある、今言つたろう？体力の無駄だ、今に壊せるものなら後でも壊せる、視界も良くない、敵のかも味方のかも分からない雨、やるなら別の日にでも出来る」

腕を組みため息を吐くカリーナ。

「別の日に、二人で襲う事が出来るほど、簡単な所じゃないわよこは……世界で一番の魔法学院だもの、生徒は高等部だと毎年、世界中から何十万と志願が来て、その中から千人しか選ばれない、初等部なんかはたったの五十人よ、初等部からカネス学院に入らうて事は将来を約束されたも同然、そんな金の卵達を教える教師はその道のプロ、とてもじゃないけど、別の日にやっちゃおうなんて気にはならないわね、やるならボスが言うようにカネス学院で騒動が起こつて今やるべきよ」

周りを見渡して見る、様々な棟に分かれ多くの建物が建ち並ぶカネス学院は相変わらずの灰色の雨で静けさを醸し出していた。

「騒動ねえ……」

いまいち納得いかないが、後でやらなきゃいけない事なら今やっところと自分に言い聞かせ、無理矢理納得する事にした。

とりあえず雨の下に居るのも飽きたので近くにあった校舎に足を

向ける、大きな扉が開きっぱなしになっており、少し上を見やると特別教室棟と書かれていた。

「おお、久しぶりに見るな」

教師をやった期間は短かったけど、この棟には散々通った、錬金術の授業はこの錬金術実践室という場所で基本的に行われていたので、毎日の様に通ってたのだ。

「そういえば錬金術実践室にいくつか材料を置き忘れてた気が……取りに行こう！」

「高価な物なの？」

「いんや、ゴミ捨て場で拾ったものだ、でも今は俺のものだ」

「この人、元教師よね……」

闇を消し、コツコツと足音を立てながら、錬金術実践室へと向かう、実践室は二階にあるので階段を上がり、また廊下を歩いて行く。

正直なところ、実践室にある材料なんてどうでもいい、所詮はゴミ捨て場から拾って来た物だ、勿体ないという気持ちは勿論あるがそこまでじゃない、しかし、取りに行かないと何だかやっぱり納得出来ないのだ、別に龍塔を壊すならお前一人で行けよとカーリーナに言いたい、とにかく何の得も無く、ただ龍塔を壊して終わり、それが嫌だっただけである。

よってカーリーナにさっきからセコいだの何だの言われるが何にも気にならない！

「……ん？」

足を止めるカリーナ、意味は分からないが俺も足を止めた、すると小さく聞こえて来るのは足音であるうコツコツとした音、俺はカリーナにどうするといった意味合いを込めて顔を向けた。

「隠れるわよ……」

そう言うと、即座に闇を出し手の平に集め、壁にガツシリと手を付くと壁をよじ登り始めた。

お前はアメリカに居る蜘蛛男かと、いやカリーナだと蜘蛛女？ともかく蜘蛛の様に壁を伝い天井に両手両足を着けて衣服の乱れを気にするカリーナは、どこからどう見ても変人だった。

「何してんのよ、先生も早く……」

「はいはい……」

何を思っこの隠れ方を取ったのかは知らないが、好んでやったのならちょっと、どうかと思う。

そしてカリーナと同じように闇を出し天井に張り付いた、そして段々と足音が近づいて来る、バレたら完全に不審者だなこれ！

足音がまた一歩また一歩と大きくなっていく、人影が見えてきた、紺色の制服に身を包み、青バッチを着けた生徒、それが二人コツコツとこちら側に歩いて来た、青いバッチを着けている、つまりは生徒会に入っている生徒だ。

人影は近づくにつれて影ではなくハッキリと見えてくる、二人とも知っている、右は三年C組のミラ、左は三年A組のヌンキだ、この男女二人は俺の年齢を気にせず先生として慕ってくれた、さすが生徒会だと思った、そんな二人は辺りを警戒しながら歩いている、手には勿論、杖が握られていた。

俺の下を通りすぎて行く、意外とばれないものなんだなと感心していると、肩を叩かれる、こんな状況で俺の肩を叩くのは勿論の事カーリーナだけだ。

「何……」

「仮面取って情報取って来て……」

お互いこそそこそと小さな声で話した。

「情報……？何の……」

「今の状況とかに決まってるでしょ……早く行ってらっしゃい……」

そう言つてカーリーナは闇を使い俺の仮面を無理矢理、引っぺがすとせかす様に手を叩いてくる、仕方なく粘着性にした闇を手から消し、着地した。

ストンと軽めの音、以前の俺ならここまで綺麗に着地できなかっただろう、さすがに暗殺任務ばかりしてるところという事に嫌にでも慣れる。

それでも一定の雨音しか聞こえていなかった廊下には、俺の着地

音は良く響いた。

「何者だっ！」

二人が一気に振り返り杖を向けた、うん、正しい反応だ。

「いやあく久しぶり、ミラさんにヌンキ君」

二人は驚いた顔を見ると、お互いに顔を合わせ、またこちらに向いた、そして杖を下ろしてこちらに近づいてきた。

「モトム先生！？無事だったんですか、魔族に殺されたはずじゃあ……」

「え、えくと、生きてて今戻って来たばかりだから、とりあえず状況教えて？」

「実は……裏の者達が次々とカネス学院を襲っているのです」

うん、知ってる。

「へえ、それで大丈夫なのか？」

「はい、死傷者も出ましたが、今はほとんどを殺しました、生徒は寮棟に全員避難していますし、後は巡回して残った裏の者を見つけ殺すだけです」

「お前らは動いていいのか？」

「僕らは一応、生徒会です戦える実力はあります、しかし、モトム

先生が帰って良かった……裏の者が次々やって来て、色々壊しましたから、後々の修復も楽になるでしょう」

これは完全に作戦失敗な感じがする、騒動を起こしてる間に龍塔を壊すって作戦がパアだ、その残った裏の者だけでもう騒動が起こせるとも思えない、誰のせいかというと……カーリーナのせいだな。

「今回の裏の襲撃……おかしいですよ、モトム先生」

今度はミラが不安げな顔をして話した。

「裏の動向が読めないんです……尋問なんかもしたそうなんです、貴重品を盗むのが目的の人がいれば、生徒を殺すのが目的の人もあるし……さらには学院長室の資料を根こそぎ持って行くのが任務だって……おかしいんです……任務の内容が一人一人違うんです、それに一人一人、他の奴らは俺の補助だって言ってる……今まではこんな事なくて……私……不安で……」

「大丈夫だ」

ヌンキがミラの肩をガツシリ掴み、向かい合う形になっている、何をする気なのかと思っていると、突然のアレ、好きあってる男女がすること、つまりはキスである。

「俺が守るから」

軽い口づけの後にこのセリフ……そういう関係なのか！？

「うっうっ……」

どうやら違ったようだ、ミラが泣き出してしまった、やーい、いきなりそんな事するからだ」

「ご、ごめん！やっぱ嫌だったよな……」

「ち、違うの！わ、私、嬉しくて」

「ミラ……」

「ヌンキ……」

ヌンキはミラを強く抱きしめた、そして離れるとまたキスをしようとする。

「おーい、邪魔するようで悪いが後にしてくれ」

二人はハッと気がつき、顔を赤くしてこちらに向き直った。

そういう事をしたい年頃なのも分かるが、場をわきまえてほしい、こっちもそういう年頃なんだ、こっちまで恥ずかしくなる事するな！

という説教をしようとした刹那、目の前の二人は一瞬で死体に変わった、黒い物体つまりは闇が二人の頭を同時に突き刺している、二人なかよく頭で宙ぶらりんの状態だ、こんな事をするのは……

「青春に恨みでもあるのかカーリーナ」

カーリーナが闇を解いてスタンと降りてくる。

「そうね……あえて言うなら先生に振られた事はちょっと恨んでる

わね」

恨んでたのかよ。

「でも、中々優しい判断でしょ、それなりに情報が集まれば殺そうと思ってたのよ、あんな茶番をわざわざ終わるまで待つてあげたんだから」

「そうかい……とにかく、これは帰った方がよさそうだな」

「……何だよ？」

「何でって……もう騒動もクソも無いだろ、この状況、むしろ安定してきてるみたいじゃねえか」

「嫌よ、一人一人の目的が違っていたってのが気になるし……まだ裏の者の生き残りは居るみたいだしね」

「何でそんなに今日にこだわるんだ、残った裏の者を見つけようと教師が巡回してるんだぞ」

「半分意地みたいなものね……それでも、別の日にやるよりかはずっとマシなはずよ」

さあ行くわよと意気込むカリーナを余所にこの戦いは何にも得しないんだらうなと思う俺であった、はあ……帰りたい……

二十四

ともかくにも錬金術実践室に着き、薬品、チヨーク、紙、様々な物を拝借していく。

思えばただの火事場泥棒じゃねえか！なんて考えも、ここにいる理由、面倒臭さ、雨による蒸し暑さ、ヤケクソなどで全て吹き飛んだ。

窓から外を覗いてみる、いつまでも続きそうな雨はさらに強さを増し、地面を打ち付けていた、必要な情報が集まったら殺すなんて言つたカリーナは雨のことを忘れていたのか、それともやっぱり青春に何か恨みがあるのかは知れないが、雨については依然不明のままである。

「ねえ、先生いつまでここに居るつもり？」

「……………知らん」

カリーナはハアとため息をつく。

「先生、確かに帰りたいつて気持ちも分かるわ、あなたが得にならない事が嫌いだって事も知ってる、でもね、ここに居たって何にもならないわよ？それにほら、ここ閉めてあつたから蒸し暑いし……………」

「じゃあ帰る！」

「ダメ」

鬼だ。

「一人で帰るなんてずるいわ、ほら龍塔まで行くわよ」

俺の襟を引っ掴み、引きずり行こうとするカリーナ、しかし、そうはさせんぞ！

作戦はこうだ、まずは回転！カリーナの腕を掴み回転することでバランスを崩し、俺を掴む手をほどくのだ！

次に衝き！一番突くやすいのは胸だろうが、さすがにちよつと遠慮して喉元を突くことにしよう、これによりカリーナとの距離が少し開く！

次に目くらまし！まあ、簡単に言えば猫だましである、これでこの鬼を怯ませる！

そして、最後は逃げる！そりゃもう嫌になるほど逃げる。

完璧だ……完璧すぎる戦法だ……攻撃方法をあえて離すための突きと猫だましだけにして、後々にガミガミと文句を言われない（まあこれでも多少は言われるだろうが）ようにし、最後に自慢の足で超逃げるさすがは俺、じゃあ……さっそく実行だ！

「うおりゃー！」

まずは第一段階の回転！カリーナの腕をうおりゃという妙な気合いをこめて掴み、力任せに回転していく。

「な、何してんのよ先生！痛い！」

ハッハッハ、ざまあみる！カリーナの腕がほどけ、思ったよりもバランスを奪ったようだ、転けてしまったカリーナを尻目に俺は逃げようとした。

「ハッハッハ、あば……うおっ！」

しまったああああああ！普段掃除してない様な部屋、その上湿気っていて、靴も微妙に濡れている、こんな状況で、さっきの回転により少し目の回る俺、そりゃ滑る！そりゃもうヌルツと滑った。

前倒れになり、宙を舞った、このままだと体をぶつけて痛い、しかし、俺の並外れてるかもしれない反射神経でズバツと床に手を付いた、この間、ちょっと怖かったので目を瞑ってしまったことは秘密だ。

薄く目を開ける、力加減を間違えた俺の手はジンジンとしびれていて、今にも崩れそうだ、しかし、そんな事など気にならないほどの事が起こっていた。

目の前には、なんとカリーナ、床に寝そべるカリーナに俺が覆いかぶるような状態である。

「へえ……」

表情が読み取れないカリーナ（仮面してるから当たり前だ）に何とか言い訳しようとした瞬間、錬金術実践室の扉が開かれた、俺が転けた時に中々に大きい音がしたのだ、それで何かあると思いやってきたのだろう、やって来たのは一人の女性だった。

「な、な、な！」

仮面も着けて無く、服装なんかも普通なので、ここの教師と見ていいだろう、つまりこの人は、裏の者が居ないかどうか校舎を見回って、不審な音を聞きつけやって来たらこの状態でしたという事だ、さぞかし困ってるだろう、俺も困ってます。

「こ、こんにちは」

「こんな事してる敵……初めて見たわ……とにかく裏の者ですね？死んでもらいますよう」

杖を向けてくる女性に対して、こちらはやっと起き上がった状態だ、カリーナは杖を出し、俺はナイフを出す、一人で二人に挑むとは、よっぽど腕に自信があるのか、しかしこちらが有利だ、この距離なら俺の愛用武器の投げナイフは外れる事は無いし、校舎の中という事もあって大きな魔法は打てない、打ったら校舎が壊れる可能性があるからな……

サンダー・ボール
『雷球』

ほらやっぱり！

ストレンジ・スクエア・ボム
『奇妙で四角い爆発物』

カリーナ何やってんの！？

どう考えても相手の方が賢い選択だ、爆発系の魔法なんて使って床が壊れたり天井が落ちてきたりして悪くいけば死ぬかもしれんに……

女性も驚くが、すぐに冷静な顔になり防御の態勢に入った、この距離でこれを直に受けるのは良くないと思つての事だろう、それはこちらと同じである、でっかい雷の球が一直線にこちらに向かつて来てるのだ、ナイフでは勿論防げない、しかし逃げる所も無い、闇を使うか……

闇を使おうとすると、カリーナが先に使つてくれたようで、闇が雷を飲み込んでいた、闇は飲む込み終わると俺達を守るように包み込み、そして消えた。

次に見えた景色は半壊した錬金術実践室だった、錬金術実践室の半分を残して、あの女性は廊下と一緒に吹き飛んでしまったのだろうか、しかし、そんな考えもすぐに捨てる事になった這い上がるかのように、半分になった錬金術実践室の境目から上がつて来た女性は全くの無傷だったのだよチクショウ。

「よくも校舎をこんなにしてくれましたね、修復するのどれだけ大変だと思つて……」

「ゴチャゴチャうるさいわよ」

隣からドスの効いた声が聞こえる、カリーナだ。

「せっかく良い感じだったのに……空気読みなさいよ！そんなだから三十にもなつて結婚出来ないのよ」

「な、な、なんですって！敵に言われる筋合い無いわよ、そもそも私の何が分かるっていうの！」

「さあね、結界魔法学の先生って事と三十路オバサンって事くらいかしら」

三十代には見えなかったが三十路らしいこの女性はカーリーナの言葉に怒りまくり、髪の毛をグシャグシャと掻きむしった後、また杖を向けた。

魔法が放たれるかと構えた俺だったが、その前にカーリーナが動いた、何をする気だと思って見ていたが何と普通に殴るという荒技、何してんだ……

「弱いわね……こんな簡単に挑発に乗って、怒って動きが鈍って、体術が得意じゃない私にさえ殴られる」

反撃しようとする女性の杖を奪い、床に押さえつけるカーリーナ。

「三十路のコンプレックスは、みんな引いてたわよ、冗談でからかった生徒を停学にしちゃうんだもの、直したほうがいいわ」

「な、何でそんな事を!？」

「ま、今から死ぬ人には関係無い話ね……」

グチャリと女性の頭が闇で赤い肉片と化した、それをカーリーナは面白くないという目で見る。

「弱すぎるわ……いや、私が強いのかしら……ここで学んだ事が全て無駄に思えるくらいに」

「とにかく、離れるぞ、絶対人来るから!時間がまた無駄になるか

「！」

「そうね、気が進まないけど雨の中を行きましようか……」

闇を傘のようにしてぬかるんだ地面を歩いていく、目指す先は勿論に龍塔、もう目の前に見えている。

「こんな雨で魔法打てるのか？」

「そういえばそうね、盲点だったわ」

ええええええええええ！！！！

「ここまで来て!？」

「だつて忘れてたんだもの、まあ、いいじゃない、どちらにしる成
功する見込みは少ないんだから」

フフフと笑うカリーナを余所に俺は呆れかえっていた、そして後悔、やっぱり意地でも家で寝ていれば良かったと。

「ハア……帰った……うおえいつつ!!」

冷た！？ていうか痛い！雨のせいで冷たい上に痛いというダブル嫌な事！持っていた闇という名の傘は消えてしまっていた、どうなってるの！？

「先生……」

「なんだよチクシヨウ！服がチクシヨウ！」

「闇が使えないわ……」

分かってるわい！

「おや、どこから表れたんです？」
瞬間移動^{テレポーション}は出来ないようにしてあるはずですが……」

龍塔の方から声がする、しかしもちろん龍塔が喋っている訳では無い、冴えない頭、冴えない顔、地味な雰囲気、レーゲンさんだった。

いつものキチンとした格好だがビッチョビチヨである、もう一度言うどビッチョビチヨの冴えないおっさんである、頭にいたってはカッパ以外の何者でもない。

「まあいいでしょう、ここまで来たという事は目的は龍塔ですか？」

「そうよ、どいてくれるかしら」

「ダメに決まってます、これを守るのも私の仕事で、そして国の義務なんです、退いたりでもしたら、犯罪者、貴方たちと同類になつてしまう、まあ、私も貴方たちの事を悪く言えるほど、出来た人間じゃないんですけどね」

レーゲンさんは少し俯き、微笑を浮かべた。

「良いこともやってきましたが、悪いこともやってきました、そして、その上に今の私が居るのです、カネス学院の学院長としてね……」

…」

レーゲンさんの右手に、雨が集まって行く、それは水となり、そして、刃となった……水の刃である、それを一降りすると、こちらを睨むように見据えた。

「雨は私の制空圏、雨世あまよのレーゲン、参ります……」

動きは無い、お互いのにらみ合いが続いている中でレーゲンさんの雨だけが研ぎ澄ますかの様に空気を冷やしていた。こちらは闇が何故か使えないので、いやっほう！闇さえあれば敵無しだぜい！の状態が消え何をされるか分からないこの状況下ではうかつに近づく事も出来ない。

レーゲンさんの右手の水の刃はどういう原理なのだろうか、いや、まあ魔法なんかある時点で原理もクソも無いんだろうけども、しかし、武器だという事には変わりないだろう、ああいう形状のものを出してきたという事は接近戦をしようとしてる、やっぱりうかつに近づけないじゃないか！

やがてしびれを切らしたのかカーリーナが動いた、しかし、魔法は使わず、それどころか攻撃もせずに俺に目配せで行けの合図、人使い荒いなおい。

仕方なしに俺はとりあえず愛用のナイフを取り出すと、大きく振りかぶる、もうこの時点で、あ、こいつナイフ投げるんだろうなとバレバレなんだけれども、それを越すほど早く投げればいい話だ。

「おらっ！」

ナイフは綺麗に、そして真っ直ぐに飛んでいく、狙いはレーゲンさんの頭部だ、当たれば即死だろう、そして思った、これは当たるだろうなと、動きを一ミリも見せないレーゲンを見ながら。

しかし、予想は見事に外れ、同じくナイフも外れた、いや、外れ

たという表現は正しくない正確には止められた、素手で、それも頭ギリギリの所で。

まさか、止められるとは思っても見なかったのでビックリ、とりあえずナイフにくつついている紐をグルグルして戻しておくか……

「おや、何ですか、この紐は切っておきましょう……」

そうして……紐は……切られた……無情なる水の刃によって……

ヒモオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ。

俺とナイフをつなぐ唯一の繋がり紐、思えばナイフを使い始めた時からお前は居てくれたよな……あの時のことを覚えてるか？ほら、初めて会った時の事だよ、丈夫な紐は無いものかと一生懸命ゴミ置き場なんかを漁ってた俺に、お前は顔を出してくれたよな、あの時は本当に嬉しかったぜ……

ナイフを投げるしか能の無い俺を、ナイフが勿体ないって理由でお前を使ってきた俺をお前は許してくれるかなあ……使ったびにグルグル巻いて、汚い地面を引きずって……俺のナイフを持って来てくれたよなあ……

まあ何が言いたいのかという大事なナイフの紐が切れてマジパネエって話です。

「ナイフウウウウウウウウ！！」

勿論走る、ナイフを取り戻すためだ、近づくのは危険だがあれを諦めるなんてとんでもない、五万ギルもしたのだ、神が許しても俺

が許さん。水の刃に注意しながらもレーゲンさんが左手に持つ、俺のナイフちゃん目掛けて飛びついた。

だがその直後、顔前からすごい勢いで水の刃がこちらへと向かって来る、何となく予想はしていた、ナイフって叫びながら飛びついてくる黒ずくめの敵を切らない理由は無いっすよね、はい。

予想が出来ていたおかげなのか、どうかはさておき何とか水の刃を避けた俺はレーゲンさんに攻撃を食らわせようと普通のパンチをする、いとも簡単に避けられる、またナイフを取り戻そうとする、避けられる、もう！

「不思議な人ですね、力はあるのに技術が無い、ナイフ使いがナイフ一本だけというのもおかしいですし、何か体術を習っていた感じも見られない、だが……こちらには好都合です、そんな攻撃、簡単に避けれますからね」

レーゲンさんは水の刃を大きく横に振る、それを伏せる体勢で回避した。

「避けるのは上手いようですね」

「お互いさまにな」

その後も攻撃しては避けられ、攻撃されては避けの繰り返し、正直ラチが開かない、そもそもカリーナは何をしてるんだ！

カリーナの方をチラリと見ると見事なまでに何にもしてないカリーナが目飛び込んで来た、いや、何もしてないどころか、ちよつとずつ離れて行ってる？自分一人だけ逃げようって魂胆か！させん

！そうはさせんぞ！？

「うーわ！逃げてる！うーわ！逃げてるよ！」

指を指して叫ぶ、逃げようとしていたカリーナからしたら、もう、さぞかしうざかったろう、ざまあみやがれ。カリーナが止まる事を期待して言ったのだが、反応したのはレーゲンさんで、そして何故かレーゲンさんが走り出した。

「この人は時間がかかりそうなんでね、あなたから殺しましょう」

……あれ？チャンスじゃねえかこれ？だって背中向けてるし、この距離なら走ったら余裕で間に合う、もう、完全に隙だらけの背中にもらったと、一撃必殺の思いを込めてやった事も無い跳び蹴りをしようと、俺も走り出した。

先に走り出したレーゲンさんに、もう追いつくと勢いを込めて飛んだ、片方の足をピンツと伸ばし、もう片方の足を少し曲げるような体勢で、気分はさながら仮面を被ったバイク乗りである。

「ぬおっ！？」

しかし、当たる寸前にレーゲンさんは前を見たまま手を後ろへやると、俺の足を掴み、カリーナの方にそのまま振り投げた。

空中で身動きが取れず、しかも、上か下かも分からない程に方向感覚が麻痺し、そのまま落ちれば痛い事間違いない、カリーナ受け取ってくれい！

「ぐぼう！」

しかし、間一髪で避けられた、避けるなよ！

「受けるよ！あゝ服がグツチヨグチヨ……そもそも何でそんな傍観してんだよ！」

「それは……」

「火系統……だからでしょう？」

レーゲンさんがこちらへ一歩一歩近づいてくる。

「おそらく、あなたは火系統の魔法しか使えない、この雨の中で火系の魔法は使えませんよねえ……」

「さあ、どうかしらね」

「強がらなくてもいいですよ、私には分かります、魔法使いと戦う上での常識の一つです、相手の魔法の系統を理解するのはね」

レーゲンさんはカーリーナに向かって水の刃を振り上げた。

「終わりです」

それを勝機と見てまた後ろから跳び蹴りを入れるが、避けられてしまう、あるうことがカーリーナにまで避けられ本日二度目の地面へのスローインを果たした。

「言ったでしょう、この雨の中は私の制空圏だと、雨に当たっている限りどこに居るのか丸わかりです」

「あら、わざわざ弱点を教えてくれてありがとう」

「冥土のみやげってやつですよ……」

おーい、俺は無視か、グッチョグチョの服着た惨めな俺は無視か。

「それに弱点といえる程の事でも……ん？」

レーゲンさんが空を見上げた、何かと思い同じく空を見上げる、さっきまでと同じように厚く黒い雨雲が佇み、その存在感を強調していた、しかし、よく見ると雨に紛れて一つ何かが落ちてきている、あれはパツと見は……

「……人？」

人だった、その人は段々段々落ちて来て、最後はグシャツという音を立てて着地した、その人はボロボロの服を着て、手には杖を持っているが奇妙な格好をしていた、頭部、顔、胸、手などの上半身は鉄のような物でカバーされ銀色づくめである、ボロボロの服が見えるのは足だけだ、そして、このぬかるんだ地面に激突したせいでグチョグチョだった！

「おお！可哀相に、お前も俺と同じグチョグチョの仲間だ！やつほい！」

俺が仲間が出来た事へのうれしさではしゃいでいると、カリーナに腕を捕まれた。

「やつほい、じゃない！逃げるわよ！」
『テレポーテーション瞬間移動』」

だが、何も起きなかった、本当に何も起きなかった、魔法を失敗した時の、あれ？俺何でこんな恥ずかしい事叫んだんだろう感は良く知ってるので同情するぜ力リーナ。

しかし、何でいきなり逃げるなんて……と思いレーゲンさんの方を見てみると水の刃が消えていく、雨もまばらになっていき、雨雲も薄くなつていった、血相を変えたレーゲンさんは杖を取り出すと前に掲げた。

『超響く声』 スーパー・リザウンド・ボイス

これは確か声を大きくするっていうか拡声器みたいなやつだったはずだ。

「生徒、教師、また関係者に連絡しますっっっ！！！！」

つるせええええええええええええええええ。

「今すぐ学院を離れなさい、寮に居る人も同じです、今すぐ離れなさいっっっ！！！！！」

その間に、早く逃げるわよとまた血相を変えた力リーナに腕を引っ張られ龍塔から離れていく、あまりにも走るものだから、転けそうになる。何をそんな必死に……

後ろの方に居るレーゲンさんもまだ何か避難を呼びかけてるし、というよりまだ声が届くうるさい。そして走っているとふと手に違和感を覚えた、傘を握っている、真っ黒な傘を。

それにカリーナも気がついたようで一端それを消すとまた闇を出した、闇は俺とカリーナを包み込んだ、音も無く、色も無い。

「どうしたんだよ、何がしたいんだ？」

「どうしたじゃないわよ、さっきの見たでしょ、見えなかったなら闇を使って見てきなさいよ！」

何なんだと俺は闇を移動させ視覚を闇に移動させ、さっきの方へ寄せた、しかしある地点からサツと闇は消えてしまう、これは、確か暗見森で刀神を襲った時にもあった現象だ、これじゃあ見れない、と思いきやギリギリ見えた、落ちてきた時と同じ体勢で寝ている、死んでるんじゃないのかあれ？

死んでるかどうかを調べるために聴覚を闇に移動させる、これで息があれば生きてるだろう、耳を澄まして聞いてみるとうつすらと呼吸音が聞こえなくもない、というかレーゲンさんが未だに話して本当にうるさい。

しかし、次の瞬間、確かに何故か振ってきた人が起き上がった、今まで気絶してたのかな、そして、杖を掲げると、こう唱えた。

『ライフ・インパクト
生命の衝撃』

視界は真っ白になる、聴覚は機能してないように、またはノイズを押さえるかのようにキーンとただ鳴り響くだけだった、耐えられず闇を引っ込める、戻ると視覚も聴覚も正常だが地面の揺れが激しい。

「何、何、何、何、何！？」

「『生命^{ライフ}の魔法』ね……自分の命を引き替えに最上級を遥かにしのぐ魔法、魔法使いと戦う上での常識の一つよ、何としても『生命^{ライフ}の魔法』は食い止めろってね、あれは魔法が使える奴隷を利用した爆弾みたいなものよ……先生って常識無いのね」

常識無いなんて言われている間に揺れは止まった、もう出て大丈夫だと判断したのかカリーナは闇を引っ込める。

何にも無い、校舎も木も草も石も人も、あるのは枯れた地面と高くそびえる龍塔だけだった。

二十六

パンをかじる、あまりおいしくない、そもそも私は貴族でお嬢様なのだ、昔から食べ慣れた物なんてのは町に溢れてるものではない。一応、料理は出来るので、それなりに味のあるものを作って食べられるのだが、すべて自費だ、その上先生の分も作ってあげている、それもこれも先生がケチだからだろう。

一度、先生の分を作らなかつたら、どうなるのかしらと思い、自分の朝食まで抜きにしてコッソリ見守った事がある、なんと驚いた事にパンを食べて水を飲んで終わり、勿論そんな食事では満足してないだろうと聞いてみたら、意外と腹に溜まるものだと言っていた、ならばもう作ってあげなくていいかと言うと必死に止めていたのは実に先生らしかった。

パンをまた一口かじる、そして水を飲む、やはり物足りない、しかし、愉快に料理など作れる気分では無い、昨日の事で夜桜兎に根を持っていくのだ、不可解な事が多すぎた、無理難題な任務、目的が違つたらしい仲間、そして最後の奴隷爆弾、実に不可解で不愉快だ、殺そうとしていたとは思えない。

だから私はパンと水を腹に収め、身支度を調べ、最後に仮面を付けると、杖を持った。

『テレビジョン
瞬間移動』

最近よく使うようになったこの魔法にも慣れ、最近では一日に三、四回出来るようにまでなった、やはり魔法は経験なんかかものを言う、先生は全然使えないのかそれとも全然使わないのか分からない

が、使つて無いのにはかわりない、『持ち上げの魔法』は使えるなんて言っていたが、使っているのを見たことが無い、ほとんどナイフだ、そのナイフも昨日の事で消し飛んでしまつて、それがシヨツクなのかナイフナイフと呟きながら布団から出てこなかった。

何をそこまでナイフにこだわるのかは分かりかねないが先生の事だ、どうせセコい理由だろう、あんなにお金持つてゐるのに何でセコいのかしら。

夜桜兎に着く、朝早くでも人はまばらに居て一瞬こちらを見ると次には興味も無さそうに自分の事に取り組み始めた。何も言わず堂々とボスの部屋を目指す、普通は受付で許可なんかをもらわないといけないが、従う気にはなれなかった。

堂々していると、何かあるのだらうと思つて意外にも止められないものだ、木材で出来た廊下も何だか目が痛い、扉まで茶色なんだから相当茶色が好きなのだろう。

少し無礼すぎるかとも思つたけど、気にしない方向で、ノックもせずに扉を開けた、また茶色めな部屋の机に向かうボス、ホロロがこちらを見ていた。

「驚いたのう……本当に生きていたとは」

「あら、じゃあ話は早いわよね」

部屋に入ると一步一步近づいて行く、そして机を強めにダンツと叩いた。

「あんな事して、ただですむと思つてゐるの？」

「勿論、思つてやせんよ、危険もあつた、しかし、それなりのメリツトもあつたのじゃ」

「メリツト？」

龍塔も壊せなかったのにと、私はいぶかしく思った。

「メリツトって何よ」

「これ話すのは、お前達には今回の事を他言無用してほしいんからなんじゃ……つてもう一人の方はどうしたのじゃ？」

「ああ……気にしないでいいわよ、続けて、誰にも言わないから」

「フム、実は今回の事は裏の者総出でやっかい払いをしようということになったのじゃ、ほれ、言つたじやろう、勇者対策同盟の最初の議会でな」

「ちよつと待ちなさい、私と先生のどこがやっかいなのよ」

「十分やつかいじやろうが！」

ボスは机を叩き立ち上がると煮を切らしたように怒鳴った。

「いいか！暗殺任務なんてものはな、相手の情報を集め、作戦を練りに練つて準備を万端にしておいて、それでやつと実行するもんなんじゃ！最低でも一年はかかるものじゃ！それがお前達ときたら一日に十個もこなしおつて！これじゃあ商売にならん！暗闇鴉のような細々した安価な所ならやれたかもしれんが、ここは夜桜兎じゃ！」

それだけ言うつとやつぱり老体では疲れるのか、椅子に座り、一つ深呼吸すると、こちらを見直した。

「勇者対策同盟で、やつかい払いをしようとなった時、やはり問題はどつやつとするかじやつた、そこにある男から依頼が来たのじやカネス学院を消し去れと、あとは厄介者をカネス学院に集め、全て消し去るだけじやつた」

「ふゝん、ずいぶんと変な作戦ね、私達の準備がずっと整わない場合はどうしてたの？」

「それでも、そう言うしか無かつたのじや、元々カネス学院に居たお前達には、どんな理由付けをしても中々に頼みにくい任務じやつた、苦肉の策じやつた、ま、最後は金で動いてくれたけどの、金好きの話は裏にまで届いておるんじや」

……つてことは。

「私の事も分かつてるわけね」

「ああ、爆撃のカリーナ、いや、今は先生と生徒じやつたな、お前の名付けセンスには笑わせてもらつたわい」

「あら、バカにしてるの？」

「いやいや、『生命の魔法』^{ライフ}を切り抜けた者を相手に喧嘩売つたりはせんよ、負ける気は無いが、少なくとも老体にはキツイ」

そう言うつとボスは用意していたのか、こちらからは見えない机の

裏から袋を取り出した、この袋は確か魔法の袋……

「三千万入っておる、口止め料と辞任料と……ある男からの依頼の前払いじゃ」

三千万……帰りに先生のナイフでも買っただけようかしら。

「口止め料も分かるし、辞任料は……まあ、やめなきゃならないわよね、こっちもそのつもりだったしね、でも、ある男の依頼つてのが分からないわ、さっきも出てきたわね、カネス学院を消してくれなんて言う人、相当常識が無いのかしら、いや、でも実行されたわけだし、相当裏に利益を与えるか、お金があるかね」

「どちらもじゃよ、カネス学院抹消の任務は達成された、これにもらった報酬は大きすぎるほどじゃ、しかし、金はもらってはおらんカネス学院抹消なんていくら金を積まれてもやろうとは思わんよ、暗闇鴉にたった二千万ギルで同じような依頼をしたバカもいたらしいが、勿論断つたらしい」

カネス学院、嫌われてるわね……

「それで、そのある男って誰なの？」

「お前さんも、絶対知ってる人物じゃよ……」

ああ、鬱だ、鬱すぎてやばい、ナイフが鬱で鬱がナイフで、ああ鬱だ……

「ああああああナイフウウウ五万んんん!!」

「はい、ナイフ」うおおお!!?

ビックリした!いきなり現れるんな!あれ?

「『テレポーテーション瞬間移動』で帰って来たって事は、どこか行ってたのか?」

「そうよ、ほら、要らないのナイフ」

カリーナがやたらとプランプランさせるその物体、ナイフだ、新品だ!

「くれるのか!?!いくらで買った!?!誰の金で買った!?!」

「あげるわよ、私のお金で五十万で買ったの」

五十万!?

「ありがとうおおおおおおおおおおお」

「どういたしまして、あ、あと先生」

「フッヘッへっナイフ!得した!」

「夜桜兎やめてきたから」

いやゝやっぱ新品はいいなゝ前は十分ガタが来て……え？

「やめたの？」

「うん」

「何でえええええ！無職じゃん！ニートじゃん！」

カリーナは何か余裕の表情だ。

「ニートってのが何か分からないけど、大丈夫よ、新しい雇い主は見つけてあるわ、それもとびつきりのね、きつとお金たくさんくれるわよ、ほら、これ前払いだって」

カリーナは懐から魔法の袋を取り出し、札束を出して行く、束になったものが十は出てくる。

「一千万あるわ」

「そいつは信用出来るな」

金さえあれば信用出来るなんて虫のいい話だと自分でも思っが気にしないでおこう。

「さっそく雇い主の所に行きましょうか」

おっつ！

カネス王国の城下町にある、というか城下町にさせてる原因であるもの、それは城である、迷うことなき城である、コロナでも見たが城っていうのはやっぱりでかい、国の象徴なだけあって立派なものである、はてさて、どうして俺とカリーナはこんな所に居るのと言われるとカリーナに連れてこられたに過ぎない。

まあ、たぶん依頼主っていうか雇い主は城の中に居るんだろう、城の門に居た門番はピリピリとした雰囲気を漂わせていた。

「入りたいんだけど、いいかしら？」

「ダメだ、昨日カネス学院がコロナによって消されたの知ってるだろ、今は城に入れるのは一部の者だけだ」

「うーん、困ったわね、何にも聞いてないの？」

門番は相変わらずムスツとした顔でこちらを見る。

「聞いて無いな」

「いいや、聞いているはずだ」おおっ！！？

いきなり横に現れたオッサンにビックリする俺、門番もビックリ

したように固まっている、そうだよないきなり現れたらビックリするよな。

「お、王様!？」

……へ？王様？このオッサンが!？

「客が来るかもしれんと言っておいたはずなんだが、伝わってなかったのか……」

「も、申し訳ありません……それより、こんな所で何をしてるです！危険です、早く戻ってください」

王様らしいオッサンは一つため息を吐くと、こちらに手を伸ばして来た。

「掴まれ」

少しためらうが、少し筋肉質なその手を掴んだ。

『テレポーテーション
瞬間移動』

一瞬で移動する、周りは目の前には王座があり、広い空間だ、王様は王座に遠慮無く座ると、どこから取り出したのか王冠をかぶった、なんかやつと王様らしい、その間に力リーナは膝を片方つき、顔を伏せた状態にいる、ポーと見てると睨まれたので、同じようにやる、しかし、結構キツイなこの体勢。

「顔を上げよ」

この体勢の場合、顔を上げるほうがキツイんだよ、何上げてもいい許可出してあげるみたいな言い方してんだよ、いらねえんだよ！

「さて、今回の依頼の事だが……」

へ？この人が依頼人？って事は一千万くれた人？すばらしい。

「俺様が裏に頼んでカネス学院を消してもらった事は知ってるな」

知りません、何それ。そしてその歳で俺様って……

「これをコロナがやった事にして戦争を勃発させようという魂胆だ、そしてそれは成功した」

「あの……」

カーリーナがハッキリと声を出した。

「一ついいでしょうか王様」

「何だ？」

「はい、どうして戦争を起こそうと？そのままなら何も起きずにすんだ事では？」

「ウム、これは任務に直接関わって来るのだが、俺様の息子がわがままでな、戦争をやって英雄になりたいなんて言い出したもんだ、ハッハッハ！」

いや、ハッハッハって！？

「それで、お前達に依頼した、アイツを助けてやってくれ、戦争をするとなると、こっちは人手不足でアイツに回してやるほど人材は居ない、アイツを英雄にしたてあげるのだ！期待しているぞ、何しろ『生命の魔法』^{ライフ}を切り抜けたのだろう、成功したあかつきには勲章も褒美もやろう」

褒美！？いや勲章はどうでもいい、褒美！？王様の褒美ともなれば……ゴクリ……

「そついえばお前達の名前を聞いてなかったな名は何という？」

「金城求です」

「カリーナ・デルフィヌスです」

「デルフィヌス？ということは行方不明になってるデルフィヌス家の子か、まさか裏におったとはな、お前の親父が探し回つとるらしいぞ、ということはそのまま名前を名乗らせるのも、ちとダメか俺様が新しい名前を授けてやろう」

「恐縮ですが、王様、私は名前を変えたくありません、この名前は亡くなった母の形見でございます」

「そうか……そこまで言うならまあよい、それではモトム、そしてカリーナ・デルフィヌスよ」

なんで俺だけフルネームで呼ばれないんだろう、あれかな一種の嫌がらせかな？

「あ、あの……王様」

「何だ、まだ何かあるのか」

「何で俺には金城って呼ばないんですか？」

横に居たカーリーナがお前は何を言ってるんだとばかりにこちらを見た、王様はヘンテコな顔してるし……そんなおかしい事言っただけかな？

「カネシロ？カネシロとは何だ？」

「俺の名前です」

「名前？フム、偽名を使わなきゃならん理由でもあるのか？」

「ぎ、偽名？」

「まあよい、ではモトム改めカネシロとカーリーナ・デルフィヌスよ、今すぐ我が息子、チャプチヨム王子の所へ向かえ」

名前酷いな、チャプチヨムで……いやそれよりも、なんで偽名だと思ったし。

王様から離れメイドさんに案内されながら王子が居るといふ王子の部屋まで向かっている。

「先生、なんで偽名なんて使うのよ」

「偽名じゃない、本名だ金城求でちゃんとカネシロが入っているだ

ろっ！」

「モトムのどこにカネシロが入ってるのよ……」

今気づいた、この世界じゃ俺の名字消えてる！どつりでフルネームで名乗っても名前で呼ばれるわけだ来てから結構だけどなあこの世界。

窓を開け外を眺める、冷たい風がボクチンの部屋を通り抜けた、今日か明日、そのあたりにボクチンの英雄伝説を手伝う下部が来るはずだ、お父様と違って、ちょっとだけ太ってるっただけで国民につくづくバカにされてきた、それを今回、お父様が始めてくれる戦争で、見返してやる！

後ろからトントんと音が聞こえる。

「何だ、ボクチンに何かようか？」

「王様から依頼された者です」

おお！思ったよりも早い、しかし、嬉しい誤算だ、昨日の今日に来るとは、神がボクチンに英雄になれと言ってるに違いない、おお

つと、どこぞの宗教国家のような事を思ってしまった。

「入ってよいぞ！」

ドアが開かれる、入って来たのは二人、男と女だ、どちらも暗めな服を着て、こちらを見ている、どちらも笑顔だ、女の方は作り物の笑顔、男の方は欲望を隠しきれない笑顔、どちらもよく見る笑顔だ、しかし、一般人とは一つ違う所があった、お父様の言うとうりの人材だ、二人の目は笑顔では隠しきれない、プロの殺しの目だった。

二十七

神が初代勇者を召還し、地上に平和が訪れたころ、人々は今まで魔族に占領されていた住みやすい土地に住み始めます、住みやすい所には段々と人が集まり、賑わい、文化を築き上げ、豊かな生活をしていました。

しかし、問題がありました、それは人間の醜い欲です。

この豊かな土地を我が者にしようと、たくさんの人が名乗りを上げました、こうして、土地を巡って多くの人が多くの場所で戦いを始めました。

神は嘆きました、人間の敵は魔族だというのに、何故、人間同士で争うのだと、魔王を倒した初代勇者でさえ、この戦いには勝てませんでした、そして負けることも、勇者は人間を愛していたからです。

人間に嘆く神に勇者は言いました、人は確かに醜い、しかし、美しくもあるのです、神様、人間はバラバラでは生きていけません、まとめる者は必ず必要になってくるのです、それを決める戦いが今起きているのです、私は争いが嫌いです、お願いします神様、あなたが土地の管理者を作ってください、と。

神は後悔しました、自分の信じていた人間がこんなにも醜かった事を、そして勇者の頼みを最後の頼みとして聞き入れました、そうして生まれたのがドラゴンです、ドラゴンは龍塔を境に東西南北に分かれ土地を見守りました。

しかし、人間は争いは一端は無くなりましたが、大きな大きなドラゴンはまだ生きる存在、使命感なんて持ち合わせていません、人間を見るのに飽きてしまえます。それに申し出たのが勇者でした。

勇者は龍塔にドラゴンを集め言いました、神がもう居ないこの世界で、貴方たちドラゴンに頼るには色々と限界がある、私に管理者としての能力をください、と。

ドラゴンは快く承知しました、これで自由になれる、もう人間なんか見なくていい、と、ドラゴンとの別れ際に勇者はこう言葉を残しました、私の跡継ぎが現れる時が来るかもしれない、その時はこの力を与えてやってくれと、ドラゴンに不思議な力を残したそうです。

人々がまた争いを始め、それはどんどん激化していききました、勇者は旅をします、管理者の能力を人に渡すためです、『テレポーション瞬間移動』も無い時代、この広い世界をただ一人で。

勇者は様々な人に出会いました、そして勇者が認めた者だけに管理者の能力を与えます、その能力を与えられた者こそが今の貴族です。

その中の一人にヴィナティキが居ます、そう、元は人の名前だったのです。

勇者が亡くなった後、また争いが起きました、管理者達の争いで、自分の土地を広げようと管理者達は争い続けます、しかし、神が残した能力は強かったのです、管理者は勝っても土地を完全に手に入れる事が出来ませんでした、ですから勝った管理者は負けた管理者を配下に置く形でやっていきました。

こうして、強い管理者と弱い管理者の関係が生まれ、最後に五人の管理者が他の全ての管理者を配下に置きました、五人の管理者の名は。

コロナ・ボレアリス。

ウルサ・ミノル。

デネブ・シグニ。

リギル・ケント。

そしてカネス・ヴィナティキです。

五人の管理者はあまりにも大きくなりすぎ、互いが互いに恐れ始めます、そして皆で仲良くしようと、管理者同士で初めての同盟を組みました、そうして五つの大きな土地は国としてそれぞれの管理者の名前にちなんで付けられたのです。

「つというのが、国が出来た理由と、貴族が出来た理由です、はい王子、あなたのフルネームは！」

「えつと……チャプチョム・カネス・ヴィナティキ」

「はい、正解」

まったく、手間がかかるなこの王子は、自分の国の歴史なんかこれっぽちも知らないって王子としてどうなんだよ、でもチャプチョムなんて名前付けられてる時点でだらしのない百貫デブになるのは必然だったのかもしれない、可哀相に、でも勉強までダメとは。

「ちゃんと理解出来たでしょうね？」

「ウム、カネシロの教え方は中々良かったぞ」

短かったが教師をした時のスキルがここで役に立つとは思わなかった、今は亡き（かもしれない、確証は無い）レーゲンさんに教えてもらった、教科書をそれっぽく読む事であたかも自分はこの分野わかってますよ的に教えられる技術が、本当に役にたった、だって今の今まで知らなかったよ、こんな事実。

「次はカーリーナよ、お前が教えてくれ」

王子は新しい下部が楽しいらしい、ニコニコ顔だ。

「はい、私に分かる事なら」

「そうだな……実はボクチン、一度も女にモテた事が無いのだ、カーリーナよ、女のお前から見てボクチンのどこが悪いか、ハッキリ言ってくれ」

まず、ボクチンってのをやめるボクチン野郎、と言いそうになるが俺に聞かれてるわけでも無いし、やめておこう、相手は王子なんだからカーリーナも返答に困ってるみたいだ。

「そうですね……まず、お痩せになったら……」

「カァー！もういい、皆が皆、ボクチンに痩せる痩せると言いよる、ボクチンは太って無い！！」

百貫デブである、もう一度言おう、百貫デブである、たまりにたまった脂肪は王子の腹にとどまらず首や足や手や背中まで肉が付いているのだ、それでも太って無いという百貫デブは顔を赤くして荒げていた、腕の脂肪を揺らしながら。

「それでも訓練はしましょう、今は準備中ですが、もうじき戦争が始まるんですよ、少しは鍛えとかないと……」

「クウー！ボクチンは運動が大嫌いなのだ、絶対に嫌だ！カネシロよっ！お前も何か言ってやれ」

二十歳過ぎて何言っただと思ったが、正直に言っていると怒りそうなので、ここは自分の欲を出しておこう。

「そうですね、運動は二ガテなら、しなくてもいいんじゃないでしょうか、それよりも休憩しませんか、疲れたでしょう？」

「確かに疲れた……休憩するぞ！」

よっしゃ、ナイス俺！色々喋って疲れたからな！

王子も怒って疲れたらしく椅子に腰掛けたまま上を向き汗をかいている、この部屋、結構、風通しが良いのに、どうやったらそんな汗かくんだと王子を見るとカリーナが寄ってきてヒソヒソと耳打ちしてきた。

「余計な事、言わないでよ先生、これで運動しなくなっちゃったらどうするのよ」

「なあに、痩せた所で何にも変わらないだろう、ほっておこう」

「もう……」

「お前達、何を話しておるのだ？」

いつのまにか王子がこちらを見ていた。

「ただの世間話ですよ、気にしないでください」

「うーん、何だかはぐらかされた気がするが……まあよい、それよりもな、なんとボクチンすごい事を思いついたのだ！」

「すごい事？」

カリーナが期待もしないような声で聞き返した。

「すごい事って何ですか？」

「ウム、運動をしないで運動をする方法だ！運動してると思っから嫌になるのだ、なら運動をしないで思いながら運動をすれば良い、それには歩くのが一番だ！町に出ようぞ！」

それにカリーナはあきれた声で言った。

「つまりは城下町に出たいって事ですね、ダメですよ、コロナの回し者がどこに居るかも分かりませんし、危険です、絶対ダメです、

今はまだ騎士なんか国民一人一人に出身地に帰れと言い回っている所ですよ、戦争で一番忙しいのはこの時期だって分かってるでしょう？、ワガママ言わないでください」

そうカリーナの言うとうり戦争で一番大変なのは戦争を始める前だったりする、いきなりバコーンとやるのでは無く、どこか他の国なんかに関に入ってもらい、一般人の避難を手伝ってもらったりするのである。

カネスの場合は城につとめる騎士や魔法使いが他の国に比べて至極に少ない代わりに、国民に強い人が多いので、戦争時だけ雇うという方法をとっている、だから今、騎士は力のある者を集め、力の無い者を逃がし、カネスに来ていたコロナの国民に帰るようにし、そういう風に頑張ってたらか偶々見つけた犯罪者なんかを牢屋へしょっ引き、もう大変、これは王子から聞いたんだが裏の者なんかは王様のおかげで、騎士に見つからないようにしたそうだが、王様……一番大きな犯罪者逃がしてどうすんの……

「お父様はボクチンを子供扱いしすぎだ！一人でも外にくらい出れるのだ！」

「そういう問題じゃありません、今は危険ですからダメと言っているんです」

「危険じゃなくても外に出れんだ！出られたとしても馬車で町を一周するだけだぞ！意地でも外に出てやる！」

よっこらせと椅子から立ち上がる王子はとてもじゃないが早いとは言えない、太った体で部屋の出入り口に向かうが勿論の如くカリーナに先を越され塞がれていた。

「どけカリーナ、これはこの国の王子であるボクチン、チャプチョム・カネス・ヴィナティキからの命令だ！」

「ダメです」

命令拒否の時間、約二秒という短さ、王子可哀相に思えてきた……手伝わないけど。

「クウー！！早く退かないか！そうだ、城下町に出たら好きな物を買ってやるぞ！」なんだとっ！？

「要りません、これは王子のためを思つて……先生？」

「王子のためを思ふなら……行くべきだ！王子が危険なら俺達が守ればいい！」

そう言つと俺はカリーナをどかし、部屋の出入り口になっているドアを開け放った。

「力、カネシロよっ！」

「さあ、行きましょう王子！」

うれしさで歩くどころか走る脂肪を目にカリーナのため息を無視しつつ、俺はいったいどんな物を買ってもらおうかと、自然と顔がほころぶのを感じていた。

二十八

「何故ボクチンはモテないのだ？」

まだ言ってるよ、この王子は。

門番なんかの目を何とか欺き、城下町に出たはいいが王子の格好が、そのまま王子丸出しだったので、とりあえず服屋で適当に買って、王子に着せたのは、つい二十分前である。

王子の今の格好は、異世界人な上に服なんて微塵の興味も無い俺が、カネシロよ平民の服を買って来ておくれ、という王子の投げやり発言により、本当に適当に選んだからひどい。

とりあえず顔が少しでも隠れるようにとウルサ王国のブカブカでフカフカの青い帽子、あの体じゃあピッタリした物より多少余裕のある服の方がいいだろうと大きめの茶色い上着、下は腹まわりの事を考えてよく伸びる黄色い短パンを買った。

するとどうでしょう、上は暖かく下は短パン小僧の二十歳越え少年が完成したではありませんか、生足からのスネ毛が気持ち悪い事この上無い。

買い終わって、路地裏に隠れてた王子に渡した時、もしかしたら怒るかも思ったが王子も服にはあまり興味が無いらしい、普通に着替えてたが、さすがにこれはどうかと思う、俺が買って来たんだが……

そんな王子は自分の格好なんか気にせず、ナンパというのをして

みたいと言いだし、カーリーナはとうとうあきれて、王子からもらったお小遣いで屋台で売ってた妙な果物を買って、俺と王子から少し離れて見守っている。

王子は王子で勝手に道を歩く女の子に声を掛けまくるが全て嫌な顔して交わされる、その度に何故ボクチンはモテない発言がことごとく繰り返される、これが今の現状である。

「そうだ！そういうえばボクチンはナンパ初心者じゃないか！」

なんだよナンパ初心者って。

「カネシロよ、手本を見せてくれ！」

「えゝ手本ですか？」

「早くせんか、これは王子である……」

「分かった分かった分かりましたよ」

まったく、何で俺がナンパをしなくちゃいけないんだ、そもそも俺もナンパ初心者だぞ……まあいいか適当に声かけてみよう、おっ！ちょうど女の子がこちらに向かって歩いて来た、こんな人通りが多い所で大っぴらにやるものなのかと、いささか不安になったが、何とか声を掛ける。

「やあやあ、お嬢ちゃん、ミーとティーしないかい？」

「キモい」

ひどい！声掛けた瞬間にひと睨みして次の発言がキモいつてどういうこと？僕とお茶しませんかっていうナンパの代名詞とも言えるセリフを良い感じにアレンジした俺の発言のどこがいけなかったんだ！そして、カリーナ！後ろの方で笑い堪えてんじゃねえ！

「カネシロよ、すごいではないか！失敗はしたが、ちゃんと断りの返事を貰えるとは！」

王子、あんたすごい悲しい事言ってるよ、何だかごめんよ……

「というより王子、あんた金は持ってるんでしょう？」

「ああ、ボクチンの財布には、十万ギル札がビッシリだ」

おお！それはすごい！じゃなくて……

「じゃあ一枚取り出して女の子に見せれば良いんですよ」

「何！？それで付いてくるのか！？」

「ええ、平民を舐めちゃいけません、十万ギルは大金ですよ、ただし、もったい無いですからね、あげるのは良くないですよ」

それを聞いた王子は財布から十万ギル札をすばやく取り出し、さっそく声をかけ始めた。

「ボクチンに付いてきたら十万ギルやるぞ」あ、ダメだこりゃ、どう見ても誘拐犯だ。

「キャー！！！！誰か、助けてえ！！へ、へ、変な人が！」

あんたの反応は正しいよ、正しい、正しすぎて何だか泣けてきたよ、黄色い短パンはいたデブがこんなセリフだもんな……王子はビツクリして右往左往してるし。

「ち、違うぞ！ボクチンは変な人なんかでは無いぞ！」いや変な人だよ。

「デブの誘拐犯が女の子襲ってるぞ！」

「デブの通り魔が襲ってるぞ！」

「大丈夫か、お嬢ちゃん、この男に何をされたんだ！？」

最初に数人が王子を罵倒し、それが人を呼び、さらに人が人を呼び、いつの間にかあたりは人に包まれていた、王子はまだまだ右往左往、何とか言い訳しようとしているが周りの罵声で聞こえない。

さらには帰れコールが始まってしまった、周りのほぼ皆初対面の人が集まりに集まり謎の結束力を生み出した、ただ一人に帰れコールだ。

「……帰れ！帰れ！帰れ！」……

「だ、黙れ黙れ黙れい！！」

王子はとうとう怒ったのか杖を取り出した、そりゃそうだ、王子だと名乗ればおそらくは引くだろうが名乗れば城に戻され王様に怒られるだろう、他の人間には強気なのに王子は唯一王様を何よりも怖がっているのだ、だからわき上がる怒りを静める残された方法は

杖での威嚇だった。

しかし、この場所を王子は自分の土地であるのに（正確には王様の）ちゃんと理解していなかったみたいだ、逃げておけばいいものを杖なんか出したせいで、周りに集まる人は杖や剣、ナイフやナツクルや槍など様々な武器を出す、そう、ここは魔法と武の国と呼ばれるカネス王国の首都、カネスギルドを筆頭に他にも様々な武力組織の本部があるこの場所で、王子の杖はただの棒に等しかった。

「な、何故だ、ボ、ボクチンは何も悪い事などしとらんぞ！」

「嘘付くんじゃねえ！この女の子を誘拐しようとしてただろう！」

そうだそうだと周りが叫ぶ。

「ボクチンは誘拐なんてしてない！絶対だ！しようもしない！金は持つてるのだぞ！誘拐する意味が無いのだ！」

武器を構える周りの人に見せるようにクルクルと回りながら財布の中身を見せる王子、だがこれも効果が無いどころか周りの人は王子の服装と財布の中身が釣り合わない事を素早く突き止め、勿論に王子様がこんな場所でこんな格好でこんな事になってると思っていないので、ついには王子は泥棒扱いだ。

「ク、クウ~~~~！！！！？もういいいい！！」

そう言つと王子は帽子を乱暴に掴むと地面にバンツとぶつけ、顔のほとんどを隠してあった帽子を取った、露わになる王子の顔、この辺に住む者なら一度は見たことがあるだろう、デブで有名なダメ王子の姿がそこにあった。

「ボクチンはカネス王国の王子、チャプチョム・カネス・ヴィナテイキであるぞ！」

ドンと構える王子、急に水を打ったように静かになる周り、なんだかもうめんどくさくて助けるといふ選択肢をとつくの昔に消し去った俺、未だに何故か笑いを堪えている力リーナ、地獄である。

この王子の発言でざわめきの一つでも起きれば少しは王子の優越感なんかも埋まるとは思うのだが予想に反して静まりかえったこの場は、やはり王子にはキツイものがあつたみたいだ、怒って真っ赤だった顔を余計に赤くすると王子は太った体を揺らしながら走って帰ってしまった。

「王子、いつまでスネてるんですか？」

王子の部屋は物が散乱し、非常に歩きにくくなっている、前はこんな事になっていなかったので、帰ってから王子がやったのだろっ、王子は大きなベッドで布団にくるまり、もうかれこれ一時間は説得してるのだが、うるさい、またはほっとけ、しか言わない、中学生かあんたは。

「王子、今回の事は王子にも責任があります、これを機にもう城下町に出たいなどと……」

「何故だ！」

カリーナの言葉を遮るように籠もってた布団ではがし、顔をこちらに向けた。

「ボクチンはただ平民の若者がやるというナンパというものを、しただけだぞ！何がいけなかったのだ！？ボクチンは何か悪い事をしたのか！その内に政略結婚させられるのだ！平民にしか出来ない自由な恋というものを味わってみたかったのだ！ボクチンは人を好きになっではいけないのか！？」

「そういう事では無いんです王子……今回のような事は非常に稀で……王子には運が無かったといえますか……」

「ええい！カリーナ、お前は何かとハッキリせん所がある！ハッキリせい！」

「確かに王子はただ単にナンパをしただけかもしれませんが、やり方というか何というか……」

「もういい！カネシロ、お前はどうか、ボクチンに何が悪かったかハッキリと言え！」

俺に振ってきたよ、この王子は……とりあえず……

「格好はまあいいとして、やり方も……まあいいとして……やっぱり見た目でしょう」

「み、見た目！？今、格好はいいと言ったではないか！」

「格好はいいですよ、でもデブって言われてたでしょう？だから見た目」

「先生、適当言わないで！」

カリーナは一つため息を吐くと王子に向き直った。

「王子……今回の事で学んだでしょう？人は自分が正しいと思ってる方にしか向きません、集団になるとなおさらです、人は集団になって自分たちと違う者は敵と判断するんです、そんな者には耳などがたむけてくれません、ただ敵を消し去ろうという拳だけが動いてます、耳や目は自分の仲間だけを見て聞いて自分の世界を綺麗だと勘違いするのです」

「じゃあ何だ！？ボクチンはいつらと違うからこうなったというのか！」

「そついう事です」

これに王子は声を荒げる。

「納得いかん！これじゃあただのイジメではないか！対処方も無いのか！？」

「ありますよ、戦って勝てばいいんです、勝てば勝った方が正しいですから」

「なるほど！だが……ボクチン一人の力ではどうにも出来ない……そうだ！あいつらと同じように集団になればいいのだ！こっちも集団になって戦うぞ！」

それにカリーナは静かに答えた。

「……………それを、戦争っていうんですよ」

今日の教訓・ナンパなんてするもんじゃない。

さて、もうほとんど俺のせいで起こったと言われても過言ではない王子ナンパ失敗事件から一週間は経過したわけだ、スネにスネた王子をあやしまりなんとか復活させたのは昨日の事、しかし、何もそのために一週間を無駄にしたわけじゃない、色々動いたのだ、言わずとも無く王子のために。

今回の依頼は何も王子の機嫌取りでは無い、本来の依頼の中で、たまたま王子の機嫌取りもしなくちゃいけないみたいな状況なのである、まあ、本来の依頼というのは王様から聞いたところに王子を今回の戦争で英雄にしるとの事だ、この運動は五十メートルも満足に走れない、魔法は子供でも使える基本魔法くらいという、その辺に倒れている放浪者の方がまだ役立ちそうなほど役にたたない権力だけは一人前の王子様を英雄にするほど余裕があるのか、この国は

だが、この国の心配をしているほど余裕は無い、何だって毎日のようにカーリーナに修業の一つでもしようと言われながら布団に潜って寝るわけでも無くゴロゴロしている王子を英雄にするには、やはり準備の一つでもしないと戦場に出たとたんに死んでもおかしくは無いのである。

そこで俺は無い頭を振り絞って策を練っていたのだ、そして一つの結論にたどり着いたのだ、これは無理だと、出来るわけ無いと、しかし、報酬を諦めるのは嫌なのでまあ何とかなるだろうと、そのまま過ごしてきた、よくよく考えればやっぱり王子の機嫌取りかしてないのであった。

この王子、何かと物にはまるといって、使用人に聞くとところによる

と、俺とカリーナが来る前までは絵画にはまっていたらしい、運動と勉強がダメな分そちらに自分を求めるようなのだ、しかし、この絵画も俺とカリーナが来る前にやめてしまったらしい、大体は三日でやめるのだとか、この三日坊主めっ！

王子の今までの趣味としては、生け花、絵画、マジック、チェス、利き酒、ダーツ、釣り、e t c ……何かと道具が必要になってくるものばかりである、三日坊主の王子はこれらに飽きると勿論の如く道具を捨てる、高級な道具を一式そろえたにも関わらず三日で捨てるのだから勿体ない。

勿体ないと思うのはさすがに俺だけでは無かったようで、使用人さん達が勿体ないと捨てた道具を拾っては自分達の趣味にしているのだとか、それで使用人をやめて、その趣味を職業にまでした人も居るらしい、しかし、使用人達ももう限界で、王子に金のかからない趣味にしてくれと頼んだそうだ。

平民の意見を聞くのも王族の役目だ！とか言い出して新しく始めたのが料理である、いや、金かかるじゃん、と思ったが使用人からすればゴミ道具が出ない事の方が重要なのであった。

「カネシロ、カリーナ、見よ、目玉焼きだ」

城の調理場に行き、コックに事情を説明すると、そういう事ならと快く調理場を開けてくれた、さらにコックが料理を教えてくれるという、一石二鳥だなんて思っていると王子がこういう時だけやる気だすもんで自分でやると言い出した、その結果がこれである。

「それで、この真っ黒いのは何ですか？」

「だから目玉焼きだと言っておるだろうが！」

目玉焼き……初代勇者がこの地に広めたとされる、どこの国でもポピュラーな卵料理だ、俺も勿論知っている、卵を焼くだけだ、水を入れたりもするのだろうか、大体は卵を焼くだけでそれなりのものが出来るはずだ、目の前の王子が持つフライパンの中の物以外は。

「あら、すごくおいしそうですね」

フライパンをのぞき込みながら笑顔で言うカーリーナにこいつはお世辞しか言えないのかと思う。

「そ、そうだろう！カリナよ、お前が試食するとよいぞ！」

え

墓穴掘りよつた！墓穴掘よつたよこいつ！やつぱりダメなもんにはダメとハツキリ言う心も持ち合わせないとダメだな、じゃないとこんなガンになりそうな目玉焼きを食う事になるんだから。

「ほら、どうしたのだ、ボクチンの目玉焼きが食べないというのか」

「で、で、でもほら、先生がすごく食べたいって顔してますよ……」

してねええええええええええええええええええええええええ。

「お、そうか、ならカネシロ……」

「してないしてない！こんな腐った目玉焼き誰が食うか！」

「ほう……」

王子が静かに怒り出す、怒ってばかりだなこの王子は、でも目玉焼きが嫌なのは変わり無いもんね！

「このボクチンに敬語を使わず……あまつさえ、ボクチンの目玉焼きをバカにするとは……ゆるせん！薄々この目玉焼きはダメだと気づいていたが、ここまで言われるとは思わなかった！カネシロよ、命令だ、これはお前が食せ！」なんだとう！！

「で、でも王子、カリーナが食べたすぎてやばいって……」

「聞く耳もたん！」

フライパンをこちらに押し出して来る、目玉焼き（自称）はフライパンにこびりつき、時間が経過しているのにかかわらず未だにジュウジュウと音していた。

目玉焼き一つをただで食える、そう無理矢理考えて手を合わせフオークを持つ、目玉焼き（自称）に刺すと思ったよりも硬い、ザクザクと音を立て刺さると俺はそのまま口に持っていた。

「……どうだ、カネシロよ」

「炭です……」

苦い、ただただ苦い、絶対に体壊すぞこれ、味が苦い一筋だったのが幸いして何とか食えた。カリーナはホッとした表情をして王子はつまらなそうにため息を吐いた、二人とも死ね！

そこへドタドタと足音が聞こえる、そういえばそろそろ昼飯時だ、コックが戻って来たのかもしれないな、もう少し早く来たら目玉焼き（自称）を無理矢理押しつけた所なのに、おいしい、さらにドタドタと聞こえ人が入って来た、予想に反してコックでは無く、普通の騎士だった。

「王子、ここにおられましたか、探しましたよ、結界が完成したとの事です、王の間へお急ぎください」

「結界？結界とは何だ？」

俺も同じ事を思った、何だろう結界って。それに答えたのはカリ―ナだった。

「結界っていうと今回だと、おそらく『瞬間移動防止結界』ですね、カネスもコロナもこれをしなくちゃ『瞬間移動』テレポーションで相手国に行って暴れ回って、どちらも大損害になりかねませんから、分かりましたか？」

「ウム……二割ほど分かったぞ」

俺も分かったぞ、こいつの代でこの国滅びるな。

「分かったならお急ぎください、王が待っておられます」

そう言つと騎士はまたドタドタと道を引き返して行った。

王の間に着くと王子は自分の指定席である座る王の横に行こうとするが王はそれを一括した。

「おそい、周りを見る、他の者は皆すぐに来たぞ、今回の主役であるお前が早く来なくてどうする」

「け、けどお父様、これには訳があつて……」

王様は眉をつり上げる。

「訳か……チャプチョム、俺様に言い訳が通用すると思ったのか？」

「い、い、い、言い訳なんかではありません！」

ズブリまくるハン。

「忙しかったのですっ」

「何に忙しかったんだ？」

忙し……確かに俺は忙しかったよ、主に真つ黒いのを飲み込むのに、王子はなんて言うんだ、まさか料理に忙しかったとは言わないだろうな……

「修業です」嘘つくんじゃねええええええええええ！！

「な、何っ！？修業だと！」

クールだった王様が急に身を引く程に驚く、周りも同じで王様と王子のやりとりを毅然とした態度を崩さず、キリツとした表情だったのが一気に砕け、ざわざわとし始めた。

「まさか、チャプチョムが修業をするとは……」

騙されちゃいけない！修業といっても出来損ないの料理修業だ！それはもう王子の体格の変わり無さからも見てとれる！

「そうか……そこまでの意気込みだったとは、よし、今夜は宴だ、飲むぞ！騎士も使用人も傭兵も皆盛り上がるといい！明日から戦争だっ！」

そう王様が宣言すると、王の間は一気に盛り上がった、皆盛り上がればいいみたいな事を言うが使用人は別である、何しろ料理を運んだり、テーブルの用意をしなくちゃいけない、コックなんかはもっと大変だろう、何人前の料理を作るのか考えただけで嫌になる、調理場に帰ったらビックリするだろうな……真っ黒のコゲだらけのフライパンが置いてあるんだもん。

戦争の形というのは簡単に言えば陣取り合戦だ、ずっと昔に戦争が各地で起こり、その名残として色々な所に城や塔などが配置され、今も使うには十分な状態で残っていて、その城なんかを取り合い、自分の陣地にしていくのだ。

カネスとコロナの境目にあるのは、暗見森とそれを突っ切るように流れる川だ、大体その辺が国境にあたる、故に川に近い城を拠点に戦う事になるのだ。

という訳で今居る場所は川がもう直ぐそこに見えるサンジタリアス城、サンジタリアス家有する城で、全体的にガツシリとした白い外観を持つ防御に優れた城だ、城からの眺めは見晴らしが良く、敵が来ても直ぐに動けるようになっていた。

何だか怖い王様だが王子への愛情はちゃんとあると見ていいだろう、これだけ頑丈な城で、カネス城下町にもほどほど近く、さらには騎士が百人、傭兵が五千ときていた。

移動の時は遅い遅いとぐずっていたのに、ここに来て上機嫌なのは、城の探索をし終えた王子である、戦争はもう始まっており、攻める事も守りを固める事も出来る、英雄になるなら攻めた方が良さと思うが敵の所に行こうとは思って無いらしい、所有物になるわけでは無いが自分にあてがわれたこの城が大変気に入ったらしくさつきまで無い目をキョロキョロと動かしていた。

しかし、上機嫌な理由は何もこれだけでは無い、もう一つ理由があるのだ、もうそれはそれは恐ろしい事に……

「それでは、会議を始めるぞっ！」

二十歳を超えても少年の時の元氣は消えてない王子の声が、ここ城内の会議室に響き渡る、この場には長テールの上座に座る王子と、それを挟んで俺とカーリーナ、他に七、八名ほどの将校がいて、一直線に王子の方を見て、王子の言葉を待っている。

王子は英雄になりたいと言ったが作戦を決めたいとは言っていない上に国同士の大きな戦争ともなれば自分はまだ動けないかもしれない、なんて思ってた所に王様から修業の褒美だとか何とか言って王子の階級を大将とした、これで作戦およびその他の決定権は王子に託されたのだから末である。

ちなみに元々大将だった人は少将となり、会議室の場だというのは騎士の鎧を背負って王子を恨めしそうに見ている、どうして少将にまで降格かという俺とカーリーナが中將になったからだ、別に俺達が言った訳でも無く、王子の頼みでこうなったのだ、それでさっきの元大将の人に俺達まで睨まれてるんだからどうしたもんか。

「会議を始めると言っておろうが、返事くらいせんか！」

王子の声に皆が皆、まばらにはいと返事を返して行く、非常に元氣が無い、統率のとの字も無いのに士氣も低そうだ、大丈夫かな……

「まあよい……とにかく、作戦を決めよう、ボクチンが考えた作戦はこうだ、一気に攻める！！」

おお、このままグータラグータラ会議が進むのかと思いきや、王子まさかのファインプレー！いや、作戦の内容は褒められたものじ

やないけど、というよりも……

「どこを攻めるんですか？」

「さあ、分からん、分かるのは城を攻めれば良いという事だけだ、この辺はどの辺りに城があるのだ、カネシロ」

「俺に聞かないでくださいよ、この辺の地理なんて、来た道の場所と、城の位置と、川くらいしか分かりません」

それに王子は楽しそうにケラケラと笑った。

「奇遇だなボクチンもだ、ハッハッハッハッハ！」

「そりやそりや奇遇ですね、アッハッハッハッハ！」

「やかましいっつ！！！！！」

その叫びと共に机が大きな音を立ててヒビが入った、いつの間にか立ち上がり鼻息を散らしながら、こちらを睨むのは元大将で現在少将の……名前は忘れた。

「王子、考え直してください！地理も地形も分からず、敵の城も分からず、何が大将ですか！これでは自分の国を自分で滅ぼす事になりますぞ！」

まあ、カネス王国はこの王子が継ぐんだから遅かれ早かれつづれるとは思うが、この人の言い分はごもつともである、大将ともなればその位知って当然といった感じた、だがこれで王子が引き下がるはずも無い。

「なっ！ボクチンに逆らうというのか！」

「違います！このままでは良い方向に向かないと言っているんです、大將は長年將校を勤め、勲章を貰い受け、大きな結果を出し、経験豊富な者だけが成れる階級です、それ故にそれだけの権があるので、れっきとした戦争ですぞ、そんな事では本当に惨事を招きかねません！」

「やかましい、やかましい、ボクチンに逆らうというのか！」

学が無い故に口でまったく勝てない王子、もうとにかく自分に逆らうなど、何度も言う。

「ボクチンはカネス王国の王子、チャプチョム・カネス・ヴィナテイキだぞ！お前は何だ！將校風情がボクチンに逆らうんじゃない！」

「なら……決めていただきたい」

「何がだ」

「貴方は王子としてここに居るんですか、それとも大將として？お二人もです、王子の付き人か、中將の地位を与えられた軍人か、ハッキリしてもらいたい！」

いや、別に好んで中將になった訳じゃないし……

「俺は付き人だ、中將に何か未練があるわけじゃないし」

「私も同じよ、これは王子の判断であって王様の判断じゃないわけ

だし、私達が中将である理由も意味も無いわけだし」

「カネシロもカーリーナも何を言っておる！お前達はボクチンが中将と決めたのだぞ！それを自分から降りるような発言を！」

だつて中将つてそもそも何をする人がすらく知らないし、めんどくさい、金にならない仕事になりそうなものを増やさないでほしい。

「王子、早く答えてください、王子として居るのか、大将として戦うのか」

「どちらもまだ！ボクチンは王子であり大将だ！どちらにしろお前より偉いのだ！」

「そうですね、なら大将としての責任として王子の身は貴方自身を守る事になりますね！王子としての責任も大将としての責任も、ちゃんと背負ってくださいね、我々はただ動かされるだけの駒ですから、くれぐれもよろしくお願いします！」

そう言うつと少将さんは立ち上がつて会議室を後にしていった。

「クウー！何なのだアイツはっ！」

「まあ簡単に言うつと……」

カーリーナは顎に手をやり、ぼんやりと上を眺めた。

「自分の事は自分で解決しろ、私はただの駒なので責任持たないつて事ですな」

「フンッあんな奴の助けなど借りるか！ボクチンは強いんだぞ！」

この王子は本当に見栄を張るのが得意だ、実際は何が出来るんだか……

「それで、どうします、一人抜けちゃいましたけど……」

「続けるに決まっておる！あんな奴一人居なくなった所で……」

「お言葉ですが王子」

俺の斜め向かいに座る一人の男が挙手をした。

「私は大将の意見に賛成です」

「おお！そうかそうか！そりゃそうだろう、良い心使いだぞ！」

「そうでは無く、今出て行った大将の方です」

ああ、やっぱりか……最初に王子って言うておいて次に大将って言うのもおかしいと思ったんだ。

「あいつは大将では無い！大将はボクチンだ！」

「いえ、あの人が大将です」

「クウッ！！出て行け！」

これで二人目、どんどん人数が減っていく、この調子だとその内

に全員出て行く事になるんじゃないかと思ったが、そうはいかなかった、その内じゃない、王子、俺、カリーナを除く全員が一斉に立ち上がると、そのまま会議室を出て行ってしまった、何してんだか……

さすがに呆れてしまった、これじゃあ会議どころの話じゃない、王子はあつけにとられ、カリーナのどうしますの一言も耳に入っていないようだ、何時敵が攻めて来てもおかしく無いこの状況の中で護衛がたった二人の大国の王子様、だめだこりゃ。

「クソオオオオオオオオオオオ!!」

「王子、頼むから落ち着いてください」

怒りの静まらない王子を何とか押さえる、良い状況では無い、戦争が始まってからもう結構な時間が経ち、そろそろこの辺にも敵が来るかもしれないというこの状況で王子の怒りはまだまだ紅潮だ、一つ一つを冷静に考える余裕が無く一度煮え切ったものは中々冷めない。

こんな時でも俺達の行動の最終決定権はやっぱり王子にあるのだ、統率も取れてない、身内で喧嘩、地理も分からない、大将が一番弱い、作戦も決めてない、城の構造も良く分からない、しかし、それでも逃げれない。

王子は基本意地っ張りな所があるから面倒くさい、出来る事は無さそうですし逃げまじょうなんて言ったらまたまた怒り出すだろう、だから逃げれない、だからと言って王子を置いて逃げる訳には勿論いかない、王子が冷静になって、逃げようとか、仲直りしようとかまともな事を言えば解決出来るだろうが、その王子が怒りに怒り長机をバンバン叩いてるんだから、俺にはなだめる事しか出来ないのである。

「いつまで怒ってるつもりですか？」

「やかましい！」

肩に置いた手をバチンと叩かれる。

「まるでボクチンが悪いみたいではないか！」

あんたが悪いんだよ、と言いたい所だが将校達にも問題があった、将校は忙しく王子と関わる機会が無かったとは思いつ、将校ましてや大将ともなるとそれなりの高い地位だというのも分かるが相手は王子だもうちよつと言い方があつたらうに……苦労するのはこつちなんだぞ！！

「ん？そついえばカリーナはどうした！」

カリーナは今たぶん将校達の元へ行っている勿論仲直りをするためだ、経験も無い俺達に何が出来ようか、とにかく仲直りはしておいて損は無いのである、だが王子は良く思わないだろう、どうやってこまかそうか悩みどころである。

「どうしたのだカネシロ！カリーナはどこか早く言わんか！」

「カリーナに用事が？」

「そんなもの無い！アイツはお前と違って何かと気を利かす事がある、まさか将校共の元へと行ったのでは無いだろうな！」

何でこんな時だけカンが良いんだろう、でも結構人を見る目はあるんだよな、その辺は注意すべきだな俺が普段自分の事しか考えてない奴だと見破られるかもしれん。

「うゝん、どうでしょう、自分で見てきたらどうです？」

我ながら上手い返しだと自負する、適当に場所を言った場合、じやあそこ行ってみようなんて事になりかねない、だがこの返しだと

王子は将校の元へ行くはずも無いので、もういい！と言って終わら
だろ。

「……じゃあ見てこよう」「ええ！！？」

「い、い、いや間違えました、トイレです、トイレに行つて
んです！」

「じゃあ見てこよう」

「ダメですよ！」

「何故だっ！」

いやいや、何故ってあんた……

「女子トイレに入る気ですか？」

またまた上手い返しだと自負する、さすがの王子ともいえど男児、
女子トイレに入る気は無いだろう。入ったとたんに変態のできあが
りである、見た目のそれが変態チックなので余計に変態である、英
雄目指して変態にはなりたくないだろう。

「誰が入ると言った！外で声を掛ければいいだろう！お前の嘘八百
はお見通しだ！」

「う、嘘じゃあ無いですよ、それにトイレですよトイレ、外で声を
掛けられるなんて恥ずかしいに決まっています！それにもしまし
たら月に一度の女の子の日かも……ゴヘッ！？」

何時の間にやら後ろに居たのかカーリーナに後頭部を打撃されると、その衝撃で頭が下がる、すると王子にぶつかりそうになった、いけないと思い何とか腕を伸ばしながら体をひねり避ける、体をひねるために腕を全力で伸ばし胸がから空きなので、あばら骨の間を椅子の角で思いつきりぶつけた、これは痛い。

「いったああああ！！ゴリッて！ゴリッてなった！」

「カーリーナよ、どこに居たのだ？」

無視かい！

「将校達の所へ行っていました」

しかも言うんかい！

収まって来た王子の怒りをまた復活させまいと奮闘した俺の努力は何だったんだと言いたい、ヘタな事言わずに素直に将校達の所へ行きましたと言っておけば良かった……

「そうか……将校共は何と言っていた？」

「大将の座を譲るまで協力する気は無いと……」

「ぐううううう！！！！！！」

またまた机を叩く、王子が怒る度にドンドコ音が木霊するのはいい加減に聞き飽きた現象だ、その内に机が壊れて俺が修理するハメになるんだから、いい加減に直してほしい。

「戦争時ですからね、将校達は自分達に今どれだけ価値があるかをハッキリ分かってます、だからこれだけ大きく出たものかと」

「もういい、もういい、もう分かった、もうこの城を出るぞ！男らしく！」

おお！やった！いったいどの辺りが男らしいのかは分からないが、言い選択だ王子。

「やっと逃げる気になったんですね！」

「逃げるのでは無い！！！」

え？いやいや、将校達と喧嘩して勝てそうに無いから逃げるんじゃないのか？

「ボクチンには考えがあるのだ、行くぞ！」

川原には小振りの石が敷き詰まって川の水により少々コケついていた、ジャリジャリと足場を進みながら地図を片手に歩くカーリーナの二、三步後ろで歩き疲れた王子の背中を支えながらしみ出して来た汗に寒気を覚えるばかりだった。

一向に着かない敵城を目指し旅を続けてまだ二時間程しか経っていないが、いい加減に疲れる、何しろここには川、川原、平原という見事なまでに影が無く、高い建物が並び立つカネス城下町に生まれ、王子は人混みどころかゴミ一つ見つからないここはキツイようだ、というより王子が単にデブだからという理由も無きにあらず。

だから足場が悪くとも少しでも涼しもうと川原を歩く訳である。

「ええい！カリーナよ、まだか！」

「たぶんもう少しですよ」

この会話も何回目か。

「そもそもこんなに暑いのに何故、汗一つ掻かないのだ！」

汗まみれなのは王子あんなだけだよ。

「まさか水系統魔法か風系統魔法を使って、自分だけ涼しくなっているのでは無かるうな！」

「水系統魔法も風系統魔法も苦手……というより全然ダメです、火系統なら出来ますよ、主に爆発を」

「いらあああん！……そうだ、川に飛び込めばいいでは無いか！」

「その発言も何回目ですか、この川が綺麗だって保証は無いし、拭くよつの布も持ってきて来ません」

「クウー！！暑いのだ！」

「大丈夫ですよ王子」

カリーナが地図から顔を離し、こちらを振り向いた、そして笑顔を浮かべると川の方角とは反対に指を指す。

「あれが、敵城です」

おお、やっと着いたか、いやあ地獄だった、疲れた王子の背中を支えていた手がまだ妙にしっとりしているが、いやあ地獄だった。

この地獄を達成した事は王子もカリーナも嬉しかったらしく、さっきまでのグダグダとした空気も一新されたように爽やかなものになった、しかし敵城の直ぐそこで爽やかに微笑むのはどうかと思う。

「それで王子、作戦どうりで良いんですね？」

「ウム、カネシロよ、ボクチンの剣をよこせ」

サンジタリアス城から出る時に必要になるかもしれない物を幾つか俺の魔法の袋に入れておいた、とりあえず剣やら食料やらを持って来ていたのに水だけ入れ忘れたのは今になっては良い思い出となるう。

「はい、どうぞ……それじゃあ行きましょうか」

「そうだな……チャプチョム・カネス・ヴィナティキ英雄伝説は今ここから始まるのだあああああああつああああ！！！」

敵城の真正面で剣を大きく掲げ、予想以上の大声で叫んだ王子に、俺は不安を覚えるばかりだった。

「それじゃあ頑張りましたよ」

そう言う二人は、重そうな鎧を着込み、槍を肩に担ぎながら微動だにしない門番にも見つかる事無く城壁をすいすいと登りながら、見事に城の中に侵入した、さすがはお父様が雇った者だ、少々変な所はあるが実力は確か、暗殺者らしく建物に侵入するのはお手の物らしい。

さて、このまま作戦どうりに進むとなると、ボクチンは敵城に突撃し、将校共だけの首を討ち取るだけだ、騎士なんかはあえて生かして帰す事によりボクチンが城を落としたという噂が早く世界中で響き渡る事になるだろう、そう英雄チャプチョムという素晴らしい響きが。

それにはカネシロとカリーナの協力が必要不可欠だ、自慢じゃないがボクチンは自分自身の実力というものをよく分かっている、まあ中の上あたりといった所だろう……普通の兵くらいなら倒せるかもしれないが将校となると話は別、だから二人には将校を殺してもらう。

しかもボクチンの噂を広めるのが本来の目標なのでボクチンが倒したように敵兵達なんかに見せるようにする、その後に敵がボクチンに向かって来る事は十分に予測出来るので、二人にはついでに、そいつらを気絶させるように命じておいた、勿論これもボクチンがやったように見せるように。

無理があるという事は理解しているが作戦を成功させるには、こ

の位しなくてはならない、二人なら、きつとやってくれるだろう、少し不安だが……ええい！まあとりあえず、行くぞ！

二人が城壁を越えて城に侵入した事にも気づかない無能な門番はボクチンが向かっているのに気がついた様で、警戒心を露わにしなからこちらを見据えた、ある程度まで行くと門番は片方の手で槍の刃をこちらへと向ける、そしてもう片方の手で待ったの合図をした。

「お前は何者だ、強者には見えないな……鉄砲玉か？やめとけ、戦争時になると『生命の魔法^{ライフ}』を使う奴が出てくるから俺みたいな奴が居るんだ、杖の一本でも抜いてみる、お前の首に穴が空く事になるぞ」

無礼な奴だ！まるでボクチンを何時だつて簡単に殺せるみたいな言い方ではないか！加えてボクチンの顔も知らないらしい、まあコロナの奴に知られても別に嬉しくないが、少しイタズラ心が沸いた、名乗ってやろう。

「フッフッフ……ボクチンはカネス王国の王子！チャプチョム・カネス・ヴィナティキであるぞ！」

門番に驚きの表情が浮かぶ、どうだビックリしただろう、しかし、門番は突然腹を抱えて笑い出した。

「ハッハッハ！チャプチョム・カネス・ヴィナティキ？あのバカ王子か！ハッハッハッハ！！こりやおかしい腹が痛い、戦場に出るとは聞いてたが、一人で来やがった！しかも正面から堂々と！その上に自己紹介まで！アッハッハッハッハ！！」

大笑いまでして、その上バカ王子とは敵国ともいえど王族は敬う

ものだ無礼者めっ！

「ボクチンをバカにしているのか！」

「アツハツハツハ！バカに？勿論してるさ！この城を見てみるよ、小さめの城で、門番は俺一人だし、騎士も少ないし、統率も取れない三流魔法使いを雇ってるし、将校は中尉ただ一人！何でか分かるか？お前が居るからだよ、上はお前が大将と知って、この程度で大丈夫だと判断したんだ！」

「……………」

「こんなので大丈夫かって不安だったんだけど、上の判断は正しかったんだな、いや城すら用意しなくてもいけたんじゃないか？なんたって大将様が自ら一人で来てくださったもの！アツハツハツハ、しかも武器は剣！そのタプタプの腕で振れるのか？ほら振ってみるよ、タプタプって！ハツハツハツハツハツハ！腹いてえ！」

「……………殺れ」

スパンと空が切れるような音が鳴ると門番の首は地面に転がる、しかし怒りは収まらず沸々と煮えたぎって来る、腹が立つ腹が立つ腹が立つ腹が立つ、いつもそうだ、怒りのぶつけ所が分からない、毎回物にあたって終わり、しかし今回はそれで済むか？いやダメだ、収まらないだろう。

ゴロゴロと門番の首が血を流しながらボクチンの足元に転がって来た、踏みつける、強く強く踏みつける、血が出た、収まらない、人を殺したい。

そうだ、今は戦時中で、ここは敵の城で、中に居るのは敵で、殺す事は良いことなんだ。

「カネシロ、カリーナ、聞こえているな？作戦を変更する」

「急ですね」

どこに居るのは分からないがカリーナの声がした、周りを見る、声は聞こえど姿は見えぬ。

「いったいどうするつもりですか？」

「どんな手を使っても良い、この城に居る者を全員殺せ」

次に聞こえたのはカネシロの気だるげな声だった。

「勘弁してくださいよ、気絶させるだけのはずでしょう」

「気絶させるより、殺す方が簡単のはずだ！」

「そりゃそうですね……いいんですか？貴方の噂を広めるのが目的でしょうに」

「気がかわったのだ！さっさと殺らんか！」

「……了解」

「了解」

途端に大きな爆発音、熱風を巻き起こしながら城の城壁もろとも城の一部を崩壊させた。

予想とは違って、もっとこつ暗殺者らしく静かにやるのかと思っただけ、いきなりこんな大爆発するものだから内心ちよつとビックリした、そういうばかりナが爆発を使えるとか何とか……とにかく、音も聞こえてこなかった城からは、悲鳴が上げられ混乱に陥っている、チャンスだ！

「うおおおおおおお！！！」

「何であのデブは駆け出してるんだよ！」

「知らないわよ！」

混乱し、騎士のうごめく城の中、そこに向かうは剣を片手に構えも知らぬ王子、外で大人しく待つつもりだろうと高をくつた途端にこれだ、ああいう事いうもんだからカーリーナが最上級魔法でぶっ飛ばし、その混乱に乗じて殺して行こうとしたところに駆け出す王子の姿が入って来たもんだから間に合わない、案の定城の中に入って行ってしまった王子。

「どうする？」

「王子は私が援護しておくから、先生は他の相手しておいて」

「了解」

ラッキーだ、こちらの方が圧倒的に楽出来るだろう、王子の援護なんて疲れるだけなのにと、変わり者のカーリーナを見送ると俺は城を登って中に入り、素早く天井に張り付く、何人もの人が慌ただしく行き交いしていて、まとめて殺すのは厳しいと悟った。

「どうなってる！防御結界を張っていたはずだろう！」

叫ぶのは他の人とは少し違った服を着る男、胸に二つの星マーク、将校かつ！

「破られています！おそらく二つ名持ちかと……」

「一階で謎のデブが剣を振るって暴れ回ってるとの報告がつ！」

「結界を形成していた一人である門番が遺体で確認されました、防御結界が弱くなっています、早急に代わりの結界師を！」

「結界は後回しだ！とにかくまずはそのデブを捕まえる！警戒を怠るな、剣で戦ってるという事は、防御結界を破った魔法使いがデブでは無い可能性が高い、大方、魔法使いは隠れているだろう、探せ！」

ここまでばれるとはさすがは将校って所か、今の内に殺しておくか……

懐からナイフを取り出す、カーリーナにもらった大きめのナイフは投げるのにはあまり向いていないが、刃が広い分、殺傷力は高い、さつきこれで門番の首を切り落としたので、血がこびり付き、若干鋭さを失ってはいるが、十分だろう。

ところが、まさに今投げようと思った所で、下の方で思わず手が止まるほどの爆発音が響いた、城は大きく揺れ、パラパラと砂埃が舞う、もう放っておいても勝手に城がつぶれて自滅するんじゃないか？

「報告します！下で爆発が起きました！魔法使いも下に居ると見ていいでしょう！」

「そんな事は分かってる！城が崩れる前にさっさと結界を強めろ！」

「あんたが後回しでいいって言ったから、こうなってんだろう！」

将校はムツとした表情を見ると、言い放った騎士に指を指す。

「上官に逆らうんじゃない！」

「何だと！さつきから偉そうに！将校なら将校らしくちゃんと問題を解決しやがれ！」

「まだ言つか、今は喧嘩などしている場合じゃ……」

「た、大変ですっ！」

そこへまた一人の騎士が駆け付けて来た、大きく息を荒げ将校の所まで来ると、呼吸を落ち着かせた。

「残りの結界を張っていた結界師と雇っていた魔法使いが逃げました！」

「なにい！！」

そしてまたもや一人の騎士が今度は階段から現れ駆けだして来た。

「報告します！一階は全滅しました！動きは遅いし構えもなっていないのですが何故か……とにかく謎のデブがこちらに来る前に、早く逃げましょう！」

「逃げてたまるか！城をやったまるか！大恥だ！俺は戦う、お前らだけ勝手に逃げろ！」

将校は杖を出し、階段の方向へと歩いて行く、やっぱり殺しておいて損は無いだろうと思いついていたナイフを取り出す。

「英雄チャプチョム見参！！」

タイミングの悪い王子、この階では謎のデブで通っていたため、王子の身なりを見れば明らか完全謎のデブだ、一斉に注目が集まり、将校は杖を向けた。

ウィンド・ボール
『風球』

魔法が王子に近づいて行く、王子もどこからか杖を取り出し、迫って来る魔法に向ける。

『爆^{ボム}発』

何と驚いた……というのは嘘でおそらく本当に撃ったのはカリナ、『爆^{ボム}発』で将校の魔法を打ち消し、王子は剣を抜いて将校に突撃して行った、非常に不格好に剣を振ると、これこそ驚いた、将校の首が一瞬にして吹っ飛んだのだ、届いて無いように見えたんだけどな……

「何故誰もかかって来ないのだ！……ん？何だこいつ、他の奴とは服装が違……ハッ！」

王子は剣をガチャガチャと鞘に戻すと、将校だった者の頭を掴み、高々と上げ注目をより一層集めた。

「ここの頭は討ち取った！ボクチンは機嫌が良い！お前らは逃がしてやる！散れえ！！」

武器を捨てて逃げるコロナの騎士達を見て俺は思った、俺何もしてねえ！！

元々敵城という事もあり罠なんかが張り巡らされ、居心地良くなるのには時間が掛かったが、コロナの騎士が逃げた後はカーリーナが

サンジタリアス城に戻り、早急に兵をこちらに呼び寄せ、掃除をしたので見れる程にはなっていた、大きいとは言えない城だが展望からの眺めは中々である。

そこで今日の疲れを取ろうと一休みしていた所、カリーナがやって来て、俺の隣にかけた。

「お疲れ様、先生、上がった時、いっぱい敵がいたけど、ちゃんと殺したのかしら？」

「え？ああ、うん……」

正直一人も殺してないけど……まあ解決したし良いよな。

「ところで王子の援護は大変だったろう？」

「そんな事無いわよ、王子が剣を振るのに合わせてこうやって……」

指を一本立て、振ると一瞬黒いものが横切り、展望の一部が切れた。

「闇を使えば簡単よ」

「俺には極力使うなって言うくせに……いや、それでも大変だったと見たね、なんだってあの王子だもん勝手な事ばかりやってる所が目に見えか……」

「ヒソヒソとボクチンの悪口か？」

うおう！？いきなり後ろに現れやがった！その辺王様譲りか！！

「しかしボクチンは機嫌が良い、許してやろう！何とな、何とな、将校達が何人かボクチンに謝りに来たのだ！」

「そりゃあ良かったですね……うん？」

下の方で騒ぎが聞こえる、この辺はあまり城が無いのでコロナ側が来るにはまだ時間に余裕があると見ていた、となると何か問題でも起こったか？

「何かあったのかしら……」

「気にするな、どうせ見落とした罠にで掛かってしまったのだ、それよりも今日はこの城でパーティーを開くぞ！名付けて英雄チャプチヨム披露会！！」何を披露するんだよ。

「た、大変ですっ！！」

突然入って来た騎士は顔が真っ青で冷や汗を掻いていた。

「何だ、どうしたのだ、せっかくボクチンがパーティーの話を……」

「サンジタリアス城からこちらに向かっていた少将と二千人の傭兵が倒されたとの報告が！」

「少将って元大将だった人」

「は、はい！」

「おかしいわね……二千人も引き連れて……なおかつ元大将まで居

るのに、そんな簡単にやられるかしら？」

それに王子はフンツと鼻を鳴らした。

「真っ先にボクチンに誤りに来ないといけない奴がそんな遅れて来るから死ぬような事になるのだ！」

「死んでいません」

……………は？

「死んでない？」

「はい、皆気絶させられたそうです、偶々早く気がついた者が風系統を使える魔法使いで、手紙を風に乗せてここまで……………それによると歳は十代頃だけの小隊だということ……………」

「ちょっと待ちなさい、それじゃあ何？元大将と手紙を風系統の魔法で遠隔出来るほどの魔法使いが居るような部隊が十代で構成された小隊に潰されたってわけかしら？」

「はい……………それに、おそらくこちらへと向かっているかと……………」

一人心当たりがある、それだけの力を持っていて十代の小隊、敵の命を取らないってあたり考えられるのは一人しかいない、めっちゃくちゃ頭いいけど敵を生かしておくような甘ちゃんバカ……………

「まさかお前が出てくるとはな……………刀神……………」

俺の小さな呟きは吹き渡る風に消えた。

刀神のボケが来た事を、まあ絶対とは言い切れないよ、あくまで予想だよ予想！だって刀神って奴はね！といった風にカーリーナと王子に伝えた、するとどうだろう二人は黙り込む、黙り込んだと思ったら王子が何故か満面の笑みで俺の肩を叩く、慰められるつもりは無い。

「カネシロよ、冷静に考えろ、な？」

「何ですかいきなり……気持ちの悪い……」

「き！気持ち悪いとは何事だ！」

すいませんと平謝りを颯爽と終え、カーリーナの方を見た、この城の中でまともな対策を出来るのは、カーリーナと数名こちらに移って来た、将校くらいのもだった、王子は何だか気持ち悪いし、俺にいたっては他人を頼る事にしか、刀神対策に方法が無かった。

展望の上ともあって風が強い、もう寒い時間帯によくカーリーナは難しい顔をして悩めるものだと思う、目を閉じて悩むカーリーナがふと顔を上げた。

「どうして、勇者がここに来なくちゃいけないの？」

「まったくもって、そのとうりだぞカネシロよ、ハッハッハ！」

考えてみると確かに疑問だ、進んで戦争に参加するような奴じゃないだろうし、金で雇われるような奴でも無い、考えれば考えるほ

どおかしい、刀神がここに来る理由、それも来る途中のカネスの軍隊を全滅させておいてまで来る理由……一つしか無かった。

「コロナに味方してるから……だろうな」

「……だとしたら大問題だ！コロナは勇者を何だと思っているのか！勇者はそんな事をするためにあるんじゃない！」

反応したのは意外にも王子だった、勇者の事なんかこれっぽっちも興味無さそうなのに。

「まったく、勇者とは世界を平等に救う英雄だ！世界のためにあり、世界のものなのだ、それをコロナは私物化しよって！勇者が来てから酷くなったとは聞いたがここまでとは！」

勇者は世界のもの、まあ、あいつからしたら誰のものでも無いんだろうけど、世間一般の考えから言うとうもそうらしい、コロナを除いてはだ、俺もそういう話を幾つか聞いた、他国にコロナ王国の嫌いな所はと聞くと、大体こう答える、勇者の私物化と。

かつて初代勇者が残したのか神が残したのかは知れないが、初代勇者が亡き後に発見された勇者召還魔法陣、それを今はボレアリスが所有し、長く長く続く歴史の中で何人もの勇者を召還した、それゆえに勇者の出発地点はコロナで、勇者始まりの場所なんてフレーズまで編み出したものだから、無知な国民は、勇者はコロナが召還してやってるなんて言う、しかも勇者が何か活躍を見せるたびに、自分の事のように誇らしげにするのだから、世界中から反感を買うわけである。

それも今回は戦争に使われ、しかも王子が自分の所有物にするぞ

と意気込むこの城を狙ってるかもしれない、王子の怒りが分かった気がした。

「勇者が召還される前から、あの調子だったし、仕方ないといえば仕方ないのか、もはや病気だな、五百年も勇者など召還されて無かったというのに、よくあれほど自慢話が出るものだ、コロナの貴族には昔、何度か会った事があるが、やかましいものだった」

「コロナ国民は幼少の頃から、そういうおとぎ話を聞かされて育ったらしいですよ、只の妄想みたいなものだと思うて、放っておけば良いかと」

コロナの思想を妄想呼ばわりするカリーナもやっぱり、この世界の人間だ。

「それに、まだ勇者と決まった訳ではありません、むしろ可能性は低いかと、勇者パーティーにはアリシア王女が入っているのですから、さすがに勇者を戦争に使ったら、どうなるかは分かっているでしょう」

あいつを戦争に使ったら……間違はなく役に立たない、何たって人を傷つけるのを、あいつは極端に嫌った、今回の事で刀神だと俺が予想した理由の大半はこれだった、そもそもこの世界の人間は戦いに慣れている様に見える、ちょっと町外れに行けば、人間を見つけた途端に襲いかかる化け物、つまり魔物が居るのだから、当然といえば当然だった、そんな世界で二千人を気絶だけさせる器用な奴は、刀神くらいのものだと思った。

元の世界を思い出す、あいつは何だって出来た、それ故に友達と呼べる友達が居なかった、他からの嫉妬、届かぬ存在、世界が違う、

そんな目を向けられ、いつも皆と違い孤立していた。

だが人気はあった、主に女子生徒からの……女という女に惚れられ、それでもやっぱり、届かぬ存在だと見られ孤立する、だが刀神に惚れた女の中には後悔したくないという恋愛経験ゼロの俺にとつて一番意味の分からない理由で告白する女が後を絶たなかった、しかし刀神は自分が見知らぬ女子から好かれる訳が無いと思っている、直球で「好きです！」なんて言う女も居たのに、それすら自分の事と思わず隣に居た俺に言ってると思っただけ、とんだバカ野郎だ、それで気持ちの伝わらなかった女達のモヤモヤした気持ちは俺に怒りとして向く事だってあるのだから、嫌になる。

まあ、それも昔の話だ、ヤクザの連れ去られる刀神を見た次の日に無傷の刀神と一緒に登校したのも。

青信号で横断歩道を渡っている時に、明らか刀神目掛けて突っ込んで来た車が操作を誤ったのか、他の車に衝突し、それを刀神が目散に助けに行った事も。

何の不幸か、町の不良に刀神と一緒に居るという理由で俺まで因縁をつけられ、あいつと一緒に逃げた事もあった……何が面白いのか笑ってたなあ……「あんな奴ら倒せよ」って言ったら、「逃げるのが一番だ、無駄な争いは嫌い」だなんて言っただけ俺を巻き込んだ事を棚に上げたもんだから、一発蹴りを放った、避けられたけど。

とにかくあいつは無駄な争いが嫌いだったし、人を殺すなんて出来るわけが無い。

「勇者を戦争に使ったとしたら」

王子が首を傾げて言った。

「どうなるのだ？」

カリーナが答えた。

「予想出来る事は二つありますね、一つに勇者は正義の象徴みたいなものですから、勇者が味方したコロナは正義であり間違っていない、カネスが悪であると他国から認識され、下手すれば他国全部を敵に回す事になります、もう一つは勇者を戦争に使うとは何事かと他国がコロナを敵と見なす事です」

ということとは。

「二分の一の確率で、何ら関係ない他の国が、敵か味方になるって事か」

「そうね、それでもあくまで推測、勇者が戦争に参加した事例は……無いわ」

「って事は結構やばいな」

「だからこそ、勇者が来る可能性は低いつて言ってるの、コロナ側も二分の一で他国全体を敵に回す事になりかねない、二分の一……いえ、コロナは他国から勇者の私物化を嫌われてるから、若干カネスに分があるわ、アリシア王女は利口だって聞いているし……勇者パティーが来る事は十中八九無いわね」

その時だった、下の方でまた騒ぎが聞こえる、突然響くはドタドタという足音、またもや騎士が現れ、その様子はほとんどパニック

になっている様だった、一度落ち着かせゆつくり話すよう言った。

「ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ！」

「湯？」

「油？」

「YOU？」

「勇者パーティーが門の前につっ！」

場が悪くなつた気がした、カリーナは明らかにふて腐れていたし、王子は怒っていた、王子はいつもの事なのでともかく、さつき中八九無い発言をしたカリーナの機嫌は顔に出ていた、それが普段はふて腐れるなんて事の無いカリーナだから少し怖い。

「来たではないか！来たではないか！どうするのだカリーナ！」

「すいませんでしたっ！！！」

思わぬカリーナの大声にビクリとする王子。

「ま……まあよい、今の問題は勇者だ、そもそも何故この城を狙うのだ！こんな城を狙うより、他があるだろうに！」

「それじゃあ、もう、この城は勇者に渡してしまったらどうです？
たいして役にも立たなさそうですし」

「この城はボクチンが勝ち取った城だ！後々チャプチョム城として

ボクチンの住処にする予定なのだ！」

でも城の所有権は、おそらくこの地の貴族にあるはずだ。

「この地の貴族に譲ってもらえますかねえ……それよりもまず王様が好き勝手させないかと……」

「うっ！確かに……カネシロの言うとうりだ……だがボクチンはだな！」

そこへカリーナが割って入る、イライラが混じる声だった。

「そんな話をしてる場合じゃないでしょう！」

「そうだった！こうなったらボクチン自ら相手を！」

気分で動くのが得意な王子にやる気が起こった、宣言すれば曲げずにやるのが王子の良いところでもあり、しかし今は悪い事でもあった。

「王子は下がっててください！」

「嫌だ！それにな、今のボクチンには自信があるのだ」

「先生、王子を押さえておいて」

カリーナは剣に手を掛けようとする王子の手を無理矢理、俺に握らせると、さっさと下に降りて行ってしまう、残ったのは王子の離せという言葉と妙に重い腕だけだ。

「置いて行かれた……」

ずるいぞカーリーナめ、ダダこねる王子を押さえつける役は嫌だつてのに……

私は石畳の廊下を歩き、階段を下りる、そして外に出ると、もう見えてきた、やっぱり小さい城だと思う、どう考えても奪われようが、わざわざ奪い返す意味が無いと、私の中で考えは固まっていた、だからこそ解せない、疑問は尽きない。

目の前の私を見据える勇者パーティー、たった四人で構成された少年少女は世界で一番有名であり、戦力があるパーティーだと、今回で二度目に対峙する勇者本人の異質ともいえる雰囲気、私の頭は勝手に理解していた。

世の中は良く分からないものだ、私と……一応先生にも勇者抹殺の命が魔族から下され、何時死んでもおかしく無いという状況で、先生はお金の事にしか目に行かないし、私は勇者の情報を何とか掴もうと努力するが、全て無駄に終わった。そのくせ、今回の戦争で忙しくなるだろうから、一端忘れようとする、これだ。

出したいため息を押さえつつ勇者パーティーに向かう、彼らの元へつくと彼らは訝しげにこちらを見つめた。

「すまねえ、責任者を呼んで来てほしいんだが……」

勇者パーティーは勇者含め男二人と女二人で構成されていた、がたいのいい勇者じゃない方の男が困った様にそう言う、責任者という単語に若干の違和感を覚えつつも、まあ間違っただけだと思い直し、私は一応、敬意を表す様に自分よりも年下……あるいは同じ年であろう彼らに頭を下げて自己紹介をした。

「初めまして勇者一行殿、私^{わたくし}カリナと申します」

情報をわざわざ渡す必要は無い、勿論、家名は隠しておいた。そして頭を上げ、向き直りこう言う。

「カネス王国軍の中将をさせていただいております」

私が笑顔を向けると、勇者パーティーは戸惑った様だった、そりゃそうだ、誰かに聞けば勇者パーティーよりも私の方が変な者だと判断するだろう、中將とは私の様な若い者が即ける地位では無いのだから。

「ふ、ふざけるな！」

気の強そうな女性が声を張り上げた、私に少なくとも好意は向けていない。

「どうかされましたか？」

「私達は本気で交渉に来たんだ！からかってるのか！？」

やはり信じていない、それどころか、からかわれてると思つてい
る様だ、交渉に来て私みたいな若者が中將を名乗ったら、怒るのも
分かるが…… 事実だ。

「私は間違いなく中將の地位を与えられています、それに、からか
つてなどいません、貴方たちを敵に回してメリットなどありません
から」

女性は収まったが、それでも不審に思っているらしい、しばらく
睨み付けられた。

「落ち着けてシャウラ」

シャウラと呼ばれたこの女性は深く深呼吸をした。

「大丈夫、落ち着いたよウエズン」

目の前の女性がシャウラ、がたいのいい男がウエズン、勇者が……
確かトウシン、そして余る一人がアリシア王女か……

「それで……今回は、どのような用件で？まさか旅の一服という訳
では無いですね？」

少し皮肉を込めて言うと、それにアリシア王女が強い口調で答え
た。

「あたりまえです！さつきもシャウラが交渉に来たと言いました！」

「交渉に？」

「そう、交渉です！」

あまりにも勝手だと思い、私は苦笑いを押さえられず顔に出てしまった。

「こちらの軍隊を倒しておいて？」

そう言うのと急にあたふたと慌て始めるアリシア王女、バレて無いとでも思ったのか、何気ない顔して交渉を持ちだして来た彼らを私は好きになれそうに無い、それに王子が城の中に居る、交渉となると城の中で将校が集められる事になるだろうし、王子はあの調子だと剣先を向けかねないし、そうなればカネスと勇者が敵対、なんて事になりかねない、とにかく交渉はよくない。

「交渉の余地はありません……………こちらは、あなた方のせいで多大な損害を受けているのですから、どちらかというと、あなた方には責任を取る必要がある様に思えます」

勇者パーティーの顔が曇る、だが勇者を除いて、だった。勇者は目を瞑り何かを考えるようにしていた私がここに来てから勇者はまだ一言も話して無い、何を企んでいるのか、早めに帰ってもらった方がよさそうだ。

「ですが、責任を要求するつもりはありません、問題にしたいくありませんから、問題になって勇者が戦争に参加していたなんて話が広まったら……………どうなるか分かりますよね、アリシア王女」

「……………」

「ど、どうしたんだアリシア、何か言い返して……………」

「少なくとも、どちらにしても、良いことは起きないって事です、それだけ、あなた方の影響力は大きいという事です、ですから速やかに下がっていただきたいんです」

私の言葉に一番落ち込みを見せたのはシャウラだった、肩を下げ俯く姿は少し罪悪感を覚えた、それでも手加減は出来ない。

「それでは」

勇者パーティーに背を向け、わざわざ足音が良く聞こえる様に足をついた、するとその時、後ろから声を掛けられる。

「ちょっと待ってくれ」

勇者の一言、それによって私の体は静止した。

「僕は僕達が、どれだけ人に影響力があるのかを知らない、だからアリシアが固まる理由も、カリナさんが僕達を避ける理由も分からない、でも……」

振り返って見ると、思わず息をのんだ、腰に差した勇者の剣と思われるものに手を掛け腰を低くしていた、居合いの構えだ。

「貴女が僕達と争いをどうしても避けたい事は分かる、これは頼みじゃない、脅しだ、僕達と交渉しろ」

正義の名を貫く世界の勇者様が脅し、異様な光景だと思った、それでも交渉を飲めじゃなくて、交渉しろって辺りは先生から聞いた通りの甘ちゃんだった。私は勇者に向き直すと動きの一つでも見逃

さぬ様、何が起きても動ける様に整えた、こうなつて来ると敬語も取り止めて言った。

「訊いてたよりバカね、一回引いて作戦会議の一つでもすればいいのに」

「仲間の落胆を放っておけるほど、賢く無いんだ」

私は杖を取り出した。

「私が避けたいのは、あくまで貴方がカネスと敵対するという事、私、個人としてなら相手するわ」

と、言つても勝てる可能性は少ない、それに私を倒した後で、他の責任者出てこいと言うかもしれないし、その時に将校達ならともかく、王子が出てくる可能性もある、色々と心配だ、殺しをしない相手が怖いなんて言う訳じゃないけど痛い目に遭いたくも無いし、出来れば残っておきたい、本当にどうしようかしら……

「離すのだカネシロよ！ボクチンは行かなければいけない！」

王子の巨体が力を発揮し俺の腕をすり抜けようとするが、妙に摩擦の高い王子の腕は易々と捕まえてられる、鬱陶しいのは偶に体をひねらせて抜けようとする事だった。

「イタタ……王子、腕をくねらせないでください……」

「じゃあ離せばいいだろうが！」

うーん、いつそのこと離したい、だって暇だし。下には刀神が居るが、ここでこんな事をするよりは何らかの出来事が起こっているであろう所に行く方が俺には魅力的に思えた、人間つまらない事をするのは体に毒だ。

でも王子が居るから行けない、さてどうしようと悩んでいると、頭に電球でも現れるかの如くナイスアイディーアが浮かんた。

「王子、紙か何か持ってますん？」

「いいから、はーなせ……紙？」

王子が呆氣にとられた様な顔をこちらに向けた。

「紙なんかどうするのだ」

「どうするか見せますから、貸してください」

王子は少々渋ったが、ポケットから手帳と万年筆を取り出した、どちらもまったく使った形跡が無いのがすごい、何で持ってたんだろう。

とにもかくにも、俺は手帳を開け万年筆のキャップを取る作業を片手で成し遂げ、手帳に魔法陣を書き込む、書き終わると、それを近くの壁に魔法陣が直接付く様に押さえた。

「はい、王子、ここに手を置いて、そして魔力を流してください」

「する訳が無いだろう！怪しすぎるぞカネシロ！」

「……………やってくれたら手を離しますよ」

王子は低く唸る、しばらく考えると決心したのか、手帳の表紙に手をついた、本型の手帳が王子の圧力によってペタンコになり、魔法陣が書いてある側は完全に壁と密着した。

次の瞬間、王子が魔力を流したのか一瞬の光があった、俺は素早く王子から離れると、俺の書いた錬金魔法陣が壁を物質と判断し、王子の魔力がエネルギーとなり、壁の形を変えていく、壁は双方から王子の手を巻き付ける様に変化すると、俺の計算した通りとなった。

「おい！カネシロ！早く直せ！腕が取られて動けんでは無いか！」

「でも手は離したでしょう、約束は破って無いですよ」

俺は自分でも気持ち悪いくらい笑顔になると、そのまま石畳の廊下を渡り階段を下りて行く。

にらみ合いが続いた、私の考えを読み取ろうとしてるのか、それ

とも只単に威嚇なのか、まったく分からなかった。

勇者が戦う意思をしめすと、三人はそれぞれ武器を取り出し、勇者と同じく私を睨んで見せた。

張り詰める空気、場所を移動せず、あえてここでやろうとするのは、私への嫌がらせの意味も含まれるのだろうか、しかし、もう動けない、いや動いてはいけなが正しいだろう、闇が使えない今の私にとっては勇者を除いても一人一人が強敵に思えた、勇者パーティーは勇者を除いても強いというのを、無理矢理、示された様で嫌になる。だから、皆、動かないのは強者の証、分かっているのだ、先に動いた方が……やられる……！

「ういゝつす」

ガツクリとズッコケそうになる、この緊張感に気づかず後ろからやって来たのは間違いなく先生だ、勇者パーティーは見事に緊張の糸が切れてズッコケてるのも居るし、まったく……王子はどうしたのか聞こうとしたけど、止めておいた、王子は自由にさせておけばこちらに来てしまうだろうし、王子が来てないって事は何とか置いてきたって事だ、それよりも勇者の反応が気になった。

「も、求！？」

モトムは先生の名前だったわよね、いつも先生って呼んでるし、最近王子がカネシロカネシロと呼ぶから一瞬分からなかった、それにしても、本当に勇者と知り合い……これは都合が良かった。

「ねえ、先生、知った顔なんでしょ、代わりに戦って来てくれない」

先生は何言つてんだという顔をする。

「戦わないようにするんじゃないのか？」

「いいから！どつか別の場所行つて、戦つて、出来れば勝つてきてちょうだい」

「え……俺は何か面白い事が起こつてゐるかなと……」

「一千万」

「やらせてもらおうじゃないか！」

ビシッと敬礼する先生を見て、ホロ口から受け取った三千万を先生に隠しておいて良かったと思う、でも一つの頼み事に一千万はもつたない気がするが、先生みたいな考え方を直ぐに振り切った。

「ちょ、ちょっと待て、求！何でこんな所に居るんだ！？どうなつてるんだ！？コロナ城に居るはずじゃあ！」

先生は機嫌良く笑つと勇者の肩に腕を回した。

「ハッハッハッハッハ！そんな事はどうでもいいだろう！？さあ、行こう！我らが戦いの場へと！」

そう言つと外へと陽気に歩いて行く、それに他の三人は慌てて付いて行つた。

勇者にあんな風に接する事が出来るなんて……どれだけ仲が良いのかしら……

三十四

城から出てきた男は明らかに敵だ、俺の直感がそう告げていた。だが、トウシンはその男を知ってる様で、それもあり親しいみたいだ。俺は普段なら簡単に人を敵視したりしない、どんな身なりをしてようが人間の本质なんて分からないものだ。優しそうな人間も犯罪を犯したりするし、傷だらけの顔の男だって動物を助けたりする。だから初対面の人間には公平に差別なんてせずに、お互いを尊重するようにしていた、それはトウシンだって同じだ。勇者はいい人だと皆が決めつけた中で俺はちゃんと対等に話した、出た答えは皆の言うとうりいい奴だった。

今回も同じように城から出てきた男をよく観察し、対等に意見を出し、相手の本質を見極めようとしたが、しかし、必要無かった。見た目は全体的に黒い服を着ていて歩くたびに、その妙にポケットの多い服はユサユサと小刻みに揺れていた。胸にはカネス軍のシンボルが目についた。だがそれだけでは敵視したりなんかしない、その男を敵視した理由は胸のシンボルでも怪しい服でも無い、その異常な目だった。

明らかにおかしい、到底トウシンと親しくなれるような人間では無い事を、その目は告げていた、汚れているというのか、黒く染まっているというのか、壊れているというのか分からない、ただ強い意志のようなものは感じて、それがより恐ろしく見えた、何なんだコイツ……

「おい……」

人が聞いたら顔を歪めるような、嫌な声が出た。

「お前、何なんだ？」

「何か、ずいぶんと嫌われてるな……そんなにカネスが嫌いか？」

「質問してるのはこっちだ、答えろ！」

男はこちらを睨み付けた後、トウシンに視線を向けた。

「おっと、紹介がまだだったね、こっちは……」

「モトムだ。カネシロでもモトムでも、好きなように呼んでくれ。あと俺はお前達みたいに敵意持ってないんで、よろしく」

「僕の、この世界に来る前からの親友だ」

この世界に来る前から？

「あー！思い出しました！」

隣に居たアリシアがとたんに大声を出すと、指を指して驚いていた。

「ど、どうしたのアリシア？」

「この人、勇者召還の儀式でトウシンさんに引っ付いて来た人です！トウシンさんと違っていきなり怒鳴りつけてくる野蛮人ですよ。気を付けてください！」

それにトウシンが苦笑いした。

「確かに少し気性は荒いけど」

「俺は動物か何かか？」

「でも、僕の一歩の親友だ、悪くは言わないでほしい」

一番の親友、その言葉に俺だけでなくアリシアやシャウラも多少のショックを受ける。そんな存在は俺達だけであると勝手に思っていたのだ、それが突然表れた妙な男に、持っていかれた。

そもそも、トウシンの親友なら何故力ネスに味方している。それすらも分からない、謎が多すぎる。

「さて！空気も悪くなった所で戦うか、一千万のために！」

空気を変えるような言い方だが、まったく変わらず嫌な空気のままだった。パシンツと手のひらを打ち笑みを浮かべるその男は、自分で言った一千万という言葉に喜んでるように見える。

「さあ、やるぞトウシン！覚悟はいいかトウシン！」

「大丈夫かモトム……？手加減するけど、ケガはするかもしれないぞ」

「死にはしないだろ、大丈夫だ」

なるほど……コイツはトウシンが人を殺せないのを知っている。だから余裕がある。勝とうなんてしてない、ただ形式的に戦って、形式的に決着が付けばいい、そう思ってる、気に入らない。

俺は男とトウシンを遮るように間に入った。そして男の方を向くと、胸ぐらを思いつきり掴んだ。

「おい、ウエズン!?」

「離せ、服が伸びるだろ」

男の目は冷たく俺を見据えていた、さらに強く掴み地面へと打ち付けた。

「俺はお前の全てが気に入らない、その目も態度も身なりも根性も、全てだ! 戦うなら俺と戦え!」

服に付いた砂を払いながら、男は立ち上がる。

「あーあ……お手製の服が……」

手にはいつの間にかナイフが一本握られていた。また妙な物だった、ナイフ自体は質の良さそうなもので、頑丈そうだが何故か細い糸のようなものが垂れ下がっていた。ナイフ使いと見ていいのか。

「なあ、保険入ってるか、保険」

ホケンという言葉は知らない。

「その様子だと知りもしないようだな。クリーニング代の見込み無しか……ハア、お前の血で洗濯が出来るわけでも無いし……」

今分かった、コイツ……挑発している。そしてそれは俺の挑戦を

受け取ったと同義だった。

「死んでも文句は言うなよ」

「こつちのセリフだ。てか弁償しろ弁償！裁縫出来ない俺が手間暇かけてわざわざ錬金術で作ったんだぞ、ポケット縫いつけるだけの作業を錬金術でやるのが、どれだけめんどろっか！」

ベラベラと五月蠅い奴だ。それに錬金術……コイツ錬金術師か、なら戦闘でナイフは納得出来る。大方護身用で持っているものだろう、構えもなつて無い、距離も詰めようとしない、そのくせナイフという武器を持っているおかげで自身がついている。典型的な素人と見た。

「ごめん僕が弁償するよ。ウエズンのことは許してやってくれ、いつもはお調子者のいいやつなんだ」

「マジで！？よっしゃ許そうじゃないかウエズン君！」

急に元気になった男を見て、俺は腸が煮えくりかえる思いだった。会って間もないが、ここまでそりが合わない奴は生まれて初めてだ。右の拳は硬く握られ汗がジツトリとしみ出していた。

このまま殴れば死んでしまうかもしれない。俺の武器はこの鍛え上げた拳だった。こんなやつ本気で殴れば一発だ。かまうもんか、この世には死んだほうがいい奴が居るということ俺はちゃんと知っている。トウシンにそんなことを言えば嫌われてしまうような考えだろう。けど事実だ。

俺の幼少の頃から鍛え上げられた体と多くの知識。そして一年前まで続けてきた盗賊の経験が目の前を全否定していた。俺は拳を振り上げた。

「俺の名前はウェズン！生まれながらの盗賊で、今はコロナ騎士団の全騎士長タウルの弟子！そして勇者パーティーの一人！冥途の土産に覚えておけ！」

「なんだとorraあああああああ！！！！？」

許せん！もし、後でお金あげるから見逃してあげてよう、なんて言われようが。いやーさすがモトムさんだ、まったくもって敵わない、そうだ僕の全財産をお譲りしますよ。と言われようが。君はすごい奴だよな、世界征服を成し遂げて世界一の大富豪で世界一の天才でダメダメな勇者の僕だけど一生懸命君のためだけに身を粉にして働くよ、エヘヘ……と言われようが。絶対に許せん！いや、最後はちよつと許すかだけでも、とりあえず許せん！

「俺の前で盗賊名乗って生きて残れると思——うべらっ！？」

グハア、やっぱり盗賊だけにロクなことしねえ。思いつきり左頬にパンチを食らわされた。思ったよりも強力だったみたいで、体が後ろに吹き飛んだ。後ろに飛んだらもちろん落ちる。受け身なん

て取りあえず転がれば受け身つぽくなるんじゃないか、ねえのくらいな感じでやってた俺にこの落ち方はまずい。見事頭から地面に直撃するとゴッソという硬い地面の音と共に頭が揺れるのを感じた。これ絶対、脳細胞損した！

「痛つてえええええ！盗賊野郎が！盗賊のクセに俺の減ることはあつても増えることは無い貴重な脳細胞をよくも！」

「俺はもう盗賊じゃない！盗賊と呼ぶな！」

オメーが自分で盗賊だつて言つたんだらうが！

「俺のパンチをくらつて、まだ生きてることは褒めてやる。だが、次で終わりだ！」

盗賊野郎は握り拳を目の前にもつていき、いきなりがに股になると、はああああ、と気合いを入れた。落ち着け俺、冷静になれ。俺が殺るのは刀神だけでいいはずだ。そうすれば一千万も手に入るし、あのギルが硬貨から紙幣になる事件のようなことが今後、起こらなくてすむであらう。

ところが、今の状況は何だ。目の前には今や右手がパンパンに筋肉でふくれあがつたがに股の盗賊野郎一人。こいつが盗賊な時点で殺すことは決定済みだが、こいつを殺せば刀神は怒り狂うだろう、それはキツツイ……ただでさえキツツイのに。

そして、まったく関係無いが、力を溜めていざ必殺技を出さんとする主人公を待つ敵の気持ちがかかってしまった。あまりのがに股に驚いてたんだよ！

「うおおおお！豪腕の槍！」

こちらに向かってくるがに股は（おめでとう盗賊野郎はがに股に進化した）腕を振り上げ突きをするようである。そんなもんを真っ向から受け止めるほど優しくない俺は横に飛ぶ形で避けた。

後ろのほうでクソッなんて声が聞こえた。俺はすぐさま右手でナイフを握りしめ、近くに居たアリシア王女を左手で掴むと首に手を回し、ナイフを突きつけた。

言うなれば人質である、この甘ちゃん共には人質さえ取れば大丈夫だというのが俺の判断だ。さっきから人質だというのに頭でガンガン攻撃してくることを除けば俺の計算通りである。

「アリシアを離せ！」

がに股が睨みながら言ってくるが、俺はチラリと刀神のほうを見た。喚いている女やがに股と違い余裕綽々で腰の刀さえ抜かずこちらを黙って見ている、やっぱり不服そうだ。しかし、手を貸さないところを見ると、まだ様子見といったところかな？

「人質なんて汚いぞ！」

「汚い？殺し合いに汚いもクソもあるか。勝ちやあいんだよ勝ちやあ」

この有利な状況と典型的な悪役のセリフによって俺のテンションがおかしなものになっていることは言うまでもない。

「ウエズンさん私は大丈夫です。早く豪腕の槍を！」

「そんなこと……そんなこと、出来るワケないだろうがっ！」

「ハーツハツハツハツハ！そうだ、その女」

俺は今にもアリシアさんが腕から離れようものなら、すぐにでも殺してやると言わんばかりの目を向ける女を顎でしゃくった。

「お前だ、お前」

「……何だ！」

「そいつを殺せ」

女の顔が張り詰めたものになった。そいつとはもちろん、がに股のことである。さすがにこの状況でがに股と言うのは格好悪い気がしたのは当然といえた。

「さあ、早くし……」

「待て」

え……………やばい、マジやばい。刀神がこちらに近づいて来る。しかも怒ってるみたいだ。いや、落ち着け俺、こっちには人質があるんだ、早々やられたりするもんか。

「お、おっと、それ以上、近づくなよお！」

「求……さすがに聞き捨てならない。人質も立派な戦法だし、二人の戦いだと思って見てたけど、殺しを僕の仲間に強要するな……もうガマンならない、少し罰を受けて……もら……う……？」

何か知らんが柄に手を掛けたままポカンとした表情のまま動けなくなった。いや、ほんとどうした、こっちとしてはありがたいんだ

けども。よくよく見れば、がに股も、その隣に居る女も、同じ表情をして、どこか上のほうを見ている。意味が分からないのは俺とアリシアさんだけである。

もしこれが、俺の気を逸らすための作戦ならとんだ茶番だ。

「おい、俺はそんなのに騙されないぞ」

返事は無い。そうですか無視ですか、そりゃご苦労なことて。

「無視すんな、もういいから、俺を油断させる作戦大失敗だから」

「こんな作戦知りませんよ……後ろ向くなり離すなりしてください、すごく気になるんですけど……」

「はっはゝん、その言葉も作戦の内だな。騙されると思う……カアアアアアア!?!?」

後ろからきたのは風、風、風。ものすごい突風が俺の背中に突き刺さり、前に倒れそうになった。細かい砂は靴に入るし、小石は背中当たって痛いし、目の前の三人は魔法で透明な盾出して塞いでるし、アリシアさんは俺に守られる形になったし。結局俺だけが被害を受けてしまった。カラスみたいな声が出たのも仕方ないな、うん、仕方ない。

風が鳴りやむと、俺はアリシアさんにナイフを突きつけたまま一緒に後ろを振り向いた。見えたのは赤色一色。茶色に近いその赤に一瞬、岩でも振ってきたのか思ったほどだ。いや、岩なんてかわいもんである、恐る恐る上を見上げると巖つい頭が一つ、こちらを見ている。

「ウエエエエエエエ!?!?!?」

大きな大きなドラゴンでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3986p/>

セコくて何が悪い！！

2011年8月22日09時56分発行